



神秘学ポエジー 風遊戯
mediopos
132

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 269集】 media-poesieヴァージョン

mediopos 3276-3300

2023.11.6～ 2023.11.30

神秘学遊戯団

地図とはなにか
地図に示されている地点とは
なにを示しているのか

東辻賢治郎「地図とその分身たち」の連載24回目は
映画『未知との遭遇』の物語から
わたしたちの地図との関係を考えさせてくれる

映画『未知との遭遇』では
「予定されたある時点、ある地点で三つの集団が合流する」

「三つの集団とは、
形象（イメージ）によって
その地点を指示された者（ロイ）の集団、
座標によって指示された者の集団、
および前者にそれらの指示を与えた者」

最初の集団は
「UFOとの接近遭遇への
オブセッションを抱えることになった人びと」
ふたつめの集団は
フランス人のUFO研究者の集団
そして三つ目の集団は
宇宙船で地球を訪れた知的生命体である

「ロイの車がまともな方向に走り出すのは、
彼が地図を見ることを放棄したときだけ」であるように
私たちは「地図と世界を同時に見ることはできない」

GPSにせよ紙の地図にせよ
「投影と編集とフレーミングの産物」としての
虚構（フィクション）である

どんなにそれらが役に立つものであろうと
それは抽象化された虚構であり
それはいま目の前に現れている
あるいはじぶんがいまここにいることは
「同時」には成立しない

少し飛躍するが
「予定されたある時点、ある地点」へ至り
「未知」と「遭遇」すること
そして「遭遇」するために導かれるということ
ある意味で禅でいう「啐啄同時」的なことだろう
あるいは禅僧が指先で「月」を指すようなこと

導くための地図は
あくまでも地図に過ぎない
言葉や概念そして理論なども同様だろう
「遭遇」するためには地図から離れなければならない

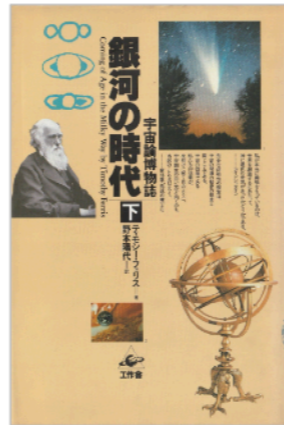
「汝スプーン（匙）となるなかれ」
という言葉のように
スプーンはスープを口に運ぶが
みずからスープを味わうことはできないままなのだ

宇宙に視線を向け
宇宙の起源やさまざまな謎を探求する際
宇宙のどこかにいるかもしれない
知的生命体との接触も想定されていたりもし

ビッグバンからの宇宙の起源から現在までや
宇宙の地図も描かれたりもするが
そうした探求もまたおそらく同様ではないか

宇宙への探求は
人類が宇宙のなかでいまどこにいるのかを
明らかにしたいということからなされるのだろうか

人類がどこにいるのかを
GPS的な地図で確認し示したところで
その「場所」が「どこ」なのか
意味を持ち得るだろうか



■東辻賢治郎「地図とその分身たち」@カルトグラフィック・シネマ
（群像 2023年11月号）
■ティモシー・フェリス（野本陽代訳）
『銀河の時代（上・下）』（工作舎 1992.6）

そもそも私たちにとって
宇宙のなかでの「いま」「ここ」は
いったい「いつ」で「どこ」なのか
たとえ座標軸のようなもので示されたとしても
その座標軸そのものが何を意味しているのか
それがわからないかぎり「遭遇」にはならないだろう

ひょっとしたら私たちは
いまここで常に
「未知」と「遭遇」を続けているにもかかわらず
それに気づけないままにいるのかもしれない

それに気づくために「地図」はあるが
「地図」が示してくれるだけでは
「遭遇」するには至らないのだから

- 東辻賢治郎「地図とその分身たち㊦カルトグラフィック・シネマ」（群像 2023年11月号）
 - ティモシー・フェリス（野本陽代訳）『銀河の時代（上・下）』（工作舎 1992.6）
- （東辻賢治郎「地図とその分身たち㊦カルトグラフィック・シネマ」より）

「予定されたある時点、ある地点で三つの集団が合流する。三つの集団とは、形象（イメージ）によってその地点を指示された者の集団、座標によって指示された者の集団、および前者にそれらの指示を与えた者である。三者にはその地点を目指す三者なりの理由が与えられている。映画『未知との遭遇』（スティーヴン・スピルバーグ、一九七七年）はそんな物語である。

第一の集団は、この映画の実質的な主人公ロイ・ニアリー（リチャード・ドレイファス）を含む、U F Oとの接近遭遇へのオブセッションを抱えることになった人びとである。彼らにはその岩山が何を意味しているのかわからない。にもかかわらず、あるいはだからこそ、その岩山の実在を知った彼らは是が非でもそれを目指すとする。

第二の集団は、フランス人のU F O研究者ラコーム（フランソワ・トリュフォー）を代表とする研究者たちの集団、および彼らに現実的なオーソリティを与えている政府と軍である。彼らはU F O事象の調査や地球外の知性との接触に血道を上げているが、その意図や目的は、少なくとも彼ら自身のコミュニティを除いては映画の観客を含めて誰も明らかにされない。彼らは平時の市民的理性とは異質の企みを抱いた、匿名的で不透明な集団として描かれている。

そして第三の集団は宇宙船で地球を訪れ、場所を指定して人類との接触を準備する知的生命体だが、彼らの意図や目的もまた明らかにはされない。彼らが「呼ぶ」前期の二つの集団および映画を観る者にとっては、彼らの存在こそが謎であり、すべてのオブセッションの源である。

つまり彼らはみな、それぞれに特殊で説明のされない欲求や行動原理をもっている。それは最大公約数的かつ人間的ない方をすれば好奇心なのかもしれない。」

「映画の全編を通じてラコームの通訳を務めることになるデヴィッド・ロフリン（ボブ・バラバン）は、この映画の主要な登場人物の中でただひとり正気を保っているように見える。（…）冒頭で証されるのは、そんなロフリンがもともと地図製作者だったことだ。（…）

ロフリンが地図の作製を仕事にしていたという前提は、研究者が受信した数字の羅列が経緯度であることを彼が見出すという、映画の中の少し後の出来事の体験になっている（「フランス語通訳で雇われる前には地図を読んでいたのですが、この最初の数字は経度ですね」）。ワイオミング州のその地点は、まず経緯度の数字として、次いで地球儀の上で、最終的に軍の管理をする詳細な地形図の上で確定される。それはデビルスタワーという名の岩山に一致する。

もう少し踏み込んでいえば、地図製作者が物語の前提として登場することは、岩山の形象に取り憑かれたロイ・ニアリーが理由もわからないままにデビルスタワーにたどりつく条件にも関わっている。なぜならテレビの画面でその岩山が実在することを知ったロイは、自動車に乗り、道路地図を見ながら現地を目指すことになるからだ。地図は地図をつくる者がいなければ存在しない。ただし、それらの地図が妄執に囚われたロイのよき導き手になってくれるかといえば、必ずしもそうではない。」

「ロイの地図は常に彼を混乱させ、目の前にあるものを見過ごさせる。地図がどこかにたどり着こうとする彼を導いているのか、それとも妨害しているのかも判然としない。ロイの車がまともな方向に走り出すのは、彼が地図を見ることを放棄したときだけだ。そのことはかなり明確に画面の中に表現されている。陳腐ないい方をすれば、視界に重ねるように広げられるそれもまた、映画のスクリーンのように目を奪う虚構（フィクション）なのだ。そもそも地図もまた投影と編集とフレーミングの産物なのだから。」

「この映画には、それぞれに地図との関係を生き、それゆえに地図をつくる者によって媒介され、結びつけられる者たちの物語が内包されている。影のように随伴する通訳＝地図製作者と、スクリーンにちりばめられた数葉の地図が想像させるのはひとまずそんなことだ。さらに連想を広げるならば、無限遠の空という、映画におけるいわゆる神の視点にあるU F Oの所在が同時に地図の視点であることも指摘できるかもしれない。地球の座標系を知悉しているばかりか、地上を暗闇に変えた後、自在に光の線を復活させてゆくそれが地図を描く存在と無縁であると信じることも難しい。」

「なお一九七七年のロイの不満に端的に表現されていた、私たちが地図と世界を同時に見ることができないという事情は現代においても変わっていない。現代の車内では地図が紙からスクリーン上の画像に変わり、G P Sがリアルタイムに現在地を教えるようになった。映画で流れていたカーラジオや無線の代わりに音声ナビゲーションが運転を指示し、視界を遮る不透明な地図の代わりにヘッドアップディスプレイの類が情報を投写する。しかしそれらはやはり聴覚や視覚の代償を必要とする。」

（ティモシー・フェリス『銀河の時代』（下）～「第18章 宇宙の起源」より）

「人間は昔から、宇宙の起源についてあれこれと考えるのをつねとしてきた。それは、人間という種の出生証明がないからだ、と私は思う。私たちは自らの出生を捜すようにできており、そうする過程で、自らがその一部であるもっと広い世界の起原をも考えなければならないことに気づくのである。しかし、考え出された宇宙創造説は、それが記述しているはずの宇宙よりも、私たち自身について多くを語っている。程度の差こそあれ、すべての推論が心理状態を反映しており、走馬灯に写し出される踊る影のように、精神から空へと外に向けて投影されたパターンである。」

（ティモシー・フェリス『銀河の時代』（下）～「第19章 精神と物質」より）

「精神と宇宙との関係をどれだけ理解できるかは、私たち自身と比べることのできる、ほかの知的な種と接触できるかどうかにかかっているのかもしれない。」

「最近地球外生命に興味が集まっているのは、ほかにも新しい理由がいくつもあるがとくに、精神といった非現実的な概念にたよらずに、事象を物質との相互作用だけで説明できるという哲学的教義、唯物論が栄え、近年大勢をしめるようになった結果であると見ることができる。」

（ティモシー・フェリス『銀河の時代』（下）～「第18章 宇宙の起源」より）

（ティモシー・フェリス『銀河の時代』（下）～「第19章 精神と物質」より）

（ティモシー・フェリス『銀河の時代』（下）～「第19章 精神と物質」より）

（ティモシー・フェリス『銀河の時代』（下）～「第19章 精神と物質」より）

「精神と宇宙との関係をどれだけ理解できるかは、私たち自身と比べることのできる、ほかの知的な種と接触できるかどうかにかかっているのかもしれない。」

「最近地球外生命に興味が集まっているのは、ほかにも新しい理由がいくつもあるがとくに、精神といった非現実的な概念にたよらずに、事象を物質との相互作用だけで説明できるという哲学的教義、唯物論が栄え、近年大勢をしめるようになった結果であると見ることができる。」

（ティモシー・フェリス『銀河の時代』（下）～「第20章 なくなる謎」より）

「この本のなかで私は、地球というささやかな世界の住人である私たちが、（はるかに）大きい宇宙の確かな姿を、どのようにしてつなぎあわせていったかについて述べた。私はこの過程を「思春期」と表現したが、それは、何世紀にもわたる断続的な努力によって私たちが、宇宙についての基本的な事実のいくつかを、ついに理解し始めたことを意味している。」

「それでも、私たち人間が宇宙について知れば知るほど、いかに自分の知識が限られているかわかるようになる。」

「談 no.128」の特集では
シュルレアリスムのオートマティスム（自動記述）が
現代のAIとの関係を踏まえながら論じられている

『シュルレアリスム宣言』を行ったアンドレ・ブルトンが
シュルレアリスムを
「心の純粋な自動現象であり、それを通じて口述、記述、
その他あらゆる方法を用いつつ、
思考の真の働きを表現することを目標」とし
理性による一切の統御をとりぞき、
審美的あるいは道徳的な一切の配慮の埒外で行われる
思考の書き取り」であるとし
それに基づくオートマティスム（自動記述）を試みた

オートマティスムとは実際のところどういうものであり
シュルレアリスムにおけるそれはどんな試みだったのだろう

「談」のチーフ・エディター佐藤真氏によれば
オートマティスムとは
「「私」はもう一人の「私」と対峙することにより、
二重に、三重に重なり合った、
すなわち幾重にも重なり合った
層としての私自身を発見することになるように
「私」のドゥーブル（複製: double）を
「私自身」のなかに見出し、
機械的に生成するプロセスだったのではないか」という

シュルレアリスム研究の鈴木雅雄氏は
「シュルレアリスムの展開には、
「コントロールできないかたちで
何かに向こうからやってくる」という
オートマティックな体験こそが重要だという発想が、
その根本のところにもあった」としているが

「AIによって生成されたテキストは、
自分がつくったものでも、
他の誰かがつくったものでも」ない
「そういうわからないものと付き合うこと自体、
ひどくシュルレアリスム的な経験ではないか」という

とはいえ言語学の川添愛氏によれば
たとえばブルトンが
オートマティスムによる創作を初めて行った
『溶ける魚』のようなテキストは
AIによる生成での詩作・創作とはどこか異なっている

ひとには「不完全な言葉でコミュニケーション」を
行わざるをえない「人の個性」と言葉の曖昧さがあるため
「もう一人の「私」と対峙する」ことで
生成されてくるものとAIによる生成とは異なるのだ

シュルレアリスム研究の中田健太郎氏によれば
わたしたちは「自動的なシステムやAIの存在感」を前に
「自分の意識によって統御できる領域が小さく」なり
「自分が意識的に伝えたい真意の力、隠喩的な表現の力が
弱まっていくように感じられる」ようにもなるが

別の観点からみるとオートマティスムによって
「それを発した時点では気が付かなかったような意味」を
見出す可能性もそこにはあり
そうしたシュルレアリスム＝オートマティックな実験を通じ
「むしろオートマティックなシステムとの関係のなかこそ、
未来の「人間らしさ」が問われなければならない」のだという



- 談 no.128 「特集●オートマティスム...自動のエチカ」
(水曜社 益財団法人たばこ総合研究センター 2023/11/1)
- アンドレ・ブルトン (巖谷國士訳)
『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』 (岩波文庫 1992/6)



私たちはすべてを自分の意識で統御し
表現を行っているわけではない
私が表現するといっても
私のなかには私の知らない私がい
オートマティスム的な試みによって
多層をなしている「私自身を発見する」可能性も得られる

AIを信仰するかのよう
オートマティスムに依存しまえば
「人間らしさ」は失われてしまうことになるが
人間の潜在能力をひらくものとして活用するときには
そのことで未来の「人間らしさ」を問うこともできる

そこにかつてのシュルレアリスムの試みを
新たに捉え直すことの意味もあるのだろう

- 談 no.128 「特集●オートマティズム…自動のエチカ」（水曜社　益財団法人たばこ総合研究センター 2023/11/1）
- アンドレ・ブルトン（巖谷國士訳）『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』（岩波文庫 1992/6）

※「企画趣旨」より

「アンドレ・ブルトンは、『シュルレアリスム宣言』において、シュルレアリスムを次のように定義した。「（シュルレアリスム）は、心の純粋な自動現象であり、それを通じて口述、記述、その他あらゆる方法を用いつつ、思考の真の働きを表現することを目標とする。理性による一切の統御をとりのぞき、審美的あるいは道徳的な一切の配慮の埒外で行われる思考の書き取り」である。ブルトンは、宣言を起草する以前から、オートマティスム（自動記述）による試作を行っていた。それは眠りながらの口述であり、思考より早い速度で書く試みであった。これは無意識や意識を排した状態を自らに課し、いわば狂気の側に身を委ねることを目標とされた。しかし、ブルトンの本当の狙いは、じつはその先にあったのだ。狂気を飼い慣らすこと。つまりただ単に非理性的なものに表現力をもたせるだけでなく、これを生産的、あるいは創造的な行為に転嫁させる知的営為だったのである。自動化の問題系にあえてオートマティスムを召喚させる。理性と非理性の相反する二状態を同時並行的に生きること。それは、自動化それ自体を換骨奪胎することだ。」

（佐藤真「editor's note　宙吊り状態は、今も続いている」～「未来にだけ窓を開く」より）

「ブルトンは『シュルレアリスム宣言』（1924年）のなかでシュルレアリスムの定義付けをしています。それによれば、「シュルレアリスム、男性名詞。それを通じて人が、口述、記述、その他あらゆる方法を用い、思考の真の働きを表現しようとする、心の純粋な自動現象オートマティスム。理性によるどんな制約もうけず、美学上ないし道徳上のどんな先入主からもはなれた、思考の書き取り」と定義されますが、それはそのままオートマティスムの定義にもあてはまりそうです。事実訳者の巖谷國士氏は、『シュルレアリスム宣言』とは、『溶ける魚』（初めてのオートマティスムによる創作）の序論に過ぎなかったのではなかるうか、と述べています。ブルトンは、また同書で「超現実的言語の諸形態でいちばんよく適合するのは、やはり対話においてである」と言っています。ただ、巖谷氏はその言明に納得しながらも、次のように付記します。「フィリップ・スーポーとブルトンとが向かい合って、あの自動記述の最初の実験であった『磁場』（1919年）の原稿を口述している有様を思い浮かべがちであり、事実またこの本のなかで両者の言葉のやりとりは大きな役割を占めているのだが、しかし、そういう実際の局面をはなれて、もっと本質的な対話、つまり、私のなかのもうひとりの〈私〉との対話という見地を、ここに加味しておく必要があるのではなかるうか」と。通常対話とは、自己と他者あるいは他者と他者の間で行われるものです。しかし、ブルトンは『宣言』において、それとは異なる対話の位相を提示しています。「私」が「私自身」と対話するというのです。フランスの批評家ミシェル・カルージュは、ブルトンとのディスカッションのなかで、オートマティスムの体験とは次のようなものだとして述べています。「それは独白であるよりもむしろ、意識の人間と、その反対に秘密裡に全宇宙と交流している彼自身の失われた部分とのあいだの対話に他ならない」。もとより問題は、領域の区分ではない以上、ここまで図式化するのは適当ではないかもしれません。「オートマティスムの実践というものが、〈私〉との対話、一種の存在論的ディアローグの体験であったことは、明らかである。それも何かしら空漠とした、たとえばジョルジョ・デ・キリコの（絵画のなかの）街角のような、あるいはゴシック・ロマンスの城の広間のようなひとけのない場所で、裾こだまのような尾をひいてひびきあう、多くははかばかしい手ごたえのない、自分自身とのはてしない対峙とも言うべき体験だ」というのです。

「オートマティスムとは、少なくともその原則において、予定された何かを書くことへの拒否であったと言えるだろう。しかもなおそれが何かを書いてしまうのだとすれば、それはいわば、書くいう行為自体をこそ書いてしまっているのだ、と言える場合があるのではなかるうか」。たとえば、シュルリアリストの画家イヴ・タンギーの絵が、予兆そのものと化した元素たちの風景をとおして、何か営々として描く行為自体を描いているように見えるのと同様に、ブルトンの詩にもまた、しばしば、こういう言い方を比喻以上のものと思わせるような傾向が見て取れそうだと言い、こう結論付けます。

オートマティスムとは、「要するに、〈私〉を容器として開け放ち、何らかの客観的な〈私〉をそこに呼び込む行為なのだとすれば、ブルトンの作品がとするとひとけのない城、町、森のような空間を擁し、〈期待〉をこそその主たる情緒としていたのも当然であろう。これを一種の普遍的意識、客観的意識の介入にそなえるありかたと考えて、たとえばランポーの、〈誰かが私において考えるOn me pense〉の方法をそこに見ることができらるうか。いやこの場合、そうした〈誰か〉の正体そのものよりも、私と不可分なその〈誰か〉と私自身との葛藤、あるいはその〈誰か〉の介入による、私と私とのあいだの葛藤の方が重要なだ」というのです。

「こうして二分されてしまった私と私とのあいだの、ときには悲劇的な、ときには滑稽な、ときにはグロテスクなものですらある対話、私の中の主役と敵役との、シテとワキとの鎭しのぎをけずるやりとりとしての対話―――それをまさに言語の場としての発生の現場でとらえ、直接的な人生の舞台の上でくりひろげてゆく、いやむしろ、自らが演者でも観客でもあるようなかたちで、それを体験してゆく」というのが、いわばオートマティスムという方法の極限的状态だったのではないか。そして、おそらくその状況下において、「私」はもう一人の「私」と対峙することにより、二重に、三重に重なり合った、すなわち幾重にも重なり合った層としての私自身を発見することになるのです。あたかもミルフィーユのような「私自身」という「私」の実相に。オートマティスムとは、多少の言い過ぎを許してもらおうとすれば、「私」のドゥーブル（複製:double）を「私自身」のなかに見出し、機械的に生成するプロセスだったのではないか、と思われるのです。」

（佐藤真「editor's note　宙吊り状態は、今も続いている」～「人間機械論の隘路」より）

「今号は、シュルレアリスム=オートマティスムを取り上げます。ここで、自動化は超自動化へと生成変化します。20世紀のさまざまな文化運動のなかでのシュルレアリスムの特異性は、「作品」や「理論」の内容以上に、あらゆる種類の呼びかけに応じようとする執拗な身振りのうちにあったのではないかというのは、早稲田大学文学部教授の鈴木雅雄氏です。アンドレ・ブルトンとポール・エリュアールによって著された詩篇『処女懐胎』は、精神障害者の言説の偽装実験だったことはよく知られています。精神障害者の言葉を到達不可能なものとして聖別するのではなく、しかしそこから何らかの要素や方法を抽出して利用するのでもなく、それを一つの呼びかけとして受け取り、いわばそれにシンクロすることで応じようとする実験だったというのです。偽装されるものと偽装の結果との間に生じるさざ波のような何か。この呼びかけと応答のプロセスそれ自体がシュルレアリスムの運動だったと論じる鈴木雅雄氏にシュルレアリスムとオートマティスムの関係についてお聞きします。

機械学習の基本的な方法は、機械にやらせたい仕事を人間が定義するところから始まります。それに合わせてデータを集め、機械に翻訳の仕方や音声・画像認識の仕方などを学習させる。この方法は、人間が定義できて、かつデータが集まりやすい仕事であれば非常にうまくいきます。今後も発達していくことが見込まれます。しかし、「笑わせよう」とか「泣かせよう」とする意志や欲求、感情をAIにもたせるのは、機械学習の方法では限界がありそうです。そもそも何ができれば「意志」をもつことになり、何ができれば、「欲求」や「感情」をもったことになるのか。肝心の定義が難しい。ましてや自動記述など夢のまた夢のように思えます。シュルレアリスムの詩的实践である『溶ける魚』をAIは書くことができるでしょうか。作家で自然言語処理を研究する川添愛氏にお聞きします。

詩作や芸術制作におけるオートマティスムの働きにかんして、何らかの事前の意味の存在を前提とする考え方と、意味はオートマティスムの作用を通じて事後的に生成するとする考え方の両方がブルトンのなかに認められる、というのは静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科学講師の中田健太郎氏です。前者の考えに従う場合、「意味」が由来するさまざまな場所が想定されることに中田氏は着目し、初期のブルトンが、オートマティスムを作者が属する経験的世界の「外部」から届けられる「声」と関連付けて語る一方で、それとは正反対に、超自然的な「外部」を排除して、あくまで主体の内面にその由来を求めることもあったというのです。そして、この両義的姿勢にブルトンの特徴を見出せるのではないかというのです。「意味」をめぐるこの二つの考え方を、言語学者ロマーン・ヤーコブソンの二分法にしたがいが、「隠喩的」なそれと、「換喩的」なそれと中田氏は名付けます。そして、精神分析の自由連想法に由来する「隠喩的な解釈可能性」と心理学・精神医学における「換喩的な言語の増殖」のいずれもがオートマティスムのなかに散見でき、換喩から隠喩への移行こそがオートマティスムの特徴だというのです。オートマティスムの誕生とその変遷について、オートマティスムの多義性という観点から捉え直します。」

（鈴木雅雄「呼びかけに応じる、しかし、何の？」より）

「シュルレアリスムの展開には、「コントロールできないかたちで何かが向こうからやってくる」というオートマティックな体験こそが重要だという発想が、その根本のところにもずあった。それを「書く」ことから「日常生活」へ、「社会」へとどんどん広げていった、と、図式的にはそんなふうに捉えられると思います。」

「20世紀のさまざまな文化運動のなかでのシュルレアリスムの特異性は、「作品」や「理論」の内容以上に、あらゆる種類の呼びかけに応じようとする執拗な身振りのうちにあるものだったと鈴木氏はいう。シュルレアリストのアンドレ・ブルトンとポール・エリュアールによって著された詩篇『処女懐胎』は、精神障害者の言説の偽装実験だったことはよく知られている。精神障害者の言葉を到達不可能なものとして聖別するのではなく、しかしそこから何らかの要素や方法を抽出して利用するのでもなく、それを一つの呼びかけとして受け取り、いわばそれにシンクロすることで応じようとする実験だった。偽装されるものと偽装の結果との間に生じるさざなみのような何か、この呼びかけと応答のプロセスそれ自体がシュルレアリスムの運動そのものだったのだ。」

「シュルレアリスムのオートマティスムは、「自分のなかから出てきているけれども、自分にとって他者のようなものとして現れる」というものですが、たとえばコンピュータによって可能になる自動性は、私たちにとってどのように現れるでしょうか。今流行りのAIによって生成されたテキストは、自分がつくったものでも、他の誰かがつくったものでもありません。でもメチャクチャではなく、あるプロトコル、ある論理にしたがってつくられている。しかしそれがどんな論理によるものかは、私たちは、本当はよくわかっていない。だからそれは、今日お話ししてきたようなオートマティスムとはまったく違うようでもあるけれど、他方ではそういうわからないものと付き合うこと自体、ひどくシュルレアリスム的な経験ではないかとも感じます。それは将来的に、私たち人類がロボットとどう付き合うか、といった問題にもつながってくると思います。」

○鈴木雅雄（すずき・まさお）
1962年東京生まれ。早稲田大学文学部教授。専門はシュルレアリスム研究、イメージ文化史、近現代フランス文学。東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程満期退学。パリ第7大学文学部博士課程修了（文学博士）。著書に『火星人にさよなら：異星人表象のアルケオロジー』（水声社　2022）、『シュルレアリスム、あるいは痙攣する複数性』（平凡社　2007）、編著に『シュルレアリスムの射程：言語・無意識・複数性』（せりか書房　1998）他。

（川添愛「生成AIは「溶ける魚」を書けるだろうか」より）

「もしかしたら他人に役割を課すこと自体が、人をAI化したと思うことにつながるのではないのでしょうか。会社や組織のなかで、人に「あなたはこれをして」「あなたはこれをして」と役割を振る時は、構成員が組織に一体化して完璧に仕事を遂行することが期待されますよね。それは、その人の機械的な面に期待していることになると思うんです。」

「機械学習の基本的な方法は、機械にやらせたい仕事を人間が定義するところから始まる。それに合わせてデータを集め、機械に翻訳の仕方や音声・画像認識の仕方などを学習させる。この方法では、人間が定義できて、かつデータが集まりやすい仕事であれば非常にうまくいく可能性が高く、今後も発達していくことが見込まれる。しかし、「笑わせよう」とか「泣かせよう」とする意志や欲求、感情をAIにもたせるのは、機械学習の方法では、到底無理である。そもそも何ができれば「意志」をもつことになり、何ができれば、「欲求」や「感情」をもったことになるのか。肝心の定義が難しい。ましてや自動記述など夢のまた夢である。シュルレアリスムの詩的实践である『溶ける魚』をAIは書くことができるだろうか。」

「社会の効率化を極限まで追求するのであれば、「人と完全にわかり合う」ことはすごく重要になりますね。とくに、世の中を自分の思っている方向に動かしたい時には、他人にも同じ方向に向かってくれることを期待してしまう。自分が良いよ思っていることをみんなも良いと思っしてほしい、自分がこうだと言っていることを相手にもちゃんと理解してもらって、そのとおりに行動してほしい。でも、それは人の個性を無視してロボット化することにつながりかねない。それに、実際に人間は一人ひとり違いますし、また言葉はどうしても曖昧で不完全なものですから、「完全な相互理解」はできないと思うんですよね。結局のところ、私たちは不自由さを感じながら、不完全な言葉でコミュニケーションをして、「きっとみんなと一緒に辿りつける未来がある」という幻想を共有しながら生きていく。みたいなことになるのかなと思います。」

「たとえば仲の良い人と今晚の予定を話す時に、ただ「飲みに行く？」と聞けるのって、すごく完結じゃないですか。主語や目的語を省略できない言語だったら、「あなたは私とお酒を飲みに行く？」と言わなきゃいけない。「飲みに行く？」「うん、行く」で済むのって、すごく楽ですよね。こんなふうに、曖昧さを許しているがゆえに、コミュニケーションしやすくなっている面があります。そこは曖昧さの二面性ですね。誤解を招くかもしれない面と、スピーディーにコミュニケーションがとれる面があって、面白うところだと思います。」

○川添 愛（かわぞえ・あい）

1973年長崎県生まれ。作家。専門は、言語学、自然言語処理。九州大学文学部文学科卒業。同大学大学院、南カリフォルニア大学、京都大学大学院にて理論言語学を専攻。博士（文学）。著書に『言語学バーリ・トゥード：Round1 AIは「絶対に押すなよ」を理解できるか』（東京大学出版会　2021）、『ふだん使いの言語学：「ことばの基礎力」を鍛えるヒント』（新潮社　2021）、『ヒトの言葉 機械の言葉 「人工知能と話す」以前の言語学』（角川新書　2020）、共著書に『私たちはAIを信頼できるか』（文藝春秋　2022）他。

<p>（中田健太郎「換喩から隠喩への逢着あるいはオートマトィスムの多義性」より）</p>
<p>「「超現実」は、いろいろなのがロボットやA Iに置き替わりつつある、われわれが今生きるこの世界にも見られます。それは、非現実的な夢の世界ではまるでなくて、非常にきびきびと動く、新しいリアリティをもった世界だと思います。かつてわれわれ人間がやっていたことを「過剰に合理化」している、オートマツトにあふれた世界です。」</p>

「詩作や芸術制作におけるオーテマトィスムの働きにかんして、何らかの事前の意味の存在を前提とする考え方と、意味はオートマトィスムの作用を通じて事後的に生成するとする考え方の両方がブルトンのなかに認められると中田氏はいう。前者の考えに従う場合、「意味」が由来するさまざまな場所が想定されることに中田氏は着目し、初期のブルトンが、オートマトィスムを作者が属する経験的世界の「外部」から届けられる「声」と関連づけて語る一方で、それとは正反対に、超自然的な「外部」を排除して、あくまで主体の内面にその由来を求めることもあったというのである。この両義的姿勢にブルトンの特徴を見出すのである。「意味」をめぐるこの二つの考え方を、言語学者ローマン・ヤコブソンの二分法にしたがい「隠喩的」なそれと、「換喩的」なそれと中田氏は名付ける。そして、精神分析の自由連想法に由来する「隠喩的な解釈可能性」と心理学・精神医学における「換喩的な言語の増殖」のいずれもがオートマトィスムのなかに散見でき、隠喩と換喩の往還運動こそ、オートマトィスムの特徴だというのだ。オートマトィスムの誕生とその変遷をオートマトィスムの多義性から捉え直す。」

「オートマトィスムの概念は、精神分析の「自由連想」のような隠喩的な自動性や、精神医学の「観念連合」のような換喩的な自動性といった、多様な自動性を抱え込んでいらからこそ、こういった移行（換喩から隠喩への移行）も理論の射程に入ってきたのでしょう。一点付け加えておくと、シュルレアリスムの初期から、ブルトンは自動記述だけではなく、コラージュの重要な表現方法として定めていました。コラージュというのは、自分の外にある要素を利用した。まさに換喩的な操作だと思いますが、そのような表現によっても、いつか自分にとっての隠された意味、いわば「未来の隠喩」を見出すことができるかもしれない。

このように考えてみると、ブルトンが生涯をとおして、非常に長い期間にわたってオートマトィスムを考え続けたのが、やはりとても重要なことだったのだと思います。長い歴史をとおして、オートマトィスムの概念が検討されるうちに、コラージュや自動記述の実践が、換喩から隠喩への移行を起こして、「客観的偶然」に至ったのでしょう。オートマトィスム論は、ブルトンの詩論としては、このように展開していきました。ただこれは、今日も話題にあがったように、現在のわれわれをめぐる状況にもかかわってくる話だと思えます。自動的なシステムやA Iの存在感が非常に大きくなっていくなかで、自分の意識によって統御できる領域が小さくなっていてと感じている人も多いでしょう。それにともなって、自分が意識的に伝えたい真意の力、隠喩的な表現の力が弱まっていくように感じられるかもしれない。自分が伝えたかったはずの言葉が、自動的なシステムのなかで換喩的にズれていて、別の記号に変換されていってしまう。そして、もともと言いたかったことや思っていたはずのことが、自分でもほとんどわからなくなっていくような感じがする。ただ、そのようにズれてしまった自分の言葉が、それを発した時点では気が付かなかったような意味を伝えてくれる日は、来るのかもしれない。オートマトィスムは、そういう可能性を示した実験だったのではないのでしょうか。」

「むしろオートマトィックなシステムとの関係のなかでこそ、未来の「人間らしさ」が問われなければならない。ブルトンのオートマトィスム論は、二〇世紀の早い段階から、そのための可能性を示していたかもしれません。」

○中田健太郎（なかた・けんたろう）
1979年東京都生まれ。静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科講師。専門はシュルレアリスム研究、フランス文学、視覚文化論。東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程修了。博士（学術）。著書に『ジョルジュ・エナン：追放者の取り分』（水声社 2013）、編著に『マンガメディア文化論：フレームを越えて生きる方法』（水声社　2022、鈴木雅雄と共編）、論文に「オートマトィスムの声は誰のもの？：ブルトン、幽霊、初音ミク」（『声と文学：拡張する身体の誘惑』所収、平凡社　2017）他。

「詩作や芸術制作におけるオートマトィスムの働きにかんして、何らかの事前の意味の存在を前提とする考え方と、意味はオートマトィスムの作用を通じて事後的に生成するとする考え方の両方がブルトンのなかに認められる、というのは静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科講師の中田健太郎氏です。前者の考えに従う場合、「意味」が由来するさまざまな場所が想定されることに中田氏は着目し、初期のブルトンが、オートマトィスムを作者が属する経験的世界の「外部」から届けられる「声」と関連付けて語る一方で、それとは正反対に、超自然的な「外部」を排除して、あくまで主体の内面にその由来を求めることもあったというのです。そして、この両義的姿勢にブルトンの特徴を見出せるのではないかというのです。「意味」をめぐるこの二つの考え方を、言語学者ローマン・ヤコブソンの二分法にしたがい、「隠喩的」なそれと、「換喩的」なそれと中田氏は名付けます。そして、精神分析の自由連想法に由来する「隠喩的な解釈可能性」と心理学・精神医学における「換喩的な言語の増殖」のいずれもがオートマトィスムのなかに散見でき、換喩から隠喩への移行こそがオートマトィスムの特徴だというのです。オートマトィスムの誕生とその変遷について、オートマトィスムの多義性という観点から捉え直します。」

<p>（鈴木雅雄「呼びかけに応じる、しかし、何の？」より）</p>
<p>「シュルレアリスムの展開には、「コントロールできないかたちで何かが向こうからやってくる」というオートマトィックな体験こそが重要だという発想が、その根本のところにもずあった。それを「書く」ことから「日常生活」へ、「社会」へとどんどん広げていった、と、図式的にはそんなふうに捉えられると思います。」</p>

「20世紀のさまざまな文化運動のなかでのシュルレアリスムの特異性は、「作品」や「理論」の内容以上に、あらゆる種類の呼びかけに応じようとする執拗な身振りのうちにあるものだったと鈴木氏はいう。シュルレアリストのアンドレ・ブルトンとポール・エリュアールによって著された詩篇『処女懐胎』は、精神障害者の言説の偽装実験だったことはよく知られている。精神障害者の言葉を到達不可能なものとして聖別するのではなく、しかしそこから何らかの要素や方法を抽出して利用するのでもなく、それを一つの呼びかけとして受け取り、いわばそれにシンクロすることで応じようとする実験だった。偽装されるものと偽装の結果との間に生じるさざなみのような何か、この呼びかけと応答のプロセスそれ自体がシュルレアリスムの運動そのものだったのだ。」

「シュルレアリスムのオートマトィスムは、「自分のなかから出てきているけれども、自分にとって他者のようなものとして現れる」というものですが、たとえばコンピュータによって可能になる自動性は、私たちにとってどのように現れるでしょうか。今流行りのA Iによって生成されたテキストは、自分がつくったものでも、他の誰かがつくったものでもありません。でもメチャクチャではなく、あるプロトコル、ある論理にしたがってつくられている。しかしそれがどんな論理によるものかは、私たちは、本当はよくわかっていない。だからそれは、今日お話ししてきたようなオートマトィスムとはまったく違うようでもあるけど、他方ではそういうわからないものと付き合うこと自体、ひどくシュルレアリスム的な経験ではないかとも感じます。それは将来的に、私たち人類がロボットとどう付き合うか、といった問題にもつながってくると思います。」

○鈴木雅雄（すずき・まさお）
1962年東京生まれ。早稲田大学文学部教授。専門はシュルレアリスム研究、イメージ文化史、近現代フランス文学。東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士課程満期退学。パリ第7大学文学部博士課程修了（文学博士）。著書に『火星人にさよなら：異星人表象のアルケオロジー』（水声社　2022）、『シュルレアリスム、あるいは痙攣する複数性』（平凡社　2007）、編著に『シュルレアリスムの射程：言語・無意識・複数性』（せりか書房　1998）他。

<p>（川添愛「生成AIは「溶ける魚」を書けるだろうか」より）</p>
<p>「もしかしたら他人に役割を課すこと自体が、人をA I化したいと思うことにつながるのではないのでしょうか。会社や組織のなかで、人に「あなたはこれをして」「あなたはこれをして」と役割を振る時は、構成員が組織に一体化して完璧に仕事を遂行することが期待されますよね。それは、その人の機械的な面に期待していることになると思うんです。」</p>

「機械学習の基本的な方法は、機械にやらせたい仕事を人間が定義するところから始まる。それに合わせてデータを集め、機械に翻訳の仕方や音声・画像認識の仕方などを学習させる。この方法では、人間が定義できて、かつデータが集まりやすい仕事であれば非常にうまくいく可能性が高く、今後も発達していくことが見込まれる。しかし、「笑わせよう」とか「泣かせよう」とする意志や欲求、感情をAIにもたせるのは、機械学習の方法では、到底無理である。そもそも何ができれば「意志」をもつことになり、何ができれば、「欲求」や「感情」をもったことになるのか。肝心の定義が難しい。ましてや自動記述など夢のまた夢である。シュルレアリスムの詩的実践である「溶ける魚」をAIは書くことができるだろうか。」

「社会の効率化を極限まで追求するのであれば、「人と完全にわかり合う」ことはすごく重要になりますね。とくに、世の中を自分の思っている方向に動かしたい時には、他人にも同じ方向に向かってくれることを期待してしまう。自分が良いよ思っていることをみんなも良いと思っしてほしいし、自分がこうだと言っていることを相手にもちゃんと理解してもらって、そのとおりに行動してほしい。でも、それは人の個性を無視してロボット化することにつながりかねない。それに、実際に人間は一人ひとり違いますし、また言葉はどうしても曖昧で不完全なものですから、「完全な相互理解」はできないと思うんですよね。結局のところ、私たちは不自由さを感じながら、不完全な言葉でコミュニケーションをして、「きっとみんなと一緒に辿りつける未来がある」という幻想を共有しながら生きていく。みたいなことになるのかなと思います。」

「たとえば仲の良い人と今晚の予定を話す時に、ただ「飲みに行く？」と聞けるのって、すごく完結じゃないですか。主語や目的語を省略できない言語だったら、「あなたは私とお酒を飲みに行く？」と言わなきゃいけない。「飲みに行く？」「うん、行く」で済むのって、すごく楽ですよね。こんなふうに、曖昧さを許しているがゆえに、コミュニケーションしやすくなっている面があります。そこは曖昧さの二面性ですね。誤解を招くかもしれない面と、スピーディーにコミュニケーションがとれる面があって、面白うところだと思います。」

○川添 愛（かわぞえ・あい）
1973年長崎県生まれ。作家。専門は、言語学、自然言語処理。九州大学文学部文学科卒業。同大学大学院、南カリフォルニア大学、京都大学大学院にて理論言語学を専攻。博士（文学）。著書に『言語学バーリ・トゥード：Round1 AIは「絶対に押すなよ」を理解できるか』（東京大学出版会　2021）、『ふだん使いの言語学：「ことばの基礎力」を鍛えるヒント』（新潮社　2021）、『ヒトの言葉 機械の言葉 「人工知能と話す」以前の言語学』（角川新書　2020）、共著書に『私たちはAIを信頼できるか』（文藝春秋　2022）他。

<p>（中田健太郎「換喩から隠喩への逢着あるいはオートマトィスムの多義性」より）</p>
--

神々は次々と流竄し
人間界に降臨するが
今度は神々に成り代わった
人間たちが地上で零落することになるのか

かつてある意味で人間たちは
神々に与えられた知恵とともに生きてきたが
現代では「科学」が
神または神々の代わりに信仰を集め

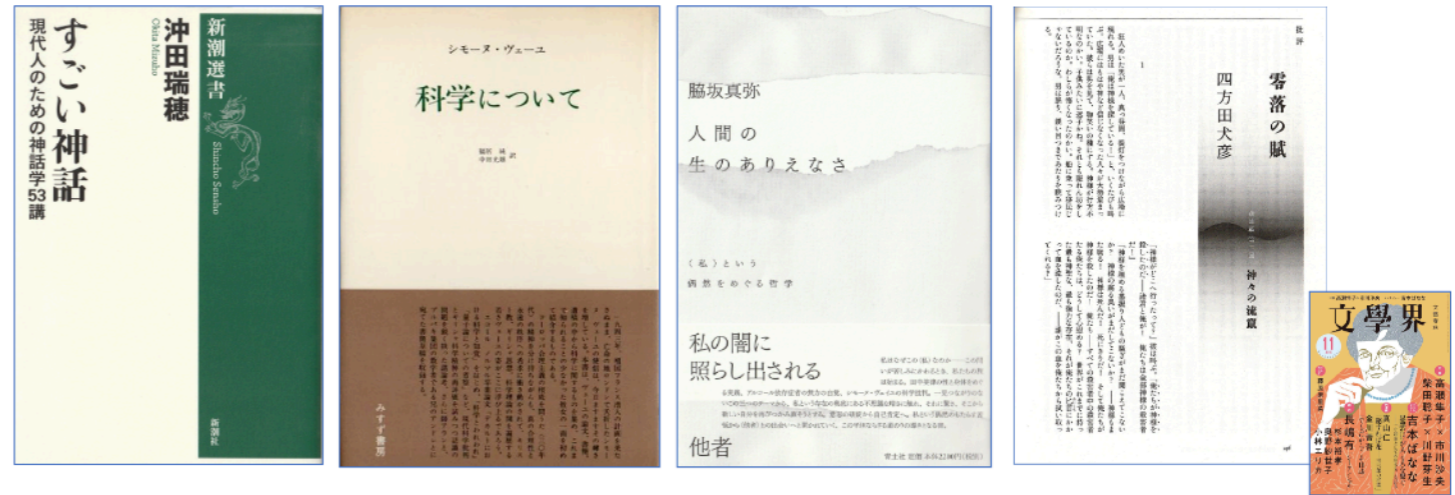
「神秘」や「叡智」へと通じていた世界を
「確率的なものに見なし」
「有用であれば後はどうでもよい」という形で
その扉を閉める態度をとるようになっている

科学のほんらいはそうではないはずだが
技術や政治と強固に結びついた現代の科学は
表面上は「主観」を排し
「客観的」な観点に立つものの
実際的にはその技術を利用する者の求める
目的を遂行するための観点に立っている
そのため「科学論文」などもその観点から審査され
目的に反するものは排されることになる

科学だけでなく
いうまでもなく政治も
ある目的のためには手段は問われない

流竄した神々に成り代わり
地上を支配しようとする人間は
さまざまな詭弁を弄しながら
環境の破壊や戦争なども積極的に活用する

さて世界の神話を見てみると
たとえばかつて神々は
人口過剰を解消するために
洪水や戦争を起こしたという



- 四方田犬彦「零落の賦 第二回 神々の流竄」（文学界 2023年11月号）
- 脇坂真弥『人間の生のありえなさ』（青土社 2021.4）
- 沖田瑞穂『すごい神話』（新潮選書 2022/3）
- シモーヌ・ヴェイユ（福居純・中田光雄訳）『科学について』（みず書房 1998）

ある意味で現代は
人口過剰や環境破壊などの問題を
その神話の神々に成り代わった気である
人類の一部がなにがしかの理由で
実行しようとしているのかもしれない
そしておそらくは彼らも
零落していくことは避けられないだろう

まさに現在進行中の
メディア統制による洗脳も行いながらの
積極的な人口削減策や
戦争によるジェノサイドなども
みずからを神々のような存在だと
みなしている者たちによるものだろうが

もし彼らが存在していないだろう場合にも
環境破壊や人口過剰の問題は
別の仕方でも解決されていく必要がある

少なくとも人類そのもののある一定数が
ある種の叡智を得
ほんらいの科学による技術を行使しながら
果敢に取り組んではじめて
解決へと向かい得る問題である

- 四方田犬彦「零落の賦 第二回 神々の流竄」（文學界 2023年11月号）
- 脇坂真弥『人間の生のありえなさ』（青土社 2021.4）
- 沖田瑞穂『すごい神話』（新潮選書 2022/3）
- シモーヌ・ヴェイユ（福居純・中田光雄訳）『科学について』（みすず書房 1998）

（四方田犬彦「零落の賦 第二回 神々の流竄」より）

「本稿では十九世紀のニーチェに始まり、ハイネ、ハウプトマンといった神々の零落の系譜を辿り、その物語が日本に飛び火して、柳田国男以降の幻想的想像力のあり方にどのような範例を示してきたかを追ってみた。神の死とは数なす神々の受難に他ならない。彼らは西洋社会において周縁へと排除され、長きにわたって教義的な寓意表象として生き延びてきた。また、極北の漁師やグロテスクな深山の精霊に身を窺しつつ、一神教の抑圧的支配に対し、つねに「まつるわぬ者」としてみずからを主張してきた。近代日本で民俗学を提唱するにあたって柳田国男が借り受けたのが、そうした神々の流竄の物語であった。今日の民俗学は柳田説を謬見として批判する傾向にある。とはいえ、妖怪こそは零落した神々の裔であるとするとその立場は、特異な漫画家水木しげるによって継承され、今日の日本の漫画・アニメを代表する作品のひとつと化している。

　以上が神々の落ちぶれ方である。では彼らの流落をかたわらで見つめてきた人間たちはどうだったのか。」

（脇坂真弥『人間の生のありえなさ』～「第四章 私はなぜこの私なのか 第一節 神秘の喪失 シモーヌ・ヴェイユの科学論 5 現代科学批判―――神秘の喪失」より）

「ヴェイユの現代科学批判は、「科学とは何か」をめぐる彼女の洞察と密接に関わっていた。科学とは無限の誤差（世界そのもの）と引き換えに数学を世界に適用し、その「無償の報酬」として「実在との接触」を手に入れること、手放したはずの世界をなぜか「いわばおまけで」与えられるという神秘である。しかし、この神秘を持ち堪えることはむずかしく、古典科学がむしろ自分の中からこの神秘や対立するものの相関を消そうと試みる。ヴェイユの古典科学に対するアンビバレンツな評価は、古典科学の中に真理を支える神秘や矛盾がなお残存し、しかし同時にほぼ消えかけている―――（二重の無視）はそれを示している―――という複雑な状況に由来している。

　このように、彼女にとって古典科学は「真理」となお結びついてはいるが、その結びつきはきわめて部分的で、自分の中にある暗さに目を瞑った奥行きのないものでしかなかった。一方、古典科学にかろうじて潜在するこの暗さから生まれたはずの現代科学は、神秘に通じる閉じかけた扉を再び開くどころか、ヴェイユが必然的のみならず世界を確率的なものに見なして逆に扉を閉めてしまう。彼女の激しい批判は、神秘や矛盾を持ち堪えるのではなく、それらに直面して混乱するのではなく、もはや気にしない（有用であれば後はどうでもよい）という形でみずから扉を閉める現代科学の確信犯的な態度に向けられるのである。」

「ヴェイユによれば、現代科学はそのような危機的状況にある。しかし、あえてもう一度問うならば、有限性を忘れることの何が問題なのだろうか。ヴェイユが神秘の次元と考えるものが失われ、世界が奥行きを失って平坦になることの、いったい何が悪いのだろうか。ヴェイユは端的に「人間はそれを失っては生きていけなくなる」と言うが、それはなぜなのだろうか。人間はこのとき何に行き詰まるというのか。」

（沖田瑞穂『すごい神話』～「第一章 神話で世界を旅する 9 人口過剰は洪水で解決する―――インドネシアの「洪水」伝説」より）

「現代日本は少子高齢化が進み、多方面に課題が噴出しているが、どうやら神話では、「人口」についてまったく別の心配をしていたようだ。インドネシアのスラウェシ島の神話を見てみよう。」

「世界の各地で、人口過剰が実際に問題となった時期があったのだろう。人類は少子高齢化のように減少していくのも問題であるが、増加に関してもまた生死に関わる重大問題であったのだ。」

（沖田瑞穂『すごい神話』～「第一章 神話で世界を旅する 10 「ノアの箱舟」は二次創作？―――『ギルガメッシュ叙事詩』の「洪水」神話」より）

「洪水神話は世界中にあるが、メソポタミアからギリシア、インドにかけて分布している洪水神話は起原が同じで、メソポタミアの『ギルガメッシュ叙事詩』がもとになっている。」

「この話の基本的な筋は、神が人類を滅ぼす目的で洪水を起こすこと、その洪水によって古い世界が滅び、助かった一つの家族から新たな人類が生まれるということだ。」

「これらの洪水神話は。メソポタミア系のものも、中国のものも、全て「世界をいったんリセットし、新たな世界を創り出す」という構造をもっている。古い世界は多くの場合神の怒りで洪水による滅ぼされる。しかし一人か一組が生き残り、新たな世界が始まるのだ。」

（沖田瑞穂『すごい神話』～「第一章 神話で世界を旅する 11 人口過剰は戦争で調整することも―――インド神話「大地の重荷」」より）

「9、10講で紹介したように、神話では増えすぎた人類を洪水でいったん滅ぼしてやり直す、という話があるが、別の話では、増えすぎた人類を戦争で減らす、というものもある。インドの叙事詩『マハーバーラタ』の主題である大戦争がまさにそれだ。」

「大地の重み、すなわち増えすぎた人類は、戦争によっても滅ぼされるというのだ。つくづく、人口の調整は人類の最重要課題であるのか。」

過去の歴史を振り返り
そこから教訓や知恵を少しでも得たならば
人が人を差別し暴力を揮い
傷つけ殺害しようとするなどということが
いまだに行われているということそのものが
まさに驚くべきことなのだが

現実の世界では
その「驚くべきこと」が
収まろうとする気配さえない

その大きな理由のひとつは
相手を「自分と同じような一個の人間」
少なくとも「共感」を持ち得る人間としては
とらえていないからだろう

同じ人間なのに
違う種類の人間としてとらえているということだ

社会学者であり哲学者のジョン・ホロウェイが
「豊かさとアイデンティティは
たやすく混同されがちですが、
この混同は悲劇的な結果を生みます」
と示唆しているように

価値観を共有している者どうしは
「自分と同じような一個の人間」とみなし
近しく感じるができるが
それをみずからのアイデンティティとすることで
それが共有されないとき
相手は容易に反感・攻撃の対象としての「他者」となる

石井ゆかり「星占いの思考④⑤近くて遠い人間」の冒頭に
オーウェル『カタロニア讃歌』からの引用があるように
オーウェルはスペイン内戦で
「ファシスト」を撃ちに来ていた」が
ずり落ちるズボンをお手でおさえているのを見て
彼を「ファシスト」ではないと感じる



- 石井ゆかり「星占いの思考④⑤近くて遠い人間」（群像 2023年12月号）
- ジョージ・オーウェル（橋口稔訳）『カタロニア讃歌』（ちくま学芸文庫 2002/12）
- リン・ハント（松浦義弘訳）『人権を創造する』（岩波書店 2011/10）
- ジョン・ホロウェイ（大窪一志訳・四茂野修訳）『希望なき時代の希望』（同時代社 2023/5）

「オーウェルのあの眼差しには、
アイデンティティの線引きがない」のである

ひとは「アイデンティティ」を得ることで
じぶんがじぶんであることに価値を見だし得るが
その「アイデンティティ」が
「他者」との「線引き」を行うことによって
成立するものであるとき
その「他者」はどんなに身近にいても「遠い人間」となる

宗教や思想・価値観
国家や民族・血縁
組織や党派など
それらが「わたしたち」としての
「アイデンティティ」となっているとき
その「外」は「共感」の「内」には存在しなくなるのだ

「戦争」や「差別」「暴力」は
「わたし」の「わたしたち」の「線引き」ゆえに起こる

「線引き」された「外」にいる人間はすでに
「自分と同じような一個の人間」ではなくなっているからだ

それは内なる戦争・外なる戦争にかぎらず
また人間にかぎらず動物や植物などの環境に対しても
そこにどのような「線引き」がなされるかによって
「戦争」はさまざまな形で起こることになる

「戦争」の種を蒔かないようにするために
じぶんがどんな「線引き」をしているのかに
自覚的であることができますように

- 石井ゆかり「星占いの思考④近くて遠い人間」（群像 2023年12月号）
- ジョージ・オーウェル（橋口稔訳）『カタロニア讃歌』（ちくま学芸文庫 2002/12）
- リン・ハント（松浦義弘訳）『人権を創造する』（岩波書店 2011/10）
- ジョン・ホロウェイ（大窪一志訳・四茂野修訳）『希望なき時代の希望』（同時代社 2023/5）

（石井ゆかり「星占いの思考④近くて遠い人間」より）

「　　しかし、それだけではなく、ぼくが撃たなかったのは、ひとつには、ずり落ちるズボンが両手でおさえらえていたからである。ぼくはどこへ「ファシスト」を撃ちに来ていた。しかし、ズボンをおさえている男は「ファシスト」ではない。それは見るからに、自分と同じような一個の人間であって、そういう人間を撃つ気にはなれないのだ。ゝ（ジョージ・オーウェル著　橋口稔訳『カタロニア讃歌』)筑摩書房）

　　1936年、スペイン内戦で反ファシズム軍の塹壕の近くまで忍び寄り、彼らが出てくるところを襲撃しようと待ち伏せていた。そこに突如飛行機が飛来し、敵陣から兵隊が一人、慌てて飛び出してきた。彼はもちろんんファシスト軍の兵士だったが、オーウェルは彼を「ファシスト」ではない、と感じた。ズボンをおさえていたからである。

　　かつてこれを読ん頃、私にとって戦争はおおまかには「歴史的事実」でしかなかった。今は違う。昔の日々は無知で愚かだったから非合理で暴力的な戦争に熱狂したのだ、ということではないのを知っている。人間はいつでも戦争ができるのだ。「昔の人だからやった」のではないのだ。私が子供の頃、大人たちはいつも「戦争は悲惨でしかない、決して繰り返してはならない」と言った。ゆえに、戦士がしたい・見たい人など誰もいないのだと思っていた。しかし「そうでもない」のだということが、今は解る。

　　私がこの稿を書いているのは2023年10月13日で、ほんの数日前、ハマスによるテロ攻撃、そしてイスラエルの報復が始まった。彼らは互いにごく近くにいる。私は遠く離れている。私たちは「何ゆえに遠くの人びとにたいする自分の感情にもとづいて行動するように促されるのか」という問題と、何ゆえに共感がまったく無効になって、自分たちに近い人びとを拷問し、傷つけ、さらには殺害することさえできるようになるのだろうかという問題」（リン・ハント著　松浦義弘訳『人権を創造する』岩波書店）を抱えている。遠い国で苦しむ人々のために、募金をし、物資を送る人間がいる。一方で、身近な人々に虐待を加える人間がいる。どちらも自分と同じ人間である。

　　「豊かさやアイデンティティはたやすく混同されがちですが、この混同は悲劇的な結果を生みます」（ジョン・ホロウェイ著　大窪一志訳・四茂野修訳『希望なき時代の希望』（同時代社）。ホロウェイは「豊かさ（richness）」を、「富（wealth）」と区別する。ホロウェイの言う「豊かさ」は「アイルランド音楽の豊かさ、メキシコ料理の豊かさ、社会的再生産過程における女性の交流の豊かさ、ホモセクシュアリティの地下の歴史の豊かさ、労働者階級の文化の豊かさ」などのことである。その一方で、こうした「豊かさ」はごく簡単に、アイデンティティへと変換される。「私たちは、英国のEU脱退に賛成投票することで、イギリス人であることを守ろうとします。私たちはイスラム教との侵入者に反対することで、私たちのフランス人らしさを守ろうとします。（中略）あまりにも簡単に、豊かさからアイデンティティ化へと流れが生じ、恐ろしい結果を招いています」。アイデンティティの恐ろしさは、人間同士のあいだにある様々な距離をたたひとつの意味で置き換える点だ。どんなに物理的に近くても、アイデンティティによって私たちは宇宙の彼方ほどにも隔たって、聖なる価値や疎外感への怒りのために、損得や利害を放棄して、「他者」を攻撃できる。その痛みへの共感が消し去られる。オーウェルがズボンをおさえて駆け出す兵士に向けた眼差しは、戦場ではきわめて危険であろう。また、両陣営に夥しい情報の炎で「煽られる」現代社会で、はなしてあの眼差しを持ちうるだおるか。オーウェルのあの眼差しには、アイデンティティの線引きがない。それは人間の希望で今は希望を持つこと自体が唾われる時代なのだと思う。」

聖書の「創世記」のはじめにこうある

「初めに、神は天地を創造された。
地は渾沌であって、闇が深淵の面にあり、
神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。
「光あれ。」
こうして、光があった。」

最初に「光」があったのではなく
初めには「闇」があったのである

「光あれ」によって
闇と光が展開しはじめ
生物たちはそれぞれの仕方で
夜と昼の闇と光を生きてきたのだが

いまでは宇宙から地球を見たときでさえ
夜の間にも人工の光が
自然の闇を奪っているのがわかる

その影響は生物の概日リズム（体内時計）を乱し
真夜中に鳥を歌わせ
孵化したウミガメを間違った方向へ誘導し
月明かりの下でおこなわれる
サンゴの交配の儀式を阻害している

昨今危惧されてきている昆虫の減少も
昆虫の半分は夜行性であるということもあり
林業・環境に流れる有害物質
大規模農業・気候変動といった原因以外に
「光害」も大きな要因になっているようだ

昆虫が経ると受粉する植物も減少してしまう

本書『暗闇の効用』の著者ヨハン・エクレフは
コウモリの研究者でもあるが
スウェーデンにおけるコウモリのコロニーも
ここ数十年でずいぶん減少しているのだという

動植物への「光害」は
人間にも大きく影響を及ぼしている
「自然の光は私たちの体内の概日リズムを調整し、
ホルモンや身体のいろいろな働きをコントロールする」が
そのバランスが失われてしまうのである

本書の帯に谷川俊太郎が
「闇がなければ光はなかった 闇は光の母」
という言葉を寄せているが
私たちは「闇」から生まれ
そのなかで「光」を受けて生きている

「闇」を失うとき
私たちはその存在の源を失ってしまう
闇があってもこそ光は光であり得るのである

「闇」はまた「渾沌」でもあり「沈黙」でもある
それらもまた失ってしまえば
「コスモス」も「ロゴス」も
それらの源を失ってしまうことになる



■ヨハン・エクレフ（永盛鷹司訳）『暗闇の効用』（太田出版 2023/9）

■ヨハン・エクレフ（永盛鷹司訳）『暗闇の効用』（太田出版 2023/9）

（「はじめに　消えていく夜」より）

「1980年代には、スウェーデン南西部にある教会の3分の2に、コウモリのコロニーが生息していた。ところが40年後のいま。同僚たちと私がおこなった調査によって、光害やその他の要因で、コウモリのコロニーが生息する教会の数は3分の1にまで減少していることがわかった。」

「暗闇を享受しているのはコウモリと私だけではない。この遅い時間まで私と一緒にいるハリネズミのように、多くの哺乳類は日没後の薄明の時間帯に、より活発になる。地球上の昆虫の半分は夜行性であり、ここ数年、その昆虫たちが消えつつあるという警告があふれかえっている。林業、環境に流れる有害物質、大規模農業、気候変動————多くの原因が指摘される。しかし、なかでも特に急激に減っている虫の種類は、光に敏感なガだというのに、その原因として光が挙がることは滅多にない。暗闇のなかで花の蜜を探すガ（蛾）は、あらゆる光の影響をすぐに受けてしまう。夜明けが近いと勘違いしてまったく飛ばなくなったり、月明かりを頼りに向かう方角を決めようとするも、いくつもの光線で方向感覚を失ったりするのだ。そうして疲れ切って息絶えるか、天敵に食べられるかづるガは、夜の使命を果たせないので、受粉する植物も減少する。」

「“光害、”という言葉を作ったのは天文学者だが、いまでは、夜がなくなるとどのような害があるのかを研究する生態学者、生理学者、神経学者も、この言葉を使用する。もはや光害は、星や昆虫だけの問題ではない。私たち人間を含む、すべての生物に関係するのだ。地球が生まれてからずっと、昼の後には夜があった。そしてどの生物のどの細胞にも、そのリズムと調和する仕組みがあらかじめ具わっている。自然の光は私たちの体内の概日リズムを調整し、ホルモンや身体のいろいろな動きをコントロールする。」

（「第1部 光害」～「大量死」より）

「人工の光は生殖のサイクルを長くしたり短くしたりし、孵化を誘発し、昆虫が幼虫から蛹、蛹から成虫になる変態に影響する。光はまた、狩りや送粉の条件を変え、食物の摂取、飛行、移動にも影響する。つまり、昆虫の一生のすべての局面に影響するのだ。21世紀初頭には、“光害、”という言葉はほとんど知られていなかった。知っていたのは天文学者だけだった。光が鳥やカメにどのような影響を及ぼすかを調べる研究は時折おこなわれていたが、それ以上はなかった。コウモリ研究者でさえも、光がコウモリに与える影響を論じていなかったのだ。そしていまでも、光害の研究は始まったばかりだ。光と闇は生態系にどのように作用するか、まだほとんど知られていない。」

「外の世界はすべて、自然の光の細かい変化によって動いている。そこには、さまざまな時間に目覚めて動き始め、さまざまな光の強度や波長によってプログラムされた生態系がある。ある動物が眠りにつくとき、別の動物は活動を始める。そして、ときには人間にはわからないような微妙な形で1日の時間を正確に告げる光とともに、一連の出来事、ホルモンサイクル、行動が、始まったり終わったりする。知見が蓄積されれば、問題解決の可能性も高まる。光は生態系のシステムおよび私たち自身の健康にどのような影響を及ぼしているのか。その点に対する注目が高まるほど、社会の光の需要と自然の闇の需要を調和させるために、前進することができるだろう。」

（「第2部 夜——その重要な生態系地位」～「たそがれ時の動物たち」より）

「生き物は1日の昼と夜の交替に合わせて進化してきた。そしてより多くの動物について研究が進むほど、昼と夜の両方がそれらの生態系にとって等しく重要だとわかるのだ。ますます明るくなっていく世界では、1日の時間帯の境界が判然としなくなり、行動パターンが変わってします。これが動植物の生活においてどのような意味を持つか、私たちはまだほとんど何も知らない。」

（「第3部 人類と宇宙の光」～「病気をもたらず過剰な光」より）

「睡眠の質が低いと、身心に大きな悪影響を及ぼす————これはよく知られていることだ。小さな子どもの世話をする人、夜勤をする人、いくつものタイムゾーンをまたいで飛び回る人、夜通しパーティをする人は、そのことを実体験として証言できるだろう。」

「良質な睡眠のためにはさまざまな工夫が考えられる。自然な光が体内時計を調整してくれる環境下で眠ることを好む人もいれば、眠っている間はできるだけ暗いほうがよいと思う人もいる。いずれにせよ重要なのは、昼には青い光、夕方には赤い光という具合に、光が1日のサイクルに王子って周期的に変化し、メラトニンの波の満ち引きが一定のリズムで起こるようにすることだ。ストレス、うつ、睡眠障害に加えて、肥満がいま、世界的な健康問題である。肥満にはさまざまな要因があるが、その1つはレプチンの量が少ないことだ。これはメラトニンのサイクルの乱れの必然的な結果である。（…）因果関係は単純ではないものの、この傾向は部分的には、夜間の照明が原因だと説明できる。メラトニンや付随するほかのホルモンは腫瘍の抑制に寄与するため、生物時計が乱れてメラトニンの波が夜間に起こらないと、そのプラスの効果がなくなるのだ。」

（「第4部 陰翳礼賛」～「逆境にある暗闇」より）

「詩人、哲学者、作家、芸術家は、暗闇からインスピレーションを得る。外部のものが見えないとき、私たちは想像力の助けを借りて、自分たちの内面に独自のイメージを作り出す。演劇の世界ではブラックボックスという言葉がある。それは黒く塗られた、内部を自由に変えることのできるステージルームで、演者が邪魔な印象の影響を受けずに創造力を発揮できるようにした空間だ。」

「夜は、まさに私たちの友だ。私たちは暗闇と、その静けさや繊細な美しさのなかで安心する。私たちは夜から、そして天の川やその彼方の遠くの光からインスピレーションを得る。夜の闇のなかにも生命があるのだ。夜を取り戻そう。Carpe noctem.（夜を楽しめ）」

（「暗闇を守るための10箇条」より）

「暗闇を意識する」
「暗闇を保護する」
「身の回りの暗闇を維持する」
「体内のリズムに従う」
「夜の生き物たちを発見する」
「暗闇を探求する」
「暗闇について、動植物の生存にとっての暗闇の重要性について、より深く学ぶ」
「周りの人と、暗闇について話し合う」
「光害に向きあうためのロールモデルとなり、周囲の人たちの力になる」
「暗闇を自分のものにする」

（「訳者あとがき」より）

「人間にとって、暗闇は恐怖の対象であり、無知の象徴であった。歴史のなかで、多くの人間が暗闇を克服したいと望んだ。電球の発明によってその手段を手に入れて以降、人間は、実際に人工の光で暗闇を追い払い、煌々と輝く地球を作り出すことに力を尽くしてきた。人工の光はまさに人間の輝く未来そのものであり、常に明るく眠らない人間の富と進歩の尺度であった。

ところが、そのような考え方を見直すべきときが来ている。いまでは、汚染物質をそのまま自然界に垂れ流してよいよか、化石燃料を好きナだけ燃やしてよいと考える人はあまりいないだろう。自然環境を守らなければ、ゆくゆくは人間の生活にもダメージが及ぶことがわかってきているからだ。そして、その守るべき対象には、暗闇や夜も含まれなければならない————本書『暗闇の効用』は、優しい語り口で、しかし力強く、そう訴えている。」

「個人的な体験と科学的なファクトの間を、そしてコウモリから大海のサンゴ、さらには宇宙の起源まで、さまざまな話題の間を縦横無尽に行き来し、それでいて読者に疲れを感じさせないスタイルには、著者のヨハン・エクレフ（1973年～）の独特な経歴が反映されていると考えられる。エクレフはスウェーデンの作家であり、本書のほかには、コウモリの生態や動物の進化に関する一般向け・児童向けの書著がある。（…）現在は光害を抑えるために企業や行政にアドバイスするコンサルティング会社も経営しているという。同時に、彼は動物学の博士号を持つコウモリ研究者でもあり、フィールドで調査をおこなった経験も豊富にある。」

◇目次

はじめに　消えていく夜

第1部 光害
暗闇のサイクル／暗闇での体験／光に照らされた惑星／掃除機効果／失われた交尾の本能／大量死
第2部 夜——その重要な生態系地位
暗闇の視覚／目／夜の感覚／たそがれ時の動物たち／不自然な光の中で歌う／自然のランタン／光の春／星のコンパス／めまいのする都市／偽物の夏／実りのない夜／海の花火／海が待つ場所／月明かりのなかのロマンス／青ざめたサンゴ／トワイライト・ゾーンにて／流転する生態系／夜の公益的機能
第3部 人類と宇宙の光
3つの薄明／ダークマター／夜空の測定／聖ラウレンチオの涙／月は1つだけ？／青の瞬間／黄褐色の空／産業の光／時計が止まるとき／病気をもたらず過剰な光

第4部 陰翳礼賛
魂を慰める時間／陰翳礼讃／LEDの光／暗闇のツーリズム／王家が残した暗闇／暗闇の静かな会話／逆境にある暗闇

○著者／ヨハン・エクレフ
スウェーデンのコウモリ研究者・作家。ココウモリの視覚に関する研究、および、最近では光害に関する研究で知られる。スウェーデン西部に住み、自然保護活動とコピーライティングに従事。20年近くコウモリの研究をおこなった後、現在は自身のコンサルタント会社を経営する。コウモリ、夜の生態系、自然に優しい照明の専門家として、公共事業機関、風力発電事業者、自治体、都市計画者、環境保護団体などをクライアントに持つ。本書は、英語に翻訳された2冊目の著書である。

○訳者／永盛鷹司（ながもり・ようじ）
翻訳家。東京外国語大学大学院総合国際学研究所言語文化専攻、博士前期課程修了。主な訳書に『家庭の中から世界を変えた女性たち　アメリカ家政学の歴史』（上村協子・山村明子監訳、東京堂出版、2022年）など。

このところ酒井隆史の名をよく目にする『自由論』や『通天閣』といった著書もあったが最近ではこのmedioposでもとりあげた『賢人と奴隷とバカ』という著書そして『万物の黎明』という訳書がある

その酒井隆史と保坂和志がこの十一月十八日に対談するそうだが保坂和志の連載（「群像」）「鉄の胡蝶は記憶を夢は歳月に彫るか」の第64回はその対談の「助走」として書かれている

そのなかから以下の3点について少し

A I 的な文章とそうではない文章との違いそのこととも関連した一貫性と不完全性のことそして言葉では説明できないこと

まずA I 的な文章とそうではない文章との違いについて

A I による文章作成は「一回の作業ごとに作業時間ゼロ」で「作業の開始と終了のあいだで作業主体たるA I は変化しない」つまりその作業において完全に一貫している

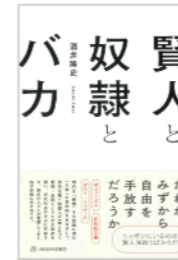
それに対してふつう私たちが考えながら書くときあるいは話すこともそうだがそれは「不完全」にならざるをえない

「事前のプランがあったとしてもその通りにはならず書きながら、書く日々を通じて気持ちが変わったり方向を直したりする」そしてそれを読むあるいは聞く私たちがそれとともに考えるプロセスを歩んでいく

そのことについて保坂氏はある「A I を批判する論考」を読んで驚いたという

「その文章は正しいことしか書いてないが正しいことの向こうに踏み出してあぶないことまで言おうとしていない」「このタイプのA I 批判の文章は近い未来にA I 自身が書くだろう」と（酒井隆史の文章には「そういう安全な感じがない」）

A I を批判する文章がA I 的な文章になってしまっているのである不完全であるままに考えていくプロセスがそこでは失われているということだろう思考する生きた主体のない死んだ思考をしていることに気づけずにいるということ



- 保坂和志「連載小説64／鉄の胡蝶は記憶を夢は歳月に彫るか」（群像 2023年12月号）
- デヴィッド・グレーバー／デヴィッド・ウエングロウ（酒井隆史訳）『万物の黎明／人類史を根本からくつがえす』（光文社 2023/9）
- 酒井隆史『賢人と奴隷とバカ』（亜紀書房 2023/4）
- 酒井隆史『完全版 自由論: 現在性の系譜学』（河出文庫 2019/8）
- 酒井隆史『通天閣 新・日本資本主義発達史』（青土社 2011/11）

次にそれとも関連した一貫性と不完全性のことについて

ここではカラヤンの指揮とバーンスタインの指揮が比較されたりもしているが「カラヤンの指揮による演奏」が「寸分のズレもなくきっちり足並みが揃っている」のに対し「バーンスタインの指揮にはぞろっとしたズレがある」というそしてその「寸分のズレのなさ」に不自然さを感じたのだというが

それが D・グレーバー〈万物の黎明〉に書かれてある「「未開」社会」における変わりもの（エキセントリシティ）に対する寛容」と関連づけられているいうまでもなくこの「未開」はこれから開かれていくという意味でのそれではない

それが「本当に厄介」なのは「一貫性」を求めることで「全、一、秩序、中心、それらを良しとする世界観支配」が浸透していきかねないということである

そして言葉では説明できないことについて

文字が活字あるいはフォントとなりデータとして一見誰にでも読めるように表記されると「言葉で説明できることがいいことだという了解」が醸成されてしまうことにつながり「自分がしていることを他の人にもわかるような言葉で説明する」ことがじぶんに対しても人に対しても強要されるようになってしまう

それは「明治時代に国策として表記法を一元化していった精神と根っ子が同じ」だともいえる

そこでは「変わりもの（エキセントリシティ）」は許されなくなってしまうし言葉にならない状態そのものが単に「不完全」なものとして排されてしまうことにもなる

「不完全」であるということはA I 的な思考では不正解としてとらえられてしまうだろうがそれは視点を変えれば変わっていけることであり論点に閉じてしまわず表現されていないところへも開かれてあることでもある

不完全ゆえに未知へと開かれた我ありとでもいうことができるだろうか

- 保坂和志 「連載小説64／鉄の胡蝶は記憶を夢は歳月に彫るか」（群像 2023年12月号）
- デヴィッド・グレーバー /デヴィッド・ウエングロウ（酒井隆史訳）『万物の黎明／人類史を根本からくつがえす』（光文社 2023/9）
- 酒井隆史『賢人と奴隷とバカ』（叢紀書房 2023/4）
- 酒井隆史『完全版 自由論: 現在性の系譜学』（河出文庫 2019/8）
- 酒井隆史『通天閣 新・日本資本主義発達史』（青土社 2011/11）

（保坂和志 「鉄の胡蝶は記憶を夢は歳月に彫るか」～「十一月十八日、酒井隆史さんとの対談の助走」より）
「十一月十八日土曜日の午後二時から京都のお寺で酒井隆史さんと対談することになった。」

「酒井隆史さんの文章は何を読んでもワクワクする。酒井さんは七〇〇頁以上の〈通天閣〉を書いてゆく過程で視力がひどく悪くなったと言った。〈通天閣〉は二〇一一年の出版だからネット検索がまだまだ充実していなかった時代の文章だし、あの本が扱っているのは明治大正昭和だから今でもやっぱり国会図書館で当時の新聞記事をマイクロフィルムで見えていくしかないんじゃないか、酒井さんはマイクロフィルムを見るためのビューワーというのがどういものか私は知らずに書いているんだが脇に回すハンドルというのがそういうのが付いていて、一枚一枚ガチャンガチャンとフィルムを送るのが、酒井さんの文章には資料を物質レベルで掘り返しながら肉体レベルでそれを見て記録してゆく、そういう泥道や雪道をザクザク力をこめて進んでゆく感じがある。

このあいだ文芸誌でA Iを批判する論考というのか、そういう文章を読んだときに驚いたのは、その文章は正しいことしか書いてないが正しいことの向こうに踏み出してあぶないことまで言おうとしていない、正しいことだけというのはとても抑圧的でもある。もともとそういう人なのだから人は、結局、このタイプのA I批判の文章は近い未来にA I自身が書くだろう、酒井さんの文章にはそういう安全な感じがないのだ。

今日は電車の中で文庫の〈自由論〉の一番最後の、文庫のための語りおろしの文章を四段だが、酒井さんの言うフーコーは確定したフーコーでなく生きていたあいだに試行錯誤というのとは違うんだろがいったい書いたことをあとで否定したりそれと矛盾することを言ったフーコーを言っているから酒井さんはこの人自身として切り開いていく感じがする。（…）書くこと考えることは事前のプランを超えたり外れたりすることだ、そういう過程を通して事前のプランなんてものがあったとしてもそれは観念的で瘦せた考えにすぎず、実際に書く行為を通して考えは深められたり彩りができたりする、彩りというのは装飾でなく具体性にちかく具体性があるから矛盾もあれば発見もある。

事前のプランがあったとしてもその通りにはならず書きながら、書く日々を通じて気持ちが変わったり方向を直したりするということは書く過程を通じてその人は不完全であるということだ、ここはすぐに誤解する人がいるからわざわざ言うておくが不完全だからその人は信用するに値するしエキサイティングだ。当然自分でも不完全であることを知りつつ書くだろう、というよりも自分が書くことが完全であることはありえない、だってそんなことは不自然だ、というか自然の摂理に反する、自分が不完全であるというよりも、そんなことはわざわざ言わなくても自分と完全という概念を並べることがそもそもない、完全なんてことを考えもしないかた書くプロセス、考えるプロセスをわざわざ不完全だと思わない、ところがA Iを批判する文章を書いたその人の文章は、パーフェクトであろうとして書いている感じがした。

私は思うのだがA IはA Iとして成長するんだろが毎回、というのは一回の作業ごとに作業時間ゼロ、ゼロというのは作業の開始と終了のあいだで作業主体たるA Iは変化しない、次の作業のときはきっとまた少しは違うんだろが作業の開始時と終了時ではA Iに変化はない、パーフェクトであろうとす書き手の姿勢はそれと同じことなのだ、事前プランどおりにならないということは書く過程で資料を調べたりもともとある資料をもう一度読むことで気づいていなかったことを見つけたる、自分の考えを詰めていくことで、矛盾したり深まったりする。ここからが大事なんだがそれによって、書くことと全能であることが切斷される。」

「前に有名な指揮者の指揮風景を比べるみたいな番組があって、カラヤンの指揮による演奏はもうホントに寸分のズレもなくきっちり足並みが揃っている、それを聴いてしまうとバーンスタインの指揮にはぞろっとしたズレがある、カラヤンからバーンスタインにかわってすぐはだらしく感じたんだがだんだんカラヤンの寸分のズレのなさが不自然に思えてきた、それをいい、それでなくてはダメという聴き手の態度も私には良くなく思えてきた、もともとフリージャズなんて揃うことを嫌う人たちの集まりだ、ベルリンフルだったかウィーンフィルだったか、どっちかのオーケストラは時代を超えて同じ音色で演奏されるように楽器が代々同じなんだという、オーボエならオーボエでメンバーは代々入れ替わるわけだが楽器は同一のそれが使われる、楽器は奏者の持ち物を使わずオーケストラが持つその楽器が使われる。

オーケストラと対照的だったのが近所でたまたま聞いた保育園の子どもたちの合唱だった、一日の締めみんなで歌を歌う、それがもう子どもたちが思いっきり、元気な声を出して、音程はバラバラだ、テンボもけっこうひとりひとりズレている、その歌声がものすごい解放感だった、D・グレーバー〈万物の黎明〉にこう書いてある。

「「未開」社会にかれがおどろいたのは、変わりもの（エキセントリシティ）に対する寛容であった」

未開を「」で囲んでるのは「いわゆる未開」だからだ、私は昔から、「あなたの友達には変わっている人が多い」「と言われてきた、私はそれをずっと「多士済々」の意味だと思っていた、ところがあるとき、といってももう三十年前のことだが、その頃知り合った十歳年下の女性が、「変わってるよね～」と笑いながら遠ざけるような調子を感じたから。「?」と思ってあとで妻に訊くと、「褒めてるわけないじゃん」と言われたのだ。それがわりときっかけになって私は世間の「善良な」人たちは変わり者を歓迎しているわけではないし、状況によっては不寛容になるんだということを知っていくようになった、私は子どもの頃から変わった人が大好きだからそれが敬遠されるような考え方があることがわからなかった、ここで私はフリージャズを自由とか反秩序とかの概念先行で無理して聞いてきたわけではないと、自分で自分にあらためて思う、私の音楽や美術の嗜好と社会や規則やそういうものに対する好き嫌いは一貫している――とここで、さっきまで批判していた一貫性が出て来る、全、一、秩序、中心、それらを良しとする世界観支配がどれだけ浸透しているか、これは本当に厄介なのだ。」

「いい本というのはこういう喩えはしたくないが数学の公式のようなもので問題を単一の問題でなく問題の群れとして全部を問題化する、そして公式というのはちゃんと公式の成りたちを理解するなら別の公式を自力で考えることもできる、〈万物の黎明〉が言っているのは、人類史にはオルタナティブがありえたということ、オルタナティブは「未開」とされて切り捨てられてきた社会が現実とその形態によった社会であって、しかもその社会は最近流行りの実証実験というんじゃなく、現実とその形態の社会は何百年単位で存在していた、だからそれゆえ、オルタナティブな社会はえそらごとではないということだ。「全能な神はえそらごとで、オルタナティブな社会形態はえそだごとではなく現実にあった、それなのに現代人はえそらごとの方を世界観の基準にしている、と――」」
　店長が私の言いたいことをそのまま言ってくれた、まさしくそういうことなのだ、グレーバーの「未開」にもとづくオルタナティブな社会形態の議論はえそらごとではなく現実を根拠にしている」

「〈万物の黎明〉のこの今の社会はこうなった要素・原因の大きな一つが言葉で説明できることがいいことだという了解の醸成、そうか一端はフリードリヒ・キットラーの〈グラモフォン・フィルム・タイプライター〉が情報を記録する機会の発明とそれによるデータの平板化というようなことと言ってるんだと思う（…）。

「俺にわかる言葉で説明しろ」というのは、ゴルフ好きの経営者でなく本当は本人の中にいる、それを私は先月だったか、煩惱なんだと気がついた。私は私自身に向かって、「俺にわかる言葉で説明しろ」と言ってしまうているのだ、それで私は自分がしていることを他の人にもわかるような言葉で説明する場面を思い描いたとき、私は私の関心からすでに心が離れている、私は私の関心の真ん中にいるときは私が私であることさえも意識がない、私はひたすら目の前の作業に集中したり、あるいは海に見とれてぼおっとしたりしている。

その状態はそれを経験したことの無い人にはわからない状態で、たとえば彫刻に没頭している状態とかサーフィンしている状態とか数学者の岡潔のように数について考えながら空を眺めていたり、それは幸福すぎるとその人は社会の一元化した順序の外に出てしまう、当たり前すぎることだが人ひとりひとりの心の中が一番不透明で、言語化も数値化もできない、しかし権力の側は最大公約数なのか最小公倍数なのかそんな風なものを言葉や数字ででっち上げたい、それがもっともらしくさえあれば社会の中の多数派である没入することを知らない人と偉くなりたい人をその気にさせて自分の側いn引き入れることができる。」

「A I批判のその人の批判ぶりが正しさの範囲から一歩も踏み出してなくて誰にとってもとても安全に正しい理屈であるその正しさぶりが当て字を使わない文章みたいなもので、明治時代に国策として表記法を一元化していった精神と根っ子が同じなんだ」

源河亨『悲しい曲の何が悲しいのか』を
mediopos2911 (2022.11.6) でとりあげたことがある

「悲しい時には、悲しい曲を聴くのがいい」といわれるが
ネガティブな感情を抱いている時には
逆のポジティブな陽気な曲を聴くよりも
同質の悲しい曲の方を聴くほうが
むしろネガティブな感情を軽減させる

音楽療法における「同質の原理」は
同質の感情をみずからに映すことで鎮めるように
「悲しい曲」によって
みずからの「悲しい」という感情を
いわばメタ・レベルから見ることである

要点はおおよそ以上だが
この著書では「歌詞」は問題とされていなかった

新刊『愛とラブソングの哲学』では
歌詞をふくめた「ラブソング」がテーマとなっている
本書を著すきっかけとなったのは編集者から
「ラブソングを聴くと恋がしたくなるのか？」
という本が書けないかと依頼がきたことからだという

本書を読んで「ラブソング」のことが
よくわかるようになったとは思えないけれど
「愛とラブソング」の「哲学」とあるように
主にラブソングについて理解するための「愛」と
「ラブソング」が成立する条件や効果について
理解するためのちょっとしたガイドにはなりそう

本書は第I部が「愛とは何か」ということで
「愛」についての考察であり
第II部が「ラブソングとは何か」ということで
「ラブソング」についての考察となっている

「愛とは何か」とあるが
ここで考察されているのは
「愛」の宗教的な深みの探求といったことではなく
あくまでも「ラブソング」に反映される類の
「愛」についてである

まず愛と感情の違いについて

感情が持続することが難しいのに対して
愛は長く持続することもあるように
愛は感情の枠を超えている

さらに人を愛する理由は「代替不可能」で
説明できない「無合理」なものである
（「非合理」「不合理」ではなく「無合理」というのは面白い）

そして愛は「生物学的な仕組みからは導かれ」ず
生物学的な仕組みと
社会的な仕組みが合わさって成立する
これは愛が感情とは異なっていることにも関係している

特に！！と思える内容はないが
以上の「愛とは何か」の考察を踏まえて
「ラブソング」について考察されている

まずラブソングの「楽曲」について

「愛の優しさを感じさせる曲は、
優しい気持ちにある人の喋り方と同じように、
テンポがゆっくりとして、音程の上下幅は少なく、
全体的な音高は低い傾向にあ」るが

「単なる優しさ」ではなく
「愛の優しさ」を聴き取るためには、
背景情報との連合が必要」である

楽曲だけでは
「ラブソング」としては成立しがたいということだろう
やはり歌詞がそこにあってはじめて
「ラブソング」は成立するところが多分にある

その例（半ばゴシップ的ではあるが）として
ジョージ・ハリスンの《フォー・ユー・ブルー》と
エリック・クラプトンの《いとしのレイラ》が
挙げられている

背景事情を知らなくても
《フォー・ユー・ブルー》からは優しさを
《いとしのレイラ》からは怒りを
感じることはできるだろうが
より深く受容するためには
「作曲の事情に関する背景情報と楽曲が
連合している必要がある」
（その事情に関しては、引用部分を参照のこと）

続いてラブソングの「歌詞」についてだが

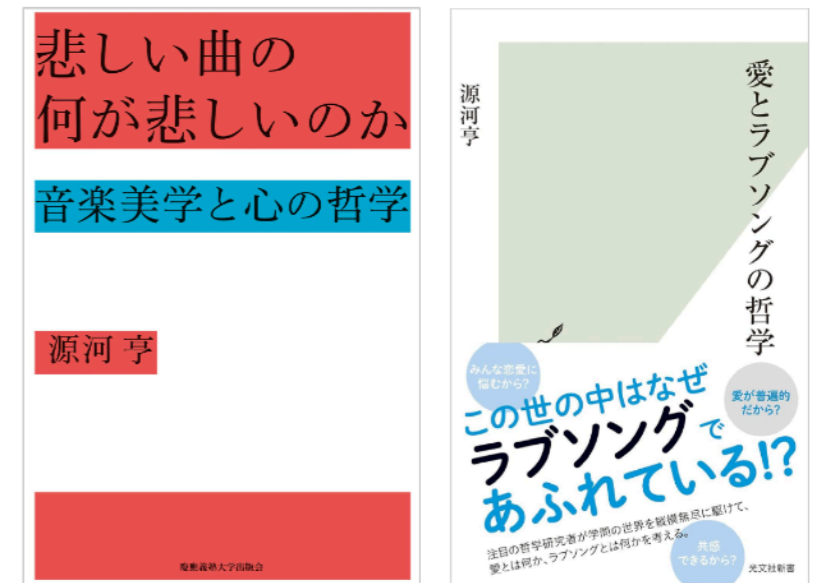
歌詞に込められた「愛」の知識によって
「それぞれの時代や文化の愛の概念」が
ラブソングによって広められると考えられ

「歌詞」には「聴き手の気持ちの代弁」する
という特徴がある
つまり「ラブソングの歌詞がその心の状態に
ぴったり会う言葉を与えてくれることで、
混乱が解消されたり、自分が恋に落ちている
という自覚が得られたりする」のである

さらに「失恋ソング」には
「癒し」や「記憶の改変」といった効果もあるが

「気持ちの代弁」もそうであるように
前著『悲しい曲の何が悲しいのか』でも
述べられていたような
みずからの感情をメタ・レベルから見ることによる
効果でもありと思われる
（物語化とでもいったほうが適切かもしれないが）

以上とくに驚くべき哲学的考察は見受けられないが
こうした側面をふまえながら
「ひとはなぜラブソングを求めるのか？」と問うとき



■源河亨『愛とラブソングの哲学』（光文社新書 2023/10）

そこには愛の生物学的なものに由来する側面と
それがもとになって「愛」という概念が
社会的に学習されることで生まれる側面があり
そこに「ラブソング」という現象が
根強く存在し続けることになるのだと思われる

ひとがひとであるがゆえの「愛」は
「他者性」がその根底にある
つまり自我の成立のために「他者」を求めるわけだが

その「愛」にはさまざまな現れ方がある

たとえばただ求めるばかりの愛があり
憎しみを超えて許す愛があり
みずからをこえて与える愛があり
そして愛そのもののなかにある愛…
といった愛があるだろう

それらはある意味で「自我」の働きによって
みずからの「感情」を変容させることで
得られてゆく「愛」だということができる

現代において「ラブソング」は
そうした自我との関係で生まれる「愛」のかたちを
さまざまな感情のはたらきのなかで
無意識的であるにせよ意識的であるにせよ
とらえなおしそれを浄化しそこから学ぶために
多くのひとに求められているのだろう

■源河亨『愛とラブソングの哲学』（光文社新書 2023/10）

（「第I部　愛とは何か」より）

※愛と感情の関係

「愛は感情の一種だと考えられがちですが、愛は感情の枠に収まるものではありません。誰かを愛しているとき、私たちは、その人のことばかり考え、会いたいと望み、実際に会いに行くという行動が生まれ、会えれば喜びが、会えなければ悲しみが生まれます。愛はその対象となる人に関する思考・欲求・行動・感情を生み出す潜在的な基盤です。また、「あの人を一〇年間ずっと愛している」と言えるように、潜在的な愛はかなり長期間にわたって持続するものですが、同じ感情がそれほど長く持続し続けることはありません。」

※人を愛する理由

「誰かを愛する理由を尋ねられたとき、「優しいから愛している」といった理由が思い浮かぶでしょう。しかし、もしそれが本当に理由になっているなら、より優しい人と出会ったらその人を愛するようになるべきですし、愛する人が優しくなくなったら愛するのをやめるべきということになります。しかし、そう簡単に愛を捨てることはできません。愛する人は代替不可能なのです。ですが、代替不可能である理由は説明できないものであり、その点で愛は「無合理」なものと考えられます。」

※愛の生物学的側面

「生物としての人間が抱く愛は、子供を作って育てたり仲間との結びつきを作ったりするために獲得された生物学的な仕組みです。こうした生物学的な仕組みはもともと人間に備わっているものであり、納得できる理由があるかどうかは問題になりません。愛が無合理的なのは生物学的な仕組みに基づいているからです。

ですが、生物学的な愛は長続きしません。子育てのための愛は、子供がある程度成長したら消えてしまいます。しかし、私たちが抱いている愛の概念には「生涯を共にする」という永続性が含まれており、それは生物学的な仕組みからは導かれません。」

※愛の社会的側面

「結婚はもともと労働や経済のための長期的なパートナー関係を作る社会的な仕組みであり、恋愛とは別で行われていました。しかし、近代になって恋愛と結婚が結びつくと、愛にも長期的なパートナー関係が求められるようになりました。愛は結婚という社会制度と一体化することで、生物学的な仕組みでは単肥でできなかった永続性を獲得したのです。」

※愛の本質

「愛は生物学的な仕組みと社会的な仕組みが合わさってできたものです。」

「愛は、自然の世界にあった生物学的仕組みにルーツをもちつつも、それぞれの時代や文化の価値観を反映して変化していきます。多様な心の状態や行動がそれぞれの社会の理学関係に依存して「愛」とみなされていて、すべての愛に共通する「愛の本質」のようなものは存在しません。」

（「第II部　ラブソングとは何か」より）

※ラブソングの楽曲

「楽曲のうちに愛のサインを聴き取るうえで、喋り方との類似性が鍵となります。愛の優しさを感じさせる曲は、優しい気持ちにある人の喋り方と同じように、テンポがゆっくりとして、音程の上下幅は少なく、全体的な音高は低い傾向にあります。私たち人間は他人の喋り方からその人の感情を推測する能力をもっていて、その能力が音楽を聞く場合にも働くことで、音の配列が心の状態のサインであるかのように聴こえてしまうのです。

ただし楽曲に「単なる優しさ」ではなく「愛の優しさ」を聴き取るためには、背景情報との連合が必要です。人間が音の並びから聴き取れる心のサインは数種類しかなく、（…）多用で複雑なあり方をしています。愛が顕在化した感情のサインは音響学的特長に反映されますが、潜在的な愛そのものは音響的特長をもちません。そのため聴き手が楽曲に愛を感じるには、作曲の経緯や歌詞の言葉との連合が必要になります。」

☆愛を感じる楽曲の例

「言葉の影響をなるべく除外するために、外国語の曲を例にしましょう。ジョージ・ハリスンの《フォー・ユー・ブルー》と、エリック・クラプトンの《いとしのレイラ》は、同じ女性に対する愛を表した曲です。その女性パティ・ボイドは、一九六六年にハリスンと結婚しましたが、一九七四年に離婚し、そして一九七七年にクラプトンと結婚しています（一九八九年に離婚しています）。

ハリスンは《フォー・ユー・ブルー》を作曲したのが一九六八年で、クラプトンが《いとしのレイラ》を作曲したのは一九七〇年です。どちらの曲もボイドとハリスンの婚姻中に発表されています。そうすると、ハリスンの《フォー・ユー・ブルー》は妻への愛を表したものであるのに対し、クラプトンの《いとしのレイラ》は他人の妻への愛を表したものであるということになります。

こうした事情を踏まえて二つの楽曲を聴き比べてみてください。歌詞の意味を無視しても、前者は落ち着いたある愛を表しているように、後者は激しい愛を表しているように聴こえるのではないのでしょうか。」

「ハリスンとクラプトンの事情を知らない人も、《フォー・ユー・ブルー》に優しさを、《いとしのレイラ》に怒りを聴き取ることはできるでしょう。しかし、愛の優しさや報われない愛の怒りを聴き取ることはできません。それを聴き取るためには、作曲の事情に関する背景情報と楽曲が連合している必要があるわけです。」

※ラブソングの歌詞

「「なんとか覚え歌」というのがたくさんあるように、歌は知識を伝達するための非常に便利な道具です。言葉を音楽に乗せることで、音楽が言葉を思い出す手がかりになったり、単純な内容でも飽きずに反復して聴くことができたりするようになります。こうした歌の利点があることで、ラブソングは愛の概念を広めるための教材として機能します。吟遊詩人によって宮廷風恋愛が広められたように、それぞれの時代や文化の愛の概念はラブソングによって広められると考えられます。

歌詞のもう一つの特徴として「聴き手の気持ちの代弁」があります。歌詞は、聴き手自身では言語化できなかった心の状態に言葉を与え、混乱を解消してくれます。この特徴はラブソングにも当てはまるでしょう。恋に落ちると人は普通ではいられなくなり、混乱状態に陥ってしまいます。ですが、ラブソングの歌詞がその心の状態にぴったり会う言葉を与えてくれることで、混乱が解消されたり、自分が恋に落ちているという自覚が得られたりするのです。」

※失恋ソングの癒しの効果

「失恋ソングを聴くと自分の失恋が思い出され再び悲しくなりますが、それを上回るだけの癒やしの効果があると考えられます。その効果は、先ほど挙げた混乱の解消もありますし、悲しみの身体状態が与えるリラックス効果もあります。

こうした癒やしの効果に加え、本書では「記憶の改変」に注目した考えを提示しました。失恋ソングを聴いて歌詞を私物化すると、自分の失恋が思い出されて悲しくなりますが、その歌詞は記憶を変化させ、交際期間を良い思い出に美化してしまいます。あるいは、恨みの失恋ソングの場合、その歌詞を私物化すると過去の記憶が悪いものに書き換わり、相手への執着が薄れたり、怒りの活力が得られたりします。」

「一見ラブソングは、「愛」という一つのテーマしかない、内容が限定されているものに思われます。しかし、愛には多様な現れ方があるため、ラブソングを描くことで多様な人間のあり方を表現することができるのです。」

哲学的用語に

「一人称権威」というのがあらしい
寡聞にもその用語は知らずにいた

「私たちが自分自身の心とのあいだに持つ
独特な関係を表す」のだという

「自分自身の心について
「私はこれこれです」と一人称的に報告する場合、
その報告は他人によっては覆しがたいような
「権威」を帯びることになる」

そして「心について哲学的に考える」とき
「基本的な前提とみなされている」ということだ

たしかに「自分自身の心」を
他人の「権威」のもとに置くわけにはいかないが

言語使用の観点からしても
ましてや日常的な「自分自身の心」を理解する際にも
さらにいえば精神医学的にみればなおのこと

この「権威」というのは
ある特定の場合に限って
きわめて抽象化されたかたちでしか
成立しえない「権威」であることはいうまでもない

三木那由他「言葉の展望台②自分自身を語るために」で
とりあげられている「一人称権威」は
社会的なコミュニケーションにおける場合のことだが

それは「事実としてすべてのひとにあらゆる場面で
認められているわけではない」といい
「一人称権威について本当に考えるべきこと」は
「どうやって成り立たせていけばよいのか？」だという

しかしこの課題は
社会的な権利問題として語る際においても
「人と人の間」あるいは
その「間」にある社会的力学などによっても
「成り立たせ」るためには非常な困難が伴う



- 三木那由他「言葉の展望台②自分自身を語るために」（群像 2023年12月号）
- 河合隼雄・鷺田清一『臨床とことば／心理学と哲学のあわいに探る臨床の知』（TBSブリタニカ 2003/2）
- 木村敏『人と人との間／精神病理学的日本論』（弘文堂 昭和47年3月）

「一人称権威」は社会的には「人権」に関わるともいえるが
その「人権」は容易に社会制度や法
政治的な施策等によって限定されてしまうことが多いからだ

さらには「人と人」が対する際の相互理解の問題がある
人が他者をすべて理解できるわけではない
相手を信頼し「一人称権威」を認めることで
はじめて相手の言葉を受け入れることが可能となるが

人は容易に嘘をつく
あるいは嘘をつく意図はなくとも嘘になる
あるいは嘘でも本当でもないことを語ることはよくあることだ

しかも人はじぶんのことをどれだけ理解できているか
はなはだ疑問である
それゆえに古代ギリシア以来
「汝自身を知れ！」という箴言が繰り返し掲げられてもきている

そもそも「他者を二人称あるいは三人称の
人称代名詞で名指せるためには、
自己を一人称の人称代名詞で呼ぶという思考構造、
体験構造が確立していなくてはならない。
そしてこのことは、けっして人間にとって
自明の能力ではないのである。」（木村敏）

「自分自身を語る」ためには
「一人称権威」が前提となるだろうが
「語る」ことは「騙る」ことでもあり
騙っているつもりはなくとも
どれほど確立した「自我」があり得るか疑問である

「自分自身を語」っているわけではないけれど
こうして書いている「私」という「一人称」にしても
この「私」が「自明」であるとは決していけない

- 三木那由他「言葉の展望台㊟自分自身を語るために」（群像 2023年12月号）
- 河合隼雄・鷺田清一『臨床とことば／心理学と哲学のあわいに探る臨床の知』（TBSブリタニカ 2003/2）
- 木村敏『人と人との間／精神病理学的日本論』（弘文堂 昭和47年3月）

（三木那由他「言葉の展望台㊟自分自身を語るために」より）

「このところ、「一人称権威」について考えている。一人称権威とは、私たちが自分自身の心とのあいだに持つ独特な関係を表す哲学用語である。」

「自分自身の心について「私はこれこれです」と一人称的に報告する場合、その報告は他人によっては覆しがたいような「権威」を帯びることになる。これが「一人称権威」と呼ばれる現象だ。一人称権威は、心について哲学的に考える際には、（少なくとも私が専門としている分析哲学という分野では）基本的な前提とみなされている。誰かの哲学説を批判するときに「その考え方を採用すると一人称権威が成りたたなくなってしまうのではないか？ それはまずいだろう」と指摘したり、そうした詩的を受けて「いや、この立場でも一人称権威が成りたつと考えることはできるのだ」と応答したりといったやり取りは、学会や論文でよく見かける。それくらい、広く受けいれられている考えなのだ。」

「でも、自分自身の心のありようについての報告には他人には覆すことのできない信頼性が与えられるという原則は本当に広く受け入れられているのだろうか、と最近思うのだ。一人称権威なんて、本当に哲学者たちが考えているほど常に成りたっているのだろうか？」

「一人称権威は決してあらゆる場面で等しく認められているわけではないように思えてくる。一人称権威が「当たり前」に認められるのは、きっと一部のひとだけなのだ。「自分の心については自分がいちばんよく知っている」というのは、裏を返せば「心のなかについてはその当人にしか本当のところはわからない」ということでもある。だから、ひとたび一人称権威が否定されてしまったら、そのひとはもう自分の心についてその相手に伝えることはできなくなってしまう。」

「もちろん、嘘をついていることが明かな場合に一人称権威が成り立たないということ自体に問題はない。問題は、先に一人称権威の否定があったうえで、そこから訴求的に「嘘つきに違いない」という理由づけがなされているのではないか、ということだ。嘘をついているから一人称権威が認められないのではなく、一人称権威が認められないから嘘をついていることにされる、ということが起こっているのではないだろうか。」

「一人称権威は、知識の問題というより、ひととひととの関係の問題かもしれない。自分の心について自分以上に知っているひとはいないからこそ、私たちは互いに「私はあなたの心についてはあなたの言い分を基本的に認めるので、あなたも私の心については私の言い分を基本的に認めてくださいね」と相手を信頼しあって暮らしているのではないだろうか。」

「一人称権威というのはけっきょく何なのだろうか？ わかっているのは、それが事実としてすべてのひとにあらゆる場面で認められているわけではないということだ。多くの場合、私たちは一人称権威を仲間同士で認め合って暮らしている。でも、認め合わなくても支障がない相手を前にしたとき、一人称権威はしばしば退けられてしまう。」

「一人称権威が否定されるとき、そのひとはもはや、心を持った存在として相手とコミュニケーションを取ることができなくなるとさえ言えるかもしれない。一人称権威について本当に考えるべきことは、「なぜ成り立つのか？」ではなく、「なぜ常に成り立つわけではないのか？」、そして「どうやって成り立たせていけばよいのか？」なのではないか。それは単なる哲学的に興味深い現象ではなく、この社会における生存に関わる切実な問題なのだ。」

（河合隼雄・鷺田清一『臨床とことば』～河合隼雄「臨床心理学と臨床哲学」より）

「本書では鷺田さんと、人と人との間の「距離」について話し合っている。（…）あらゆる「臨床」という学問において大切になってくることで、それは人と人との間のみならず、人とある現象の距離の在り方として、考えておく必要があると思う。（…）近代科学では、人間を対象から切り離すことが前提となっているのに対して、「臨床の知」の場合は、人間と対象の関係の存在を前提としている。となると、人間と対象との距離ということがずいぶん大切になってくるのである。」

（河合隼雄・鷺田清一『臨床とことば』～鷺田清一「臨床と言葉（一）「語り」について」より）

「「わたしには他人の痛みというのがどうしても分からないんです……」。わたしはこういう率直な発言が好きだ。ケアについて考えるとき、ひとはよく他者の「全人的理解」などという言葉を口にする。だれかを、そのひとが置かれている状況とそこでの想いもふくめ、まるごとしっかり理解する？　しかしもし「理解」ということが、他人と同じ気持ちになること、より具体的には他人と同じように感じたり、同じように考えたりすることだとしたら、そのようなことはひとりの人間にはおそらく不可能なことであろう。また感情伝染のばあいのように、不意にまるで天啓のように同一の感情にとらえられるということもないではないであろうが、それは感情の共振ということであっても他者の理解ではない。なぜならそこには、「他者の理解」というものがなりたつ前提である、自他のあいだの隔たりというものが消去されているからだ。それに「全人的」ということにも異論がある。ひとは一個の全体としてとらえられるほどまとまった存在ではないからである。」

「自己というもののまとまった像など、だれも思い描くころはできないのである。「物事にはいろいろの性質があり、魂にはいろいろの性向がある。なぜなら、魂に現れてくるもので単一なものはなく、また魂はどの対象に対しても単一なものとしては現れないからである。ひとは同一のことで、泣いたり笑ったりする」。いいかえると、「人間はつねに分裂し、じぶん自身に反対している」……。こう書いたのは、一七世紀フランスの思想家ブレーズ・パスカル（『パンセ』）である。じぶんのことですらそうなのに、はたして他者についてその「全体」を知るということなどできるものだろうか。そして「他者の理解」ができなければ、看護というものは頓挫してしまうほかないのだろうか、ほんとうに。」

（木村敏『人と人との間』～「はしがき」より）

「私は、精神病というものを、人間であるかぎり誰にでも可能性のある、人間の生き方、在り方の一様相であると考えている。したがって、日本人には日本人特有の精神病的な生き方があるものと想っている。さらにまた、フロイトが『日常生活の精神病理』で示したように、われわれが普通と思っている事柄についても、これを精神病理学的に考察するということは、可能であるばかりではなく、必要でもあり、有意義なことでもあると想っている。」

（木村敏『人と人との間』～「第四章　日本語と日本人の人間性／1　人称代名詞と自己意識」より）

「他者の主体性、つまり或る他者が誰であるかということは、つねに自己の主体性、自己が誰であるかということと密接に関連していて、究極的にはこれに還元されてしまう。他者を二人称あるいは三人称の人称代名詞で名指せるためには、自己を一人称の人称代名詞で呼ぶという思考構造、体験構造が確立していなくてはならない。そしてのことは、けっして人間にとって自明の能力ではないのである。幼稚の発育過程においても、人称代名詞の用法が確立するのはかなり言語機能の進んだ時期、つまり自己および他者の自己同一性と不変性についても、すなわち自己あるいはその人称代名詞で名指される特定の他者が、つねに変わらずそれ自身であり続けることについての十分な認識が可能になった時期においてである。」

不老不死を求める者は
古来より後を絶たない

現代においても
生命科学者をはじめ
「不老」と「不死」の実現を求め
さまざまな研究がなされていたりもするが
人は必ず死を迎える
可能なのはある程度の
「アンチエイジング」と延命である

さて四方田犬彦「零落の賦」の
連載第三回は「不死という劫罰」である

記事にとりあげられているなかから
ベケットの三部作『モロイ』『マロウンは死ぬ』
『名づけられぬもの』
そして吉田喜重『贖罪』について引いた

ベケットの三部作における語り手は
「死に瀕しながらも永久に死に到達することができず、
ただただ無意味な饒舌を重ね、
愚かしい物語を思いついては廃棄してゆく」

吉田喜重の小説『贖罪』は
終身刑を宣告されたルドルフ・ヘスの
「刑死も自殺も許されないまま、未来永劫にわたって
牢獄に監禁されることになった者の意識の劇であり、
残酷にも不死を宣告されてしまった者」の
「生に対する悔悟」が描かれている

いうまでもなくここでは
「死にたくない」「不死でいたい」というのではなく
「不死」あるいは「延命」が
続いていかざるを得ない者の
「救済」されない意識が問題となっている

ずっと生き続けるということは
たとえそれが「不老」だとしても
その「生」は生まれてきた身体をはじめとした
諸条件にある程度規定されているがゆえに
比較的短いあいだに
その「生」に倦んでくることになるだろう

「不死」が「劫罰」であるということは
「死」こそ救済であるということになり得る

「死」は「生」に対する「死」であって
生と死を対立的にとらえなければ
「死」を頑なに恐れ拒む必要はない
「生」ゆえに「死」は恐れられる
つまり「生」こそが恐ろしい

霊的な原則として「魂」は失われない
にもかかわらず
この地上世界では
「生」がありそして「死」がある

そして現状においては
ひとは生後の記憶のなにがしか以外の記憶を
もたないままその「一回性」の「生」を送っていく

「一回性」であることに重要な意味がある
そうでなければ「生」における
「個」のペルソナが形成され難く
たとえていえばいつも同じキャラクターしか
演じられない役者になってしまうからである

「一回性」ゆえに
わたしたちの「生」は迫真のものとなる
生きることはいつも新しい経験をもたらし得る

それゆえに「不死」は「劫罰」にもなる
「いつ終わるとも知れない」
そんな「生」が「延々と続いていくばかり」となる



- 四方田犬彦「零落の賦 連載第三回 不死という劫罰」（『文學界』2023年12月号）
- 高橋康也『サムエル・ベケット』（白水ブックス 2017/11）
- 吉田喜重『贖罪/ナチス副総統ルドルフ・ヘスの戦争』（文藝春秋 2020/4）

ベケットの訳者でもある高橋康也は
「ベケットの最も深い意味における宗教性、
彼の道化の逆説的な聖性をぼくは疑うことができない」とし
ベケットの作品の登場人物たちは
「鏡を見ると、そこにキリストを見出す」のだという
「キリストにおける愚者」である

また吉岡実高橋康也の『サムエル・ベケット』で
「想像力は死んだ 想像せよ」
という言葉を見つけたというが
それは「キリストは死んだ 復活せよ」
とでも言っているようだ

パウロが「内なるキリスト」をいうように
私たちは内に「キリスト」を見出すことができる

地上的に生きている私たちは
「死」に到ることも
また「不死」を生きざるを得ないことも
ただネガティブにとらえてしまうところがあるが

「鏡」を見ながら
そこに「キリストにおける愚者」を見出し
「道化」として生きてみるのもいいのではないか

いうまでもなく「劫罰」としてではなく
ペルソナゆえの「遊戯」としての「生」である
さらなる「想像力」もそのためにこそ必要となる

- 四方田犬彦「零落の賦　連載第三回　不死という劫罰」（『文學界』2023年12月号）
- 高橋康也『サミュエル・ベケット』（白水ブックス　2017/11）
- 吉田喜重『贖罪／ナチス副総統ルドルフ・ヘスの戦争』（文藝春秋 2020/4）

（四方田犬彦「零落の賦」より）

「われわれはルキアノスから始まり、ダンテ、ラブレー、スウィフトといった具合に、西洋文学における〈冥界での対話〉の変遷の歴史を辿ってきた。古代ギリシャからルネサンスまで、異常な状況下での陽気で滑稽な対話であるとみなされてきたこのジャンルは、近代に到って暗く陰鬱な様相を帯びることになる。斬首されてもただちに蘇生し、笑いながら冥界での出会いの数々を語る肉体は、もはや再生の契機を喪失し、時間の進行に応じて劣化零落する肉体となる。だが死と再生という祝祭的な二重性が困難となったとき、それと裏腹に台頭してくるのが、〈劫罰としての不死〉という主題である。スウィフトの『ガリヴァー旅行記』に登場するストラルドブルグは、近代人がもはや死を名誉ある救済と認識することができなくなった状況に対応している。冥界廻りと不死という主題は、その後、現代文学においても定石として認識され、数多くのラディカルな作品を生み出す契機となった。」

「アイルランドに生を享けたベケットは、ダブリンに「幽閉」されたスウィフトの正統的嫡子ともいうべき存在である。『モロイ』『マロウンは死ぬ』『名づけられぬもの』は一九五一年から五三年にかけて集中的に執筆された。そこで問題とされるのは、死に瀕しながらも永久に死に到達することができず、ただただ無意味な饒舌を重ね、愚かしい物語を思いついては廃棄してゆく語り手の意識である。

『モロイ』ではまだ主人公はモランという固有名詞をもち、私立探偵としてモロイなる人物を探し出し、報告書を作成するという仕事に従事していた。探求の対象であるモロイもまた自分の母親を探すことを自分の義務だと考えていた。だがいつしか両方の対立は曖昧となり、モランがモロイに同化し、モロイは母親の寝台のなかで、軀も動かせぬまま何かを必死に書くことになる。

『マロウンは死ぬ』では、老いてもはや身動きの取れないマロウンという人物が、丸天井の地下室のなかで何かを書いている。彼は臨終間近であり、それまでの暇つぶしだといいつながら、三つの物語を自分に話し聞かせようとする。もっとも書いている側から、記憶はどんどん失われていく。マロウンが創造した人物が物語のなかで息を引き取るとき、書き手であるマロウンも死ぬ。

『名づけられぬもの』ではもはや語り手に名前がない。それどころか、彼はどこにいて、どのような形態をしてるのかもわからない。ただ際限もなく物語を語る声だけが続いている。物語の主人公は片足で松葉杖を突きながら放浪し、家族のもとに帰ってはきたものの手足を失い、甕に入れられてパリのあるレストランの店先に置き去りにされているという。だがその後で語り手は、それは自分のことだともいう。彼はいったい書いているのか、喋っているのか、また生きているのか、死んでいるのか。何もわからない。ただ、いつ終わるとも知れない言葉が延々と続いていくばかりである。

『モロイ』に始まるこの三部作は、ストラルドブルグが徐々に記憶を喪失し、自分が誰であるかも認識できなくなりつつも、それでも喋り続けるという状況にみごとに対応している。「続けなければならない、続けることはできない、続けよう。』『名づけられぬもの』はまさに死を許されることがないという劫罰を体現してる。不死であるとは語り続けることなのだ。劫罰として語ることなのだ。」

「不死という主題は最近、映画監督の吉田喜重によって、長編小説として展開されることになった。ヒトラーの腹心にしてナチス党の副総裁であったルドルフ・ヘスを主人公とする『贖罪　ナチス副総統ルドルフ・ヘスの戦争』（二〇二〇）は、未来永劫にわたって続くかもしれぬ獄中生活において彼は執筆した手記という設定の作品である。

一九四一年五月十日、アドルフ・ヒトラーの腹心にしてナチス党の副総裁であったルドルフ・ヘスは、メッサーシュミット機をみずから操縦し、ベルリンからイギリスへ単独飛行を行う。彼はただちに逮捕され尋問を受ける。ヒトラーは怒り心頭に発し、ヘスを狂人だと罵倒する。ヘスの意図はいまだに明かではない。秘密裡にドイツとイギリスの和平工作を行うためであったのか、それとも個人的に身の危険を感じての亡命だったのか。

ニュールンベルグ裁判でヘスは終身刑を宣告され、ベルリンの刑務所に収監される。驚くべきことに、彼は多くの有罪判決者と違って死刑に処せられず、最後にはただ一人の囚人として一九八七年まで生き続ける。享年は九十三であった。ヘスは渡英の真意を明らかにしないまま、戦後社会の変転を獄窓から眺め、ゴルバチョフの台頭を知りつつこの世を去った。

　　だがもしここに、ヘスがおのれの人生を真摯に振り返り、すべてを告白した手記が存在していたとしたら？　『贖罪』はこのありえぬ仮定に基づいて執筆された。そこで審問にかけられているのは、題名から察せられるような、ナチスの戦争犯罪に対する贖罪ではない。刑死も自殺も許されないまま、未来永劫にわたって牢獄に監禁されることになった者の意識の劇であり、残酷にも不死を宣告されてしまった者、つまりスウィフトのいうストラルドブルグが抱くことになった、生に対する悔悟である。」

「神々は凋落し世界の片隅に追いやられると、妖怪に身を襲って生き延びた。人間は死して冥界に下ると、地上での地位と名誉、栄光のいっさいを剥奪され、無名にして滑稽な存在に成り下がった。この屈辱的な状況を免れた者を待っていたのはさらに恐るべき刑罰、すなわち不死の身になることであった。死による救済をも剥奪された者たちは、記憶も言語も喪失し、世界が終末を迎えるまで存在することを強いられることになった。

　　では彼ら人間たちは地上でのほかない生の間、いったい何をしていたのか。」

（高橋康也『サミュエル・ベケット』～「道化の遺言」より）

「ベケットとキリストという問題以上に重大なものはぼくにとって存在しなかったのではなかったか。「おれは一生のあいだ自分をきりすとなぞらえてきたんだ」と言うゴゴを代表として、ベケットの主人公たちにはほとんど例外なくキリストとの自己同一視が認められる。ホルバインの画のように。彼らは鏡を見ると、そこにキリストを見出すのだ。いや、彼らは逆に不届きにもこう言うかもしれない―――赤子の「無一知」、マリアの「無一為」を嘉した逆説の達人、さまざまな物語を語った言葉の人、まっとうな連中から愚者よ狂人よと笑われた放浪者、アウトサイダーでありながら人間社会の罪を一身に背負った贖罪羊などとしてのキリストが、もし鏡を見たら、そこにおれたちを見出すだろう、と。彼らこそはパウロの言う「キリストにおける愚者」なのかもしれない。彼らにとってキリストは彼であり我なのである。そしてベケットにとって彼ら作中人物は彼であり我である。さらに、中世人によって道化・狂人が彼であり我であったように、ぼくたち読者にとってベケットの道化・狂人は彼であり我である……。」

『名づけえぬもの』という題名の最も深い曖昧性が浮かびあがるのはこのときである。主人公に与えられたこの名前でない名前、この無名性。しかし「名づけえぬもの」とは、ブランショの「至高者」と同じく、「神」の呼称ではないか（ヘプライ語のY HWH、いわゆる四文字語は名づけえぬ・発音すべからざる神の神の謂いであった）。ベケットの主人公は、はじめ外在的に言及していた「彼ら」や「暴君」をついに「神」として自分の内部に見出すのではないか―――ちょうどモランがモロイを自分の中に見出し、ゴゴとディディの名前の内部にゴドローが隠れているように。そして「神」は「言葉」であり「言葉」は「神」であるならば、「天地は過ぎん、されどわが言葉は過ぎざるべし」（マイイ伝二四章三五節）という神の終末論的予言は、そのまま、いっさいの喪失ののちに言葉（声）だけとなって存在しつづけるベケットの主人公の口から発せられてもいいはずではないか。」

「ベケットの最も深い意味における宗教性、彼の道化の逆説的な聖性をぼくは疑うことができない。」

（高橋康也『サミュエル・ベケット』～巻末エッセイ　吉岡実「想像力は死んだ　想像せよ」）より）

「　　「想像力は死んだ　想像せよ」

『サミュエル・ベケット』を読んでいて、この言葉を見つけた。まこと恐ろしい一言であると思う。ある時期から、詩を書きながら、私は自己の想像力の枯渇したことを感じた。今までは豊かなイメージの湧出に、愉悦とその定着への抑制に精神を集中すれば、私はそれなりに詩の生成に出会えた。しかしこの頃は他人の言葉の引用と、素材的資料、地名、人名を挿入しながら内なるリアリティの確立を試みているのである。

「想像力は死んだ　想像せよ」とは、詩人の恣意のみの軽薄なる言葉の発想を、きびしく戒めているように思われる。しかしまた「想像力は死んだ　想像せよ」と、なおいっそう想像力を喚起せよとの助言であるかも知れない。想像力を超えるものは、真の創造をもたらす想像力意外にないだろうから、高橋康也が、「恐ろしい作家」というベケットの諸作を、私はこれから読んでいこうと思っている。」

「教養」という言葉は
啓蒙的なイメージが付着しすぎていて
普通使われる意味では好きな言葉とは言いがたいが

ドイツ語の「Bildung」が
教養・形成・陶冶と訳されるように
人間的な成長を意味する言葉でもある

昨今は「情報」をいかに効率的に取得し
それを活用するかということが
ビジネス的にも重要になっているが

「情報」をどれほど蓄積しても
「教養」を身につけることにはならない

お手軽に「教養」のいいところ取りをする
「ファスト教養」という言葉も注目され
その安易さが言挙げされてもいるが
それはある種の対象や目的に対する
効率的なアプローチ法として
必ずしも否定されるものではない

さまざまな議論を呼んでいるChatGPTとも
関わってくる側面も少なからずあるように

それはビジネスの領域だけではなく
教育の領域においても
むしろ「自分の頭で考えられる」人間を
いかに要請するかという問いを投げかけているといえる

「自分の頭で考えられる」ということは
現代のような「科学偏重」の「脳化社会」においては
「脳を鍛えよ、「脳」力を高めよ、
という教えに直結してい」きかねないが

ダニエル・C. デネットが
『心はどこにあるのか』で示唆しているように
「脳を主人と見なすのではなく、気難しい召使ととらえ、
脳を守り、活力を与え、活動に意味を与えてくれる
身体のために働くものだと考え」る必要がある



- 丸山俊一『連載 ハザマの思考3 情報と教養のハザマで』
(群像 2023年12月号)
- ダニエル・C・デネット (土屋俊訳)『心はどこにあるのか』
(ちくま学芸文庫 2016/10)

なにかを「理解」するというのが
「腹に落ちる」と表現されもするように
身体全体が関わってはじめて知識が知恵になる
つまりは情報を教養にする身体知でもあるが

得られた情報はそのまま変わらないではない
「いつも異質なものと衝突し、取り込んでもいく」
「固定化された知識、ジャンルとしての教養、
そこから逃れ越境していく」ことが重要になる

そのとき情報は「思考の過程」において
「当初の見解」とは変化し
「メタレベルの高みへと登ることで、
異なる表現の形態を取る」ことになる

「教養は、いつも動きながら、歩きながら、
全身を没入させ身体の可能性を解放していく
過程の中にある」というのである

それゆえにその過程は
「安易に「わかる」ことを知性とするのではなく
「わからない」状態を楽しめる、自由な精神の運動」
でなければならない

ほんらいの意味のBildungとしての教養は
そうしたラディカルなものであってはじめて
「教養」で有り得るといえることができる

ChatGPTで可能なのは既存の情報を
「脳」的な思考範囲で編集するということである
それを「ファスト教養」として活用できるしても
それはあくまでも既存の「わかる」ための教養であり
「自由な精神の運動」であるとはいえないだろうから

- 丸山俊一『連載 ハザマの思考3 情報と教養のハザマで』（群像 2023年12月号）
- ダニエル・C・デネット（土屋俊訳）『心はどこにあるのか』（ちくま学芸文庫 2016/10）

（丸山俊一『連載 ハザマの思考3 情報と教養のハザマで』～「情報か？ 教養か？ 「自己啓発」の意味が変わる時代に」より）

「情報と教養、そのハザマにあるのは何か？　ひとまず、「すぐ役に立ちそう」な知識を指すのが「情報」、「いつか役に立つかもしれない」学識、ものの見方や考え方を指すのは「教養」というところか。（…）「情報も教養も使いこなせる大人」は、その一つの達成の姿なのかもしれない。情報と教養のハザマで、人は成長を求め続ける。」

「自らの能力を開発し、眠っている力を解放することができたなら、それは悪いはずもない。精神的な充実感に包まれて、人間的な成長を実感することができたなら、それは素晴らしいことだろう。だが同時に、デジタル経済の枠組みが拡大するビッグデータ時代、すべてが数値化され指標に置き換えられていく潮流の中、その成長もまるで偏差値を伸ばすかのような感覚に囚われ、結局相対的な競争を強いられている錯覚に陥るのであれば、本末転倒だ。成長を目指す「自己啓発」競争が激しさを増し、そうした動向がネット上でもビッグテックのマーケティングの論理に補足されるようになると、だんだん悲喜劇的な逆説の中に入っていく。「情報」の獲得競争がある種の貧しさをもたらすように見える今、「教養」をめぐる言説も変化してきている。」

（丸山俊一『連載 ハザマの思考3 情報と教養のハザマで』～「「ファスト教養」の時時代へと到った理由」より）

「ファスト教養と名づけられることになった、二〇二〇年代に生まれた現象。それは、社会と個人との間にいかなる関係性を生むべきかという、実に古典的な、長い歴史の問題、近代社会以降の啓蒙の歴史の問題とも深く関わっているように感じる。

　社会の潮流の変化の中、人は揺れる。個人は個人としてあるのではなく、様々な社会規範の中で人々の意識は形成されていく。手っ取り早い知の消費化へと人々が流され、知の「ファスト商品化」も進む。文明論的な転換期にあるという視点で、俯瞰して現状を眺める時、「ファスト教養」の話題を引き継ぐかのように、今年前半はあの新たなテクノロジーの登場がビジネス誌の特集記事でも持ちきりとなった。ChatGPTだ。」

（丸山俊一『連載 ハザマの思考3 情報と教養のハザマで』～「「脳は主人ではなく、気難しい召使」に過ぎない？」より）

「画期的な新技術（ChatGPT）をめぐる議論百出。この人間の代わりに答えを出してくれるかの如き存在をめぐる、様々な識者たちから授けられる対抗策が誌面を飾った。そしてそれらの提言は、自ずからビジネスの範疇から教育の領域へも及び、「自分の頭で考えられる」人間の要請が肝要だという、ある意味、ずっと繰り返されてきたメッセージに再び光が当たった。

　実際、「自分の頭で考える」というその感覚自体が、少しずつ失われていく世の中なのだ。（…）様々な知を外部化させ、情報取得の機能の少なからざる部分を頼ることが日常化している現代人。やはり、ここは、「自分の頭で考える」ことが大事だと再び言いたくなるのはよくわかる。

　だがこのメッセージも奥行きと膨らみをもって捉えねば、ある種の罫となる可能性がある。そこで思い起こすのが、一人の異色の哲学者の言葉だ。

　脳（つまり心）は数多い臓器の一つであり、比較的最近になって支配権を握ったという考えである。つまり、脳を主人と見なすのではなく、気難しい召使ととらえ、脳を守り、活力を与え、活動に意味を与えてくれる身体のために働くものだと考えないかぎり、脳の機能を正しく理解することはできないのである。（『心はどこにあるのか』ダニエル・C. デネット 土屋俊訳 筑摩学芸文庫）

　「脳化社会」とも呼ばれて久しい今という時代は、様々なビッグデータによる情報処理、そうした数値が、すべての真実であるかのように一人歩きして社会を席卷する。行き過ぎた「科学偏重」に対して一部では人文系の知の復権を唱えるような議論も生まれ、錯綜した様相も呈しているが、その多くの場合、脳を鍛えよ、「脳」力を高めよ、という教えに直結していく。

　しかしそこに、「心の哲学の第一人者」と言われるデネットは、疑義を呈する。「脳を主人と見なすのではなく、気難しい召使」に過ぎないとするのだ。デジタルと人文知と、情動的領域と教養的感性のハザマを考えようとする時、「自分の頭で考える」=脳の反応／機能だけではないことを思い起こし肝に銘じよ、というわけだ。」

「人は無意識のうちに、心の、人格の所在を脳に求めるのだ。だが、そこから零れ落ちるものがある。

（…）

　単に知識だけでなく行動に移せてこそ教養だ、という言い方が時になされるが、こうした身体性の議論まで視野に入れると、また別の納得感が生まれるだろう。ちなみに日本語のレトリックは奥深いもので、ちゃんと深くものごとを理解する時に、脳の格納庫である「頭」ではなく、「腹」に落ちる、と表現する。知識が知恵になり、信頼全体に浸透していったこそ、情報が教養として熟成されるイメージがそこにある。」

（丸山俊一『連載 ハザマの思考3 情報と教養のハザマで』～「「設計なき適応」による進化の中で「思考の形態」を発見する時」より）

「異色の哲学者デネットの論を通して、精神と身体の、情報と教養のハザマを考えてみたわけだが、数年前Eテレの特別番組でA Iと人間の関係性をめぐって彼にインタビューを試みた際には、さらなる興味深い言葉を口にしてくれた。

「設計なき適応」こそが人類の進化の歴史の中心にあるというテーゼだ。デネットの着想の本質が集約されたこの言葉は、「脳化社会」への大いなる批判であり。脳の情報処理ですべての意思決定を行っているかのように思いがちな現代人へのあらためての警告だった。あくまで環境への適応を試みようとした「結果」が進化であり、脳の複雑化であるという順序を間違っはいけない、というわけだ。だからこそ、そこで発揮されているのは、「理解力なき有能性」であるというユニークな表現もそこに加えられた。

　そしてこの時、この考え方に現代人が馴染むのはとても難しいだろうということを彼が付け加えていたことも印象深い。なぜなら我々近代社会の教育の基本は、ほとんどの場合「理解力こそが有能性の根源」という正反対の考え方に支えられているからだ、と。」

（丸山俊一『連載 ハザマの思考3 情報と教養のハザマで』～「時計の針が「逆戻り」する時代の精神の運動」より）

「教養的なマインドの真骨頂は思考の過程そのものにあり、情報として捉えた当初の見解が最終的には変わってしまう、メタレベルの高みへと登ることで、異なる表現の形態を取るということではないだろうか。山道を登って行く時に、同じ方向を一段また一段と、高いところから眺めることがある。山を取り巻く螺旋状の道を登れば、同一の位相からの光景に、少し異なる視野で何度も出くわすこちよになる。その時、もう一段高いところから見ることで、見えなかったものが見えてくたり、俯瞰する視野の中での相対的な位置関係がクリアになっていく。あの感覚だ。教養は、いつも動きながら、歩きながら、全身を没入させ身体の可能性を解放していく過程の中にあるのだ。そして、いつも異質なものと衝突し、取り込んでもいい。固定化された知識、ジャンルとしての教養、そこから逃れ越境していく時が楽しい。

　環境への適応がたまたま生んだ、この高度情報化社会。そこでは、ひとまず脳を主体とする情報処理が最も求められる能力であり、実際、学校でも職場でもその能力への評価に重きが置かれることである程度機能してきた。しかし、今一度繰り返すが、あくまで、近代という時代、過渡期のデジタル社会という環境への結果としての脳重視、能力＝脳力とでも言いたくなる状況が生んできたものだ。まるで、I T、A Iの開発が折り返し点であったかのように、時代の針が逆戻りし始めたとも思える。もちろん、それは単なる「逆戻り」ではないことは明かだが。

　こんな逆走を始めた感覚が頭をよぎる面白い時代に、最近ではテレビ番組ばかりでなく。WE Bコンテンツの制作にも関わることもある。そこでもテーマは新時代の教養だ。「LIBERARY」なるサイトで、ビジネスパーソンたちに、それこそ頭だけでなく全身で浴びるようにリベラルアーツの海に漕ぎ出してもらいたくて、森羅万象、自然科学、社会科学、人文科学……、あらゆる学問領域の知の最前線を語ってもらう動画を揃えようとしている。その過程でも、やはり僕自身心躍るような感覚を覚えるのは、そこにある、ある種の跳躍の瞬間だ。様々なテーマで語られる知のハザマで、テーマからテーマへと飛ぶ過程でエウレカが沸き起こる。「ダンゴムシに心はあるのか？」という問いかけを受けとめ考えているうちに、「ビデオゲームの美学」が言語化できない現代のかけがえのない感性を照射していることに思いを馳せ、精神科医によって語られる「現代人が失った働く意味の取り戻し方」の話がいつの間にかつながってしまう……という具合に、動画から動画へ、コンテンツ・サーフィンをしているうちに、様々な話に興行きが生まれ、立体的に響いてくる。

　情報と教養のハザマを、思う存分、時代の変化を頭からつま先まで、全身で真摯に受けとめていく覚悟があれば、「成長」を越えた「進化」が生まれることだろう。その状態を表現、描写する為には、自ずから新たな言語も要請されることになるのかもしれない。「情報」で捉えた、聖俗、硬軟、様々なジャンル分け、判断の背後にある価値観を疑い、そこに亀裂を走らせる「教養」は時に野性的で反文明的にすら見えることもあるだろう。安易に「わかる」ことを知性とするのではなく「わからない」状態を楽しめる、自由な精神の運動だ。新時代の情報と教養のハザマには、ラディカルな形容矛盾の世界が蠢いているのだっ
た。」

○丸山/俊一

1962年長野県松本市生まれ。近代経済学からマルクス経済学まで、社会思想から現代思想まで幅広く学び、慶應義塾大学経済学部を卒業後、NHK入局。時代の潮流を捉えた異色の教養番組を企画、制作し続ける。現在、NHKエンタープライズ番組開発エグゼクティブ・プロデューサー。早稲田大学、東京藝術大学で非常勤講師も務める。

○デネット,ダニエル・C.

1942年生まれ。アメリカの哲学者。ハーヴァード大学を卒業後、オックスフォード大学にて博士号を取得。タフツ大学教授、同大学認知研究センター共同ディレクター。心の哲学の第一人者であり、認知科学者としても知られる

「改行」は
文の意味以外の
意味を生み出す

記事で紹介されている事例

ゴミを流さないよ
うにお願いします

のように

「ゴミを流さないようにお願いします」では
生み出されないだろう意味が
「読み」の可能性としてでてくる

いうまでもなく

掲示されている場所から考えると
そのほんらいのメッセージが
誤解されることはまずないのだろうが

16文字を単純に8文字ずつの二行にすることで
おそらくそれを記したひとの意図には
なかったであろう意味が
読みの可能性として加わってくる

各所で掲示されている言葉には
このように「改行」によって
ほんらい伝えようとする以外の意味が
そこに付け加わってくることもある

それらのほとんどは
一行の文字数を適当に決めているために
変なところで改行されているだけで
別の意味として成立するだろうような
そんな表現にはなっていないことのほうが多いが

記事のなかで紹介されている「改行」の事例

哲学カフェ
エ

申し訳ありま
せんでした

のように
改行されることで
なぜそこで改行されているのか疑問に思い
その改行を意識せざるをえないこともよくある

これらを勝手に深読みすれば
その「改行」や
ばあいによってはたまたま間違った表記かもしれない
が
それらがたとえ意識されていなかったとしても
その意識下になんらかの意図があったのではないかと
かいう邪推を試みたくもなる

また以下の引用事例で紹介されているように
子どもが書いた落書きの
改行をたくさんつけた表現が
不思議なエネルギーに満ちていたりもする

この子どもの落書きとも通ずるところがあるが
たとえば詩の表現においては
「改行」は
それがつくりだすリズムを使った
表現技法ともなることも多く
また短歌のばあいでいえば
「空白」が使われたりすることなどもよくある

しかしこうした「改行」や「空白」とは逆に
きわめて改行の少ない
さらにいえば「、」なども最小限にしか使わない
そんな文章表現がなされていることもある



■永井玲衣『世界の適切な保存②改行する』
(群像 2023年12月号)



それらの多くは段落そのものがとても長く
一見読み難いとも思われるのだが
その表現手法が効果的に働くばあい
意外にもそのつくりだすリズムによって
むしろそこで語られていることが
きわめて有機的な意味生成を伴ってきたりもする
(効果的でないときは単なるカオスになるが)

「改行」や「空白」も
あるいは逆にそれらがきわめて少ないときも
それらが効果的になされているならば
それらも言葉の見えない働き
あるいは文章そのものの意味以外に
意味を生み出す表現技法としてとらえると興味深い

■永井玲衣『世界の適切な保存⑩改行する』
(群像 2023年12月号)

「そこで改行なのか、と思うことがある。
街の張り紙や看板、フライヤーなど、ふと見渡すだけで多くのお知らせが見つかる。お知らせの背後には、それをつくった人間がいる。当然ながら、その作り手を取りまく様々な状況や環境がある。忙しかったのか、確認ができなかったのか、お腹がすいてぼうっとしていたのか、もう何もかもどうでもよかったのか。知ることはできないが、何かが確かにあったのだ。

ゴミを流さないよ
うにお願いします

「ウニを注文してしまっている」と話題の張り紙を、ネットで見つけて感動する。流さないよ、とやさしげに語りかけているのも好印象だ。おそらく貼るまで気がつかなかったのだろう。仕方がない。ここでウニを注文するわけがないのだから。

言葉に変な切れ目が入る。意味が変わる。取り違える。どこに間が入るかによって、違った世界がべろんと露出してしまう。

哲学カフェ
エ

むかし、ある哲学カフェのフライヤーでこんな表記があったのを見かけた。すさまじい改行だった。何かしらのミスだったと思うが、直すことはできなかったのか、まあ意味は伝わるしいいか、という誰かの大らかさがあったのか。数年経った今でも気になってしまう。

ウニの注文のように意味が通っているわけではない。「エ」だけをとらえることは不可能だ。だが、どこか「エ」がひとりで立ち歩いて「哲」と肩を並べたくなったかのように思えてくる。何も考えずに「哲学カフェ」とひとまとまりで発音していたことが、だんだんと気にかかってくる。これを発音するとなると、どうなるのだろうか。

申し訳ありま
せんでした

これもずいぶん前に、あるひとから送られてきたメールだ。なぜここで改行をしたのだろう。気にかかる。何も考えずに打ち込むことができる。なんだったら予測変換で一発で出すことができる「申し訳ありませんでした」が、妙な光り方をする。もしかするとこのひとは、今ものすごく申し訳ない気持ちではないかと、想像が広がる。

改行はリズムは。ここで言いたいのか、軽快なリズムではない。なめらかに進んでいたものが、突然ぶつりと切れてしまうような、とまってしまうような、そしてまた開始されるような、そんな変なリズムだ。

ねむりのないねむりのあとに
ふたたびねむる
ねむること
なく
(リチャード・ブローディガン『ブローディガン東京日記』福間健二訳、平凡社ライブラリー、二〇一七年、一五三ページ)

言葉が、改行によってリズムが生まれ、動き出し、よたよたと歩く。波が寄せてはかえすような仕方で、言葉がこちらにきて、あちらに流れる。」

「　クリスマス・ソングが好きだ　クリスマス__ソングが
好きだというのは嘘だ　　(左クマサトシ)

詩が改行をつかうなら、短歌は空白をつかう。一瞬の沈黙のような差し込みが、がくんとしたリズムを生み、身体にいつまでも残る。」

「街のある場所に、通りがかったひとが自由にチョークで書き込むことのできる黒板を見つけた。ふらふらと近寄って、ほとんど落書きと言えるような文字や絵を眺める。

黒板は広く、大きかった。白いチョークで、ぐちゃぐちゃと押し合うように文字が並んでいる。多くの人が書き込むせいか、被ったり消されたりしていて読みにくい。

その中で、生命がみなぎるような字が目飛び込んできた、不格好だが、一画一画が集中力を帯びているような字で、子どもが書いたものだとわかった。

たのし
いか
らいっ
しょに
いきよう

みんな
いっぱい
たのしく
いきようよわたし

かいぞく
もなんに
もこないよ
！！

わたしは、この字を何度も読んだ。声に出した。

奇妙な改行によって、エネルギーの一瞬一瞬に切れ込みが差し込まれながら、むしろ速度を増して、のぼっていくようだった。

まっすぐに駆け出すこともできる。だが、空白が入り込むことによって、ぐぐっと踏ん張り、上に跳び上がることもできる。子どもの言葉は、とまっているあいだに、体をひきしぼり、より遠くへと飛んでいった。

言葉が上空ではじけて、ひとびとの上にふりそそぐならば、どんなにいいだろう。「いっしょにいきよう」と、言葉は笑っている。」

「森の運命と人類の運命は
分かちがたく結びついている。」

これはたしかだ

環境問題が深刻な昨今人類は自らを

「自然の循環プロセスの中にふたたび組み入れ、
他の生物により多くの自由をあたえ、すべての生物が
安心して暮らせる地球の構築を目指す」必要がある

「気候変動を柔軟に乗り越えられるだけの
効率のよい社会的共同体を形成している」樹木を
広い範囲で再生させることで
人類も新たな道を歩んでいく希望がひらかれる

ペーター・ヴォールレーベン
前著『樹木たちの知られざる生活』に続き
「人新世」と名づけられている時代に代わる
新たな地質時代としての
「樹木世」が提唱されることを願い
『樹木が地球を守っている』を著している

テーマは森を再生させるために
「森への介入をやめ、
自然に再生が行われるのを待つ」こと
「人間は自力で農園はつくれても、
森はつくれないと知る必要がある」

樹木や森林に関する生態の研究は
急速に進んでいるが
いまだ「木の謎は、カーテンをほんの少し開いた程度
開明されたにすぎない」という
そのなかでも細菌や菌類といった微生物の役割については
やっと知られ始めたといったところだ

植物と微生物の関係や森の知性については
齋藤雅典『菌根の世界』と
スザンヌ・シマード『マザーツリー』を
mediopos2146 (2020.10.1) と
mediopos3000 (2023.2.3) でとりあげたことがあるが

mediopos3000 (2023.2.3) でとりあげたことがあるが

『樹木が地球を守っている』では
「菌根菌」ではなく「根粒菌」についてふれられている

菌根菌はリン酸を
アブラナ科・アカザ科・タデ科植物以外に供給するのに対し
根粒菌は窒素をマメ科植物に供給する
(その違いと共通点そして役割については
セイコウエコロジヤbySEIKOSTELLAのサイトから
「菌根菌と根粒菌の違い」にわかりやすくまとめられている)

さてペーター・ヴォールレーベンは本書で
「ホロビオン (ホロ=全体、ビオス=生命)」という
微生物と共生する生命体についての考え方を示唆している

ひとりの人間にしても
「何千種もの細菌からなる小さな生態系」である

手のひらにさえ
一人当たり平均一五〇種類の細菌が存在し
左右それぞれの手においても
その組み合わせは大きく異なり
類似率は約一七パーセントにすぎず
しかも手洗いをしてもしばらくすると元にもどるとい



- ペーター・ヴォールレーベン (岡本朋子訳)
『樹木が地球を守っている』 (早川書房 2023/9)
- 齋藤雅典 (編著) 『菌根の世界』 (築地書館 2020/9)
- 齋藤雅典 (編著) 『もっと菌根の世界』 (築地書館 2023/9)
- セイコウエコロジヤbySEIKOSTELLA
「菌根菌と根粒菌の違い | 共通点と役割を徹底解説!!」

いうまでもなく樹木も
そうしたホロビオンとして存在し
「同じホロビオンは一つとして存在しない」

そうしたホロビオンとしての生態系が
無数に集まってこの地球上の環境をつくりあげている
いまだそれらの「謎」はほとんど未知のまま

現状は環境破壊どころか
意図的な戦争や医療による人間そのものの破壊さえ
激しく進行しているところだが

そうしたさまざまなかたちでの破壊を抑止しながら
環境に対して「適度な謙虚さ」をもち
自然の自己治癒力を活かす方向へと
シフトしていくのは喫緊の課題だといえる

- ペーター・ヴォールレーベン（岡本朋子訳）『樹木が地球を守っている』（早川書房 2023/9）
- 齋藤雅典（編著）『菌根の世界』（築地書館 2020/9）
- 齋藤雅典（編著）『もっと菌根の世界』（築地書館 2023/9）
- セイコウエコロジアbySEIKOSTELLA『菌根菌と根粒菌の違い | 共通点と役割を徹底解説!!』

（ペーター・ヴォールレーベン『樹木が地球を守っている』～「まえがき」より）

「森の運命と人類の運命は分かちがたく結びついている。（…）樹木は現在進行中の気候変動を柔軟に乗り越えられるだけの効率のよい社会的共同体を形成している。それだけでなく、二酸化炭素を吸収し、その能力はどんな科学技術よりも優れている。したがって、森を活かすことは人類にとって最善の選択肢である。また、樹木には、周囲の気温を下げるだけでなく、雨量を適切な量に増やす働きもある。

以上のことを、樹木は人間のためにではなく、自分たちのためにやっている。」

「森林研究は、樹木の知られざる生態を解き明かすことで急速に進んだ。とはいえ、木の謎は、カーテンをほんの少し開いた程度開明されたにすぎない。とりわけ、細菌や菌類といった微生物の役割については、未発見の菌種が多いため、ほとんど解明されていないのが実情である。人間にとって腸内細菌叢が大切なように、樹木にとっても細菌や菌類は大事な存在だ。微生物なくして生命は存在しないと言っても過言ではない。この謎めいた菌の世界については、新たな研究報告がある。それによると、個々の木は独自の生態系を形成し、それは無数の不思議な生物が棲む惑星に匹敵するほど複雑だという。

さらに、森全体に目を向けると、驚くべき事実が判明する。森は大規模な気流を形成し、その気流は雨雲を数千キロメートルも離れた他の大陸まで運び、本来なら砂漠であるような場所に雨を降らせている。

樹木は、人間が引き起こした気候変動にただ受け身で耐えつづける生物ではない。環境を自らつくり出し、コントロール不能に陥りそうなものがあれば、それに対処するクリエイターである。

樹木は、環境の変化にうまく対応するために、二つのことを必要とする。それは、時間と静寂である。人間が森に介入するこちよは、どんな形であれ、生態系を乱し、森が新たな均衡を取り戻す機会を奪ってしまう。森を散策している際に、何十年も続けられた皆伐の現場を目の当たりにし、林業が森林破壊を助長していることを知った読者も大いに違いない。それでも、希望はまだある！　森は人間が放置すれば、どんな場所であれ素早く再生する力をもっている。私たち人間は自力で農園はつくれても、森はつくれないと知る必要があるだろう。森を助けたいなら、森への介入をやめ、自然に再生が行われるのを待つのがいい。適度な謙虚さと自然の自己治癒力に対する楽観的な見方さえもてれば、未来はとりわけ「緑豊かな」ものとなるだろう！」

（ペーター・ヴォールレーベン『樹木が地球を守っている』～「数千年の学び」より）

「生涯学習は現代の教育政策が生み出したものだと考えるのは間違いだ。樹木は何百万年も前からこれをやってきたのだから。特に何前年も生きつづける樹木にとって、学習は生き延びるために不可欠である。端溪の生物は繁殖かつ大量に繁殖し、その際に遺伝子の突然変異を起こすことで必要な適応力を子孫に身につけさせることができる。たとえば、腸内細菌の代表格である大腸菌は、最適な条件下では二〇分ごとに繁殖する能力をもっている。こんなことは、樹木にとっては夢物語ではない。極端な場合、成熟するまで数世紀かかることもある。」

「新しい経験をもとに行動を変えることを学習という。学習は長寿の生物にとって、生き延びるための最も重要な戦略である。じつは植物は、私たちが考えているよりも複雑な方法で学ぶことができる。」

「生涯を通じて学びつづければ、知識は大量に増える。人間はそれらの知識を、近代以前には口承で次世代に伝え、近代以降は書物やコンピュータに保存してきた。しかし、木はどうだろう？　一本の木が死ぬと、その木が身につけた知恵も一緒に消えてしまうのだろうか？　「そうにちがいない」と、科学者は長年考えてきたが、最新の研究結果がこれをくつがえした。じつは、樹木も知恵を次世代に伝えている。」

「木は生涯をおとして学習し、その種には最新戦略が書き込まれている。よって、生まれた子どもは親と同じ失敗を繰り返して一から学び直す必要はない。（…）親木が長生きすることはデメリットではなく、逆に大きなメリットになる。なぜなら、木は年を取れば取るほど賢くなり、環境への適応力が高まるからだ、子どもの木は親の木が何世紀にもわたり学習したものを受け取ることになる。」

（ペーター・ヴォールレーベン『樹木が地球を守っている』～「細菌————過小評価されている万能選手」より）

「土壌の中に生息する生物種の数についてだけは、フォートコリンズにあるコロラド州立大学のケリー・ラミレス博士率いる研究チームのおかげで、暫定的な数値が出ている。研究チームは、ニューヨークのセントラルパークで約六〇〇カ所の土壌サンプルを採取し、その中に含まれる遺伝子を分析した。その結果、一六万七七一六九種の生物が発見された、それらはすべて細菌種に分類される微生物であり、なんと、そのうちの約一五万種は新種だった！」

「微生物は貴重な存在なのだ！　その重要性は私たち自身の身体が教えてくれる。人間の身体の中には、少なくとも細胞と同じぐらい多くの細菌が存在している。したがって、細菌は、血液細胞や感覚細胞と同じように人間の身体の一部である。細菌の研究では、細菌がどれほど人間に影響をあたえるかが明らかにされている。たとえば、腸内細菌は、脳内の神経伝達物質をつくり出している。（…）

一人の人間は、何千種もの細菌からなる小さな生態系とっていい。細菌の組み合わせが指紋のように一人ひとり違っている。ある研究によると、人間の手のひらには、一人当たり平均一五〇種類の細菌が存在しているという。しかも、細菌の組み合わせは、左右の手で大きく異なり、左右両方の類似率は約一七パーセント。これが、他人の手のとの比較になると、一三パーセントにまで下がる。この研究の対象になった被験者の手のひらの上では、計四七四二種類の細菌が見つかった。これを、脊椎動物の種の多様性と比較してみるとその違いは明らかだ。（…）人間の手のひらのほうが生物多様性という点では優れていることになる。ちなみに、手のひらの上の小さな生態系は、手を洗っても壊されることはない。手洗いのあとしばらくすると、細菌が急速に繁殖して元どおりになるという。

人間は微生物なしでは生きられないし、微生物も人間なしでは生きられない。科学者はそうした共生関係にある生物の一つの生命体ととらえ、ホロピオント（ホロ＝全体、ピオス＝生命）と名づけた。地球上には多数のホロピオントが生息している。こういうと、まるでSF映画のように聞こえるかもしれない。しかし、人間のような一〇〇兆個もの細胞からなる多細胞生物は、これまでのような個体として認識されるだけでは、多くの場合、科学的意味をなさなくなってしまった。ホロピオントという概念を受け入れると、種の多様性という見方すら非常に不十分に思われる。というのも、同じ生物種の中でも、ホロピオントは非常に他種多彩であるからだ。同じホロピオントは一つとして存在しない。」

「植物、特に樹木は、細菌との協力や融合を昔から行ってきた。」

「かつては、菌類と藻類が融合して子実体を形成することも「共生」と呼ばれていた。しかし、菌類と藻類は子実体を形成することで独自の「種」を形成し、その後は別々には生きられない。したがって「共生」という言葉は適切ではない。菌類と藻類が融合して形成する「種」は地衣類と呼ばれ、地衣類は「ホロピオント」とみなされる。そう解釈しないと、私たちの血液の中で病原体を攻撃する食細胞も、人間の体の一部ではないことになるだろう。

根粒菌は少なくとも木と融合する前は独立した存在である。そのため、木は根から栄養分を周囲の土に放出して、根粒菌をおびき寄せる。それに気づいた根粒菌は、木の最も細い根の部分である根毛に向かって移動する。根毛が根粒菌を認識すると。木は根粒菌の侵入を許可する。私にいわせると、この時点で、「共生」は終わり、木rと根粒菌は融合し、新しい存在（ホロピオント）に生まれ変わる。そこで、木が最初に行うのは、新しい住人の家として根に小さな粒を形成すること。もちろん、家をつくるためにはエネルギーが必要だが、消費したエネルギーは窒素肥料という形で返してもらえる。そのおかげで、根粒菌と融合した木は、窒素が少ない土地でも生長することができる。通常、木は周囲の植物よりも背丈を伸ばそうとするため、根粒菌との融合が大きなメリットになる。根粒菌の恩恵を受けているのは、ハンノキのいくつかの種類は二セアカシアといった木である。多くの樹種は生まれながら細菌と融合するための機能が備わっていない。いっぽう、そうした機能があっても、それを使わない気も存在する。その代表的なものがセイヨウシデである。」

「新しい知識を受け入れようとしない科学者は、今も昔も存在する。しかし、林業の場合、そうした科学者の意見が悲劇をもたらしかねない。森林は気候変動抑制の不可欠な要素であるにもかかわらず、林業は世界の森林の三分の二に悪影響を及ぼしている。

多種多様な生物と大量の微生物で構成されている複雑な生物共同体が、森林の生態系を維持している。そう考えると、林業はまるで、陶器屋を訪れた、曇れん坊のゾウのようなものだ。気候変動に対処する方法として林業従事者が出したアイデアは「森の交換」。目下、彼らはブナの森を外来種のセイヨウグリヤテバノンスギを植林した人工林と交換しようとしている。森林はいよいよ自然とはかけ離れた人工的な形へと変化し、気候変動に耐えられなくなる危険性が高まっている。」

（ペーター・ヴォールレーベン『樹木が地球を守っている』～「全員が同じ方向へ進む必要があるのか」より）

「頑固者集団が方向転換するかどうかを見届ける時間は、私たちには残されていない。いまこそ、森には「新しい風」が必要だ。その風は林業システム全体を変えることでしか吹かせることはできない。

じつは、もうその風は吹いている！」

（ペーター・ヴォールレーベン『樹木が地球を守っている』～「森はふたたび戻ってくる」より）

「近年、科学者たちは、地球が地質学上の新時代に突入したとして、それを「人新世」と名づけた。この時代は、私たちが終わらせなければならない。とはいえ、私は人類や現代文明の破壊を提案しているわけではない。いまこそ、人類は自らを自然の循環プロセスの中にふたたび組み入れ、他の生物により多くの自由をあたえ、すべての生物が安心して暮らせる地球の構築を目指すべきだ、といたいのだ。かつて、地球上の大陸の大半は森林でおおわれていた。その森林を広い範囲で再生させることは、未来への希望につながるだろう。それを実現する方法は、食肉消費量の削減などを例に挙げて説明したとおりである。近い将来、新たな地質時代として「樹木世」が提唱されることを私は願っている。」

（ペーター・ヴォールレーベン『樹木が地球を守っている』～「森林に対する無知と謙虚さについて————ピーエール・イービッシュによるエピローグ」より）

「気候変動は、謙虚であることの大切さを教えてくれる。私たち人間は、自らの「無知」と共存することを早急に学ばなくてはならない。人間は自信をもってはいけない。また、自然がもつ知識を決して過小評価してはならない。優秀なエンジニアたちとテクノロジーが生み出す解決策が地球を救ってくれると信じるのではなく、昔ながらの「慎重さと予防の原則」に従って行動しなくてはならない。人間は「無知」を受け入れ、尊重することで、よりよい道を見出せるようになるだろう。」

（齋藤雅典（編著）『もっと菌根の世界』～「はじめに」より）

「陸上の植物種数は三〇万種を超えるとも言われているが、その陸上植物の八割以上の種では、菌根菌という菌類（カビの仲間）が根に共生していて植物の生育を助けている。根に棲む菌根菌は植物から光合成産物を受け取る代わりに土から養分を吸収し、それを植物へ供給している。菌根菌と植物は、養分のやりとりを通して、相互に持ちつもたれつの共生関係にある。しかし、共生とはいっても、その内容は多様である。菌の種類も植物の種類も多様であるし、お互いに持ちつ持たれつの相利的な関係もあれば、中には、まるで植物に寄生しているかのような菌根菌もいる。かと思えば、懇々菌に栄養を依存してしまっている植物もいる。

このような多様な菌根世界について解説した『菌根の世界————菌と植物のきってもきれない関係』を二〇二〇年に出版した。幸いにしで、多くの方々にご好評をいただき、刷を重ねてきた。そこで本書では、前書では取り上げることのできなかったエリコイド（ツツジ型）菌根の章を加え、菌根の分野で国内外の研究をリードする研究者に、「知られざる根圏のパートナーシップ」を探るために、どのように、またどのような思いで研究を進めてきたか、苦労話も含めて、書いてもらった。」

（齋藤雅典（編著）『もっと菌根の世界』～「おわりに————菌根菌の農林業への利用」より）

「①アーバスキュラー菌根菌

　農作物を含む広範囲な植物種に共生するアーバスキュラー菌根菌には、作物の生育改善やリン酸施肥量遡源の効果が期待されている。一般的には、播種、育苗段階でアーバスキュラー菌根菌資材が摂取される。国内外の多くのメーカーがさまざまな種類のアーバスキュラー菌根菌資材を販売している。ネギのように比較的栽培期間が長く、リン酸吸収力の弱い作物への効果が期待されている。」

「畑を耕さない不耕起栽培という農法がある。耕起することによってかえって土壌浸食を引き起こすことから開発された栽培法であるが、最近では環境再生型農業の一つとして注目されている。耕起すると土壌中に広く伸長したアーバスキュラー菌根菌の菌糸が切断されてしまうために、菌根気の動きが抑制される。不耕起栽培では、菌糸が切断されないために、菌根菌を介した養分吸収の動きが継続的に担保される。」

○ペーター・ヴォールレーベン（Peter Wohlleben）

1964年、ドイツのボンに生まれる。大学で林業を学び、20年以上、森林管理官として働いた経験をもつ。現在は、自ら設立した森林学校で、イベントや林業従事者向けのコンサルティングを行なうほか、世界各地で天然林の再生を促す活動を展開している。著書『樹木たちの知られざる生活』（早川書房刊）は、ドイツで100万部を超えるベストセラーを記録し34カ国に翻訳された。2021年に刊行された本書もドイツの有力誌『シュピーゲル』でベストセラーリスト入りを果たしている。

○齋藤雅典

1952年東京都生まれ。東京大学大学院農学系研究科を修了後、農林水産省・東北農業試験場、同・畜産草地研究所、農業環境技術研究所を経て、東北大学大学院農学研究科教授。2018年に定年退職、同・名誉教授。研究テーマは、アーバスキュラー菌根菌の生理・生態とその利用技術。農業生態系における土壌肥沃度管理。農業活動に関わるライフサイクルアセスメントなど。おもな著書に、"Arbuscular mycorrhizas: molecular biology and physiology"(共著、Kluwer、2000)、『微生物の資材化——研究の最前線』(共著、ソフトサイエンス社、2000)、『新・土の微生物(10)研究の歩みと展望』(共著、博友社、2003)、『菌根の世界——菌と植物のきってもきれない関係』(編著、築地書館、2020)などがある。

身近な生き物

たとえばイヌやネコ

ウマやクマそしてスズメなどが

どのように進化してきたかについて

私たちの多くはおそらく知らないでいる

本書では最新研究成果のもと

「系統樹マンガラ」などの図を参照しながら

身近な動物たちの起原を知ることができる

たとえばイヌ

イヌは東アジアにいた

ハイイロオオカミの集団から進化してきたが

イヌの祖先とヒトは

互いに影響を与えあいながら「共進化」してきた

イヌは「東ユーラシア」「西ユーラシア」

そして「そり犬」の3つのグループに分かれる

最終氷期の終わる1万2000年前頃までには

東ユーラシアと西ユーラシアのグループは分かれているが

東ユーラシアグループの犬のゲノムの中には

ニホンオオカミの祖先由来のものが残っているという

そしてネコ

ネコはヨーロッパヤマネコの一亜種の

リビアヤマネコが家畜化されたもの

ネコがヒトと生活を共にするようになったのは

農耕が発祥した中東の「肥沃な三日月地帯」で

貯蔵された穀物を狙うネズミを獲ることから

人間社会とのかかわるようになり

そのヤマネコからネコ（イエネコ）が進化してきた

本書はこうした内容を詳しく説明しながら

以下の4章から構成されている

動物や植物そして昆虫たちの「系統樹マンガラ」をはじめ

図や写真も多数掲載されどの話も興味深い

第1章 身近な動物たちの起原

第2章 植物とそれに依存する生き物たちの起原

第3章 昆虫たちの起原

第4章 進化生物学に関する話題

さて本書でとっている研究のスタンスは

「進化論」ではなく「進化学」でなくてはならない

というものだという

単に「進化」の証拠を羅列して理解するのではなく

「証拠を統合する「議論」や「解釈」」を重要視し

細部とともに全体を

そして全体とともに細部を見るというように

「多面的な見方」が必須だとされているが

重要な観点だと思われる

昨今ではなんでもゲノム解析で

それがすべての根拠であるかのような論が多いが

それで生き物のすべてが理解できるというわけではない

広く深い想像力こそがおそらくは必要とされる

イヌにせよネコにせよウマにせよ

それらのヒトとの「共生」進化にあたっては

（現代の「科学」ではまったく問題にされないだろうが）

「魂」における「類」としてのヒトとの結びつきが

生まれていることも重要だと思われる

その意味でヒトの「魂」と

動物や植物そして昆虫たちの「魂」が

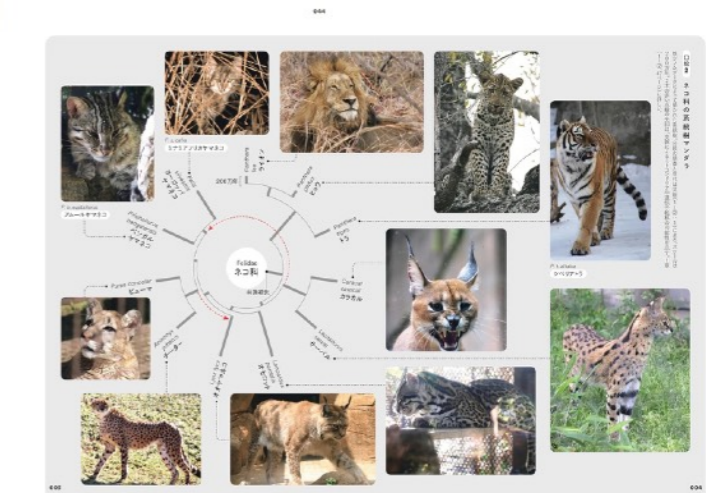
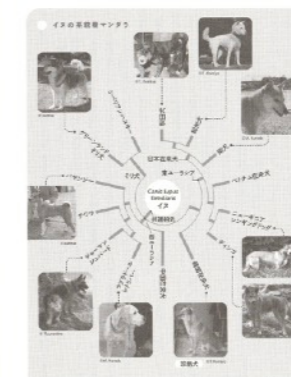
どう関係しあっているのかについて

神秘的な探求が可能であれば

「進化」についてより深い理解も可能になる



■長谷川政美『進化生物学者、身近な生きものの起原をたどる』（ベレ出版 2023/10）



■長谷川政美『進化生物学者、身近な生きものの起源をたどる』（ベレ出版 2023/10）

（「1 身近な動物たちの起原」～「①イヌ————進化はヒトとともに」より）

「イヌは「イエイヌ」ともいうが、正式にはハイイロオオカミ（*Canis lupus*）の「亜種」として、「*Canis lupus familiaris*」という学名がついている。柴犬やゴールデンレトリバーなど「犬種」は違っても、学名は同じ「*Canis lupus familiaris*」となる。」

「イヌはハイイロオオカミの亜種なので、ヒトの近くにいたハイイロオオカミの中からイヌが進化した。イヌがヒトの進化と深く関わるようになった背景には、集団で生活するハイイロオオカミの社会性が関係していることは確かだが、ハイイロオオカミがそのままイヌになったわけではない。そこには、（…）イヌの祖先とヒトとのあいだの「共進化」があった。お互いに強い影響を与えながら、一種に進化してきたのである。」

「生き物の種のあいだの親戚関係を表す図を「系統樹」あるいは「生命の樹」と呼ぶ。中でも特に、中心点のまわりにいろいろな生き物を配置した系統樹のことを「系統樹マンダラ」と呼んでいる。」

「イヌ科には、オオカミとイヌをはじめ、タヌキやキツネも含まれる。イヌ科の「イヌ」とは、生き物の分類大系の単位の一つである。」

「ハイイロオオカミにもっとも近縁のものはコヨーテで、次に近縁なのがエジプトのアフリカゴールデンウルフである。」

「ハイイロオオカミはユーラシア大陸全域から北アメリカまで広く分布する。」

「たぶん東アジアにいたハイイロオオカミの集団からイヌ系統が生まれ、この集団あるいは近縁な集団が日本に渡ってニホンオオカミになったのだらう。東アジアの大陸にいた祖先集団はその後絶滅したと考えられる。」

「イヌの起原はヨーロッパや中東ではなく、東アジアだったようである。イヌではないかと思われる化石は、およそ2万7000年前のものがチェコで、およる3万6000年前のものがベルギーで見つかっているが、初期のものは形態だけからイヌであると判定するのは難しい。はっきりとイヌであると判定でいきる化石は、東ユーラシアのロシア・アルタイ地方で見つかったおよそ3万3000年前のもので、ミトコンドリアDNAの古代DNA解析によって確かにイヌであるとされたものである。このこともイヌの起原が東アジアであるという説と符号する。

ヒトが農耕を始めたのは、最終氷期が終わった1万2000年前以降とされているが、イヌの家畜化が起こったのは、農耕が始まる以前の狩猟採集の時代だったのだ。現在のイヌの品種の多くは、デンプンを分解するアミラーゼという酵素の遺伝子数がハイイロオオカミに比べて多くなっているが、これは農耕が始まって、ヒトの出す残飯を処理するようになってからの適応進化の結果だと思われる。」

「イヌは3つの大きなグループに分かれる。1つは「東ユーラシア」と名付けられたグループで、日本の柴犬、秋田犬、紀州犬がこれに含まれる。ニューギニアのシンギングドッグ、オーストラリアのディンゴなどもこのグループである。2つめは「西ユーラシア」と名付けられているが、アフリカのバセンジー、メキシコのチワワ、中国の在来犬なども含まれる。3つ目が、グリーンランドそり犬やシベリアンハスキーなどの「そり犬」グループである。」

「犬とハイイロオオカミとは同種と見なされるほど遺伝的に近いので、集団として分かれた後にも交雑は続いたであろう。最終氷期が終わる1万2000年前頃までには、東ユーラシアと西ユーラシアのグループは分かれていたと考えられるが、現在の東ユーラシアグループの犬のゲノムの中にニホンオオカミの祖先由来のものが残っている。」

（「1 身近な動物たちの起原」～「②ネコ————ヒトにとって何なのだろうか？」より）

「ネコとヒトの結びつきは、ヒトが農耕を初めて穀物を貯蔵するようになってからだと思われる。貯蔵された穀物を狙うネズミがヒトの周辺に集まり、それを狙うヤマネコが集まるようになったのが始まりであろう。そのように人間社会とのかかわりをもつようになったヤマネコから家畜のネコ（イエネコともいう）が進化した。」

「最初にネコがヒトと生活を共にするようになったのは、農耕発祥の地であった中東の「肥沃な三日月地帯」と呼ばれる地域だったと考えられる。その頃、ネコがヒトの社会に対してもっとも貢献したのがネズミを獲ることだった。ネコがネズミを獲ってくれていなければ、もっと多くの人々が飢えに苦しんでことであろう。さらに、ヒトが農耕を始め、集落をつくり、密集して生活するようになってから起こった新穀が問題が感染症であった。そのなかでも、ネズミが媒介するペストはもっとも恐ろしい感染症の一つであった。ネコがネズミを獲ってくれたおかげで、多少なりともそのような感染症が抑えられていたのかもしれない。」

「ネコはヨーロッパヤマネコの一亜種であるリビアヤマネコが家畜化されたものである（…）。ネコ科全体は、ライオン、ヒョウ、トラなどの「大型猫科グループ」と、そのほかの「小型ネコ科グループ」とに大別される。「大型」にはこのほかにジャガー、ユキヒョウ、ウンピョウなどが含まれる。この「大型」「小型」という区別は便宜的なもので、からだの大きさは実際にはあまり系統を反映していない。小型のなかにはチーターやピューマなど比較的大型のものも含まれている。また、大型のなかでも最大のライオンとトラがいちばん近縁でなく、それらに比べると小さなヒョウが、ライオンともっとも近い親戚になっている。」

ネコはリビアヤマネコが家畜化されたものであることがわかる。リビアヤマネコが分布しない地域のネコも、遺伝的にリビアヤマネコに近縁だということは、その地域に分布しているヤマネコのほかの亜種が家畜化されたものではなく、家畜化されたあとでヒトの手で持ち込まれたものだということを意味する。
　亜種のあいだでは交配が可能だが、ネコのゲノムにリビアヤマネコ以外の亜種が寄与している痕跡はあまり認められない。」

「現在、ネコ科動物で家畜化されているのはリビアヤマネコ由来のネコだけである。」

（「2 植物とそれに依存する生き物たち」～「②菌類の驚くべき役割————酸素欠乏事件」より）

「菌類は、細胞核をもたない原生生物の細菌と区別するために、「真菌類」と呼ばれることもあり。菌類は、植物のような光合成を行わない「従属栄養生物」であり、栄養をほかの生物に依存する。その際、動物のようにほかの生き物を食べるのではなく、消化酵素を体外に分泌して有機物を分解し、得られた養分を吸収する。」

「現在の菌類の中で最大のグループが「子囊菌門」と「担子菌門」である。子囊菌門には酵母やコウジカビなどのほか、図1にあるオサムシタケなど、昆虫に寄生する冬虫夏草がある。また、藻類が菌類と共生してできる地衣類は、たいてい子囊菌を宿主とするものである。もう一方の担子菌の中から、おおよそ3億年前（図1の円で示した時代）に、リグニンを分解できるものが現れたのである。」

（「4 進化する進化生物学」～「⑤生き物たちの進化を捉える————多面的なものの見方のススメ」より）

「生き物たちの進化を捉えるには多面的な見方が必要である。進化の研究は「進化論」ではなく「進化学」でなくてはならない、という考え方がある。

確かに証拠こそ科学の基礎であり、これにもとづかない思弁的な議論は無益だが、証拠の羅列だけでは進化を理解したことにはならない。証拠を統合する「議論」や「解釈」が重要である。」

「「木を見て森を見ず」という言葉があるが、部分である「木」だけしか見ないのは困るが、全体である「森」だけを見て細部にこだわらないのも困るのだ。「神は細部に宿る」という言葉が示すように、細部に本質的なものが隠されていることがある。一つのをいろいろな面から見るという多面的なものの見方が大事だということであろう。本書の一巻したテーマである生物の進化を理解するためには、まさに多面的な見方が必須であろう。」

▫目次

口絵

まえがき

- 身近な動物たちの起原
 - イヌ————進化はヒトとともに
 - ネコ————ヒトにとって何なのだろうか？
 - ウマとロバ————文明に大きな影響を与えた家畜
 - クマ————ヒグマとツキノワグマの起原
 - コウモリ————自力で空を飛べる唯一の哺乳類
 - スズメ目————鳥類最大グループの多様性

- 植物とそれに依存する生き物たち
 - 巨木の起原————コケが陸上に上がってから
 - 菌類の驚くべき役割————酸素欠乏事件
 - タマムシ————木を食べる美しい虫
 - 小さな生き物————物質循環の立役者

- 大繁栄する昆虫たち
 - 昆虫の起原————大繁栄する節足動物
 - 昆虫と植物のあゆみ————もちつもたれつの関係
 - 無慈悲なハチと慈悲深いハチ————利他行動の進化
 - チョウとガ————植物との共進化

- 進化する進化生物学
 - 退化と中立進化————分子レベルで見える世界
 - 性選択はメスの好みで決まるのか————抵抗と受容の歴史
 - 音楽の起源を探る————進化学的アプローチ
 - 海を越えた動物の移住————海流と生き物の分布
 - 生き物たちの進化を捉える————多面的なものの見方のススメ
 - 思い出に残る生き物たち————出会いと別れ

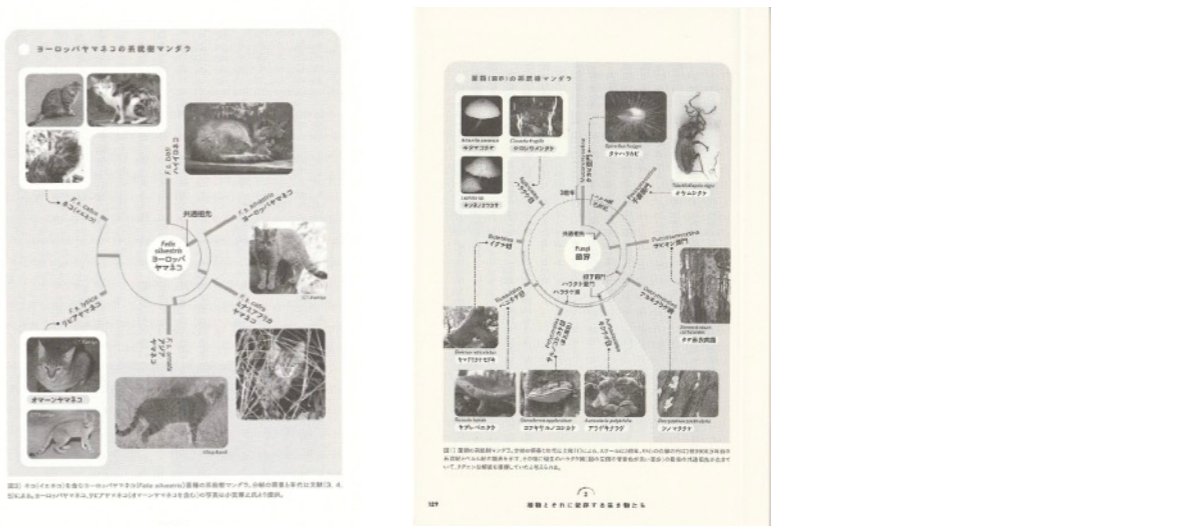
あとがき

引用・参考文献

索引

○長谷川 政美(はせがわ まさみ)

1944年、新潟県生まれ。統計数理研究所名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授。理学博士(東京大学)。専門は統計遺伝学、分子進化学。著書に『DNAに刻まれたヒトの歴史』(岩波書店)、『系統樹をさかのぼって見えてくる進化の歴史』(ベレ出版)、『進化38億年の偶然と必然』(国書刊行会)、『ウイルスとは何か』(中公新書)など。



朝日出版社ウェブマガジン「あさひてらす」で
連載されている伊藤亜紗「一番身近な物体」
第三回は「日常に潜むスイッチ」

(第1回・第2回については
mediopos3229 (2023.9.20) でとりあげている)

「一番身近な物体」というのは「自分の体」で
「自分でありながら自分でないような自分」である
自分の体は「他人」だから自分として感じられない

今回紹介されているのは
くり茶さんのケース

拒食と過食という両極端を往復しながら
現在は回復しているものの
摂食障害になる前の状態に戻ったわけではない

過去と完全に無関係になることはできず
「回復」といっても
「単に再発していない状態の継続」で
ふとしたきっかけで過去に引き戻されそうにもなるという

中井英夫によれば
「意識は開放系」であって
「私は私の意識を閉じることができず、
日常生活のなかのさまざまな索引によって、
スイッチを押されてしまう」

「外界のちょっとした刺激によって過去へと連れ戻され、
感じ方がまるっきり変わってしまう」かもしれない

世界は「私の歴史」を反映した索引で満ちている」から
「スイッチが入らないようにする対策を
日常的に取」らざるをない

くり茶さんの言葉のように
「考えないほうがいいんだけど、
考えておかないと予防ができない」

物
体
な
一
番
身
近

伊
藤
亜
紗

第三回 日常に潜むスイッチ

2023.11.07

■伊藤亜紗「一番身近な物体」/第三回 日常に潜むスイッチ
(朝日出版社ウェブマガジン「あさひてらす」2023.11.07)

伊藤亜紗は記事の最後をこう結んでいる

「私たちの体は、いともたやすく特定のモードに飲みこまれ、
「すでに未来が決まっている未来」に
向かっていってしまうような存在です。」
「そこらいかにかに逃れ、自由であり続けるか。
それが回復ということなのかもしれません。」

そのためには
「こうだと思った自己像の外側で、
「そうあってもいい」と思える意外な自分と遭遇する」
ということが重要となるようだ

じぶんは○○である
○○でなければならない
○○でなければ取り返しのつかないことになる
そんな自己像から自由になり
○○でなくてもいい自分を未来へひらいてゆくこと

それは世界をどうとらえるかにもかかわっている
世界は○○でなければならない
そんな世界像から離れ
○○でなくてもいい世界へ

しかしじぶんにも世界にも
そうした自由から過去へと
引き戻してしまう「スイッチ」があふれている
そして刷り込まれてしまっている未来を避けようと
強迫的なまでに「予防」をしようとする
そんな悪循環に陥ることになる

「すでに未来が決まっている未来」ではなく
自由にひらかれている未来を生きられますように

■伊藤亜紗「一番身近な物体／第三回 日常に潜むスイッチ」（朝日出版社ウェブマガジン「あさひてらす」2023.11.07）

「原因は過去に向かうけれど、回復は未来に開かれている。（…）原因を特定するとは、「自分が今こうであるのは〇〇だからだ」という、自己にまつわるストーリーを描く作業です。これに対して回復は、こうだと思った自己像の外側で、「そうあってもいい」と思える意外な自分と遭遇することによって成立します。

しかしながら、現実には事態はもっと複雑です。回復するとは、過去と完全に無関係になることではないからです。回復した人も、さまざまな形で逃げ出したい過去にとりつかれ、呑み込まれそうになり、すんでのところで回避する、といった経験をしています。この意味で、回復とは単に再発していない状態の継続と言うことができるかもしれませんが。

第三回でとりあげるのは、くり茶さんのケースです。くり茶さんは中学3年生のときに過激なダイエットを経験。それ以降、拒食と過食の両端を往復しましたが、現在では回復し、食事もふつうにとることができています。回復はしていますが、しかし摂食障害になる前の状態に戻ったわけではありません。ふとしたことをきっかけに、過去に引き戻されそうになる。そんな過去との揺れ動く関係に迫ります。」

（「拒食：コントロールモード」より）

「くり茶さんは拒食と過食という両極端の症状を経験しています。重要なのは、それが単に「食べるか食べないか」という食事の量だけに関わる問題ではないということ。くり茶さんによれば、それは「0か100」という両極端の二つのモードなのだそうです。

まず拒食は「100」です。ひとことで言えば、それは「100点＝完璧」を目指すということ。くり茶さんが最初にこのモードになったのは、高校2年生のときでした。それまでの小中学校では、理不尽なルールを押し付けられているようで、くり茶さんはなかなか学校というものになじめずにいました。ところが高校は自由なところを選んだので、「急に学校が楽しく」なった。「髪も染めていいものすごく自由な学校だったんですけど、そしたら急に勉強しなくなったんです（笑）。「勉強楽しい!!」「学校楽しい!!」みたいな感じでした。先生も友達も合う人ばかりでした」。

私にとって驚きだったのは、「学校が楽しい」からこそ「食べられなくなった」という、くり茶さんが語った因果関係でした。」

「そのときの状況を、くり茶さんはこう語っています。

勉強も毎回テストで100点取りたい、みたいな「0か100か思考」になっちゃって、授業も完璧に聞きたいから一番前の席に座っていました。食事についても、太ったのをどうにかしたい、決まったものを朝・昼・晩に食べたいと思うようになりました。

つまりくり茶さんは、高校での生活が好ましいものであったからこそ、その完璧な状態をキープしたいと考えて、拒食になってしまったのです。勉強もちゃんとやりたい。食事も完璧にしたい。食事は量だけでなく質にもこだわって、添加物をとらないようにしたい。こうして完璧な状態を維持するためのコントロールが、「100」ということでした。」

「「この新しい自分を変えたくない」という気持ちがあった、とくり茶さんは言います。

ただし、現状に対するこうした肯定的な評価は、満ち足りているという意味での満足とは違う感情によってドライブされていました。なぜなら、くり茶さんにとって、現状の「完璧」はそれがくずれる「不安」と常に隣り合わせだったからです。」

「不安とは、未来に対して思いを馳せることからくる感情です。未来は本質的に不確定です。このままいくと、よくないことが起こるかもしれない。「完璧」を破壊するような「予想外のこと」が起こるかもしれない。（…）未来に対する恐れ、そしてだからこそ現在を律する、という心性。（…）不安とは、過剰に未来を先取りしている状況に他なりません。

こうしてくり茶さんは、「起こらないようにする」ための膨大なメンテナンスの作業に、脅迫的に追われていきます。」

「私たちは体のなかを直接見ることができません。だからこそ、そこは簡単にイメージが入り込む場所、妄想が増殖しやすい場所になり得ます。食べた瞬間にそこに含まれていた養分が吸収され、体のかたちが変化する、ということは物理的にはありえません。けれども、未来を過剰に先取りしている人にとっては、「太る」という未来がただちにやってくる、ということになる。まだやってきていない、つまりは存在しない「太った体」を、すでに現在に生きてしまっている。その中を見ることができないからこそ、体の中では予感が現実のものになってしまうのです。体は本質的に不安を醸成する場所です。くり茶さんも「実際の体内がどうなっているかというよりは、体内に対して自分が安心できるか」が問題だった、と言います。

こうして現実の体とイメージの体の乖離が生じ、「気づいたら30キロ台になっていた」とくり茶さんは言います。」

「一度は入院して治そうとしますが、合わないと感じ、くり茶さんは自宅で治療することを決めます。その後は家族の協力もあり、徐々に食べられるように。しかし食べているうちに、こんどは過食スイッチが入ってしまいます。それは家中のものすべてを食べてしまう、制御のきかない「0」のモードでした。」

（「過食：なまけものモード」より）

「過食モードは、「ゆっくりしたナマケモノみたいな感じ」とくり茶さんは言います。「いろいろなことに構わなくなります。0でいいやって。どうでもいい」。不確定な未来の到来を恐れてすべてをコントロールしようとしていた拒食モードとは対照的に、すべて手放し、コントロールなしの状態になるのです。

「コントロールなし」と言うとりラックスしてのびのびしているように聞こえますが、実際にはそれは、体がブレーキを失ったというのに近い状態でした。「止められない」「運動会みたいに食べていた」とくり茶さんは言います。」

「回復のための食事は、ある程度体重が増えてからも止まることはありませんでした。「食べられるところまで食べる」は文字通り、物理的に胃をパンパンにする作業だったとくり茶さんは言います。（..）食事のことを「食べる」ではなく「入れる」という即物的な動詞で表現するのは摂食障害の方にしばしば見られる言い方ですが、ここではまるで収納の問題を解決するための工夫として体の姿勢が語られています。それは充実感のある「満腹」ではなく、物理的な限界という意味で「自分を満杯にする」作業でした。

ただし、満杯は、それ自体が目的だったわけではありませんでした。単純に「行けるところまで行かないと止まらない」状態だったのです。「運動会みたいに食べる」というアクティブさを、動きの少ない「なまけもの」に喩えるというギャップの正体もここにあります。体は「食べる」という行為をしています。同時にくり茶さんは何もしていません。過食は体の暴走であって、くり茶さんが外から介入してどうこうできる現象ではないのです。「止める」ことはできない。「止まる」まで行き切るしかない。満腹は自らブレーキをかけることですが、満杯はいわば物理的な壁に衝突して車が停止することです。過食が終わっても、そこには達成感はない、とくり茶さんは言います。「やっと終わった、という感じですね」。

過食を繰り返すうちに、やがて体重も35キロから60キロくらいまで増加していきます。と同時に過食の頻度も減っていきました。1日に2回だった過食の回数が数日おきになり、1ヶ月おきになり、1年に1回になりました。最初はその期間を意識していましたが、徐々にそれも意識しなくなっていきます。」

「症状の緩和には、二十歳くらいのときにつきあってきた恋人の存在も大きかった、とくり茶さんは言います。」

「その恋人に好かれることによって安心感が生まれた、とくり茶さんは語ります。未来を過剰に先取りしていたくり茶さんが、よくないことが起こるかもしれない、という恐怖を抱かずに済むようになった。「一緒に食べても悪いことは起きない、一緒にいることが楽しい、という感覚がありましたね」。「いま食べること」の意味を「未来の出来事」との関係で語る視点が、くり茶さんならではのものです。でも、安心感が生まれているくり茶さんは、その二つを切り離してとらえることができるようになっていきます。

ただし、そのような変化が起きたのは、恋人が特別に摂食障害に理解があったから、というわけではなかったようです。むしろ「結構鈍感な人」だった。「その人はそんなに細やかな話をしなかったので、その適度に気にされていない状態が楽だったのかもしれないですね」。腫れ物にさわるような関係ではなく、むしろある程度雑に扱われたことによって、くり茶さんもふと、「自分はこういう人間だ」と思いこんでいる人間像の外側、「そうあってもいい」という自分に出会うことができたのかもしれない。」

（「穴だらけの家」より）

「こうして、それまでNGだったコンビニの食べ物も、何も気にせず食べられるようになったくり茶さん。恋人とは別れてしまったけれど「いい癖がついていった」と語ります。食事の時間も気にしなくなり、「今は食べることにに関しては何もない」と言えるまで回復しました。

けれどもそれは、摂食障害を経験していない人と全く同じ状態になった、ということではありません。ふたたび摂食障害になる可能性は常にそこにある。その可能性をこまめに回避するような工夫を、くり茶さんは無意識のうちにしているのです。

そのことを自覚したのは、病院である薬を処方されたときでした。その薬の副作用を調べて、強い恐怖に襲われたのです。」

「くり茶さんはこのことを「スイッチ」という言葉で表現します。「日常にちょいちょいスイッチが潜んでいて、ある程度自分で予防、ここに触れたらスイッチ入るな、とか、避けられるものは避けていますね。薬もそうですけど、健康維持できる程度に避けています」。それが「スイッチ」という機械のメタファーで語られるのは、いったん拒食や過食のモードに入ってしまったら容易には止めることはできないという「自動性」があるからでしょう。通行止めにしたはずだけれど、その回路はすでに敷かれている。だから、うっかりそれが発動するという事故が起きないようにするために、くり茶さんにはそれに近づかないための工夫を日常的に行う必要があります。

「スイッチ」という言葉は、摂食障害にかぎらず、さまざまな病気や障害の当事者が用いる表現です。」

「興味深いのは、くり茶さんが、このスイッチの存在を「歴史」として語っていることです。すでに治ってはいる。でも「歴史はある」。今は安定した地盤の上に立っているけれど、その下にはかつて経験した拒食と過食の古層があります。ふとしたきっかけでスイッチが入ってしまえば、過去の自分の反応のパターンがよみがえり、それを反復してしまうことになりかねません。つまり、スイッチがあるということ自体が、過去にそのような経験をしているということの証拠なのです。」

「精神科医の中井久夫は、過去の何かを引き出す現実世界内の手がかりのことを「索引」と呼んでいます。「図書館の索引が本の表紙に私を導き、本の表紙が内容に導く」ように、索引は「一つの世界をひらく鍵」であると中井は言います。私たちが過去に経験したことは、「索引」というしるしとして、現実世界に埋め込まれています。ですが、ふとした瞬間にそれがトリガーとなって、現実とは異なる別の世界が一気に立ちあがるのです。ポイントは「指し示す」という記号性と、現在から過去へという時間性でしょう。中井のいう「索引」はブルーストのマドレーヌの記憶のようなものも含まれるので、必ずしも忌避すべきものではありませんが、具体的な対象をきっかけに、本人の意志を超えて過去に親しんだ世界につれもどされる感覚は、くり茶さんの「スイッチ」に通じる特徴を持っています。

中井は、「私には、私の現前する意識には取りまきらないものが非常に多くある」と言います。「私の意識する対象世界の辺縁には、さまざまの徴候が明滅していて、それは私の知らないそれぞれの世界を開くかのようなのである」。つまり「意識は開放系」であり、「海綿のように有孔性」なのであって、だからこそ私は私の意識を閉じることができず、日常生活のなかのさまざまな索引によって、スイッチを押されてしまうのです。私たちは、外界のちょっとした刺激によって過去へと連れ戻され、感じ方がまるっきり変わってしまうような、穴だらけの家のような存在です。いわば世界に対して「漏れて」いる。雨が降れば吹き込みますが、一方で美しい月の光も差し込むともいえます。

世界そのものは私とは無関係に存在していますが、そこは「私の歴史」を反映した索引で満ちている。だからくり茶さんは、スイッチが入らないようにする対策を日常的に取っています。「100」のコントロールモードになってしまいうようなこと、具体的には「体重を知ること」や、「太る副作用のある薬を飲むこと」を避けたり、家で過ごすときに家事を最低限にしがんばりすぎないようにしたりしているのです。ただし、スイッチの予防にはある矛盾があります。なぜならそれは、体重のことを考えないようにするために、考えておくことだからです。「考えないほうがいいんだけど、考えておかないと予防ができない（笑）。予防すること自体がちょっと考え方が偏っているのかなとは思いますがね」。

「「運命」というと大袈裟かもしれませんが、私たちの体は、いともたやすく特定のモードに飲みこまれ、「すでに未来が決まっている未来」に向かっていってしまうような存在です。それは私たちの体の切なさです。そこからいかに逃れ、自由であり続けるか。それが回復ということなのかもしれません。」

いまや「教養」は
「役に立つ」「ためになる」ためのスキルや
コミュニケーションづくりの手段となり果てている

牧野智和の随筆

「「教養としての」とは何なのか」（「群像」）によれば
「教養としての〇〇」というタイトルの本は
二〇二〇年代にはいつてからが最も多く出ていて
その多くは「なんでもあり」的であり
四分の三くらいは本文中に「教養」という言葉さえ
まったく出てこないのだそうだ
また「教養」とは何かということにふれるものにして
多くはビジネス関連のそれである

ほんらい「教養」という言葉には

「人格を耕し、養っていくという原義」があるのだが
それとは無縁のものとなってきている

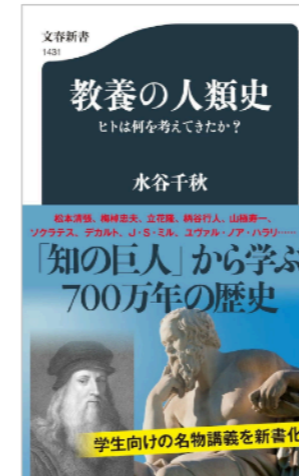
上記のような傾向へのアンチテーゼとしてだろうが
「役に立つ」「ためになる」ための「教養」ではなく
ほんらいの意味での「教養」を身につける必要性を
啓蒙しようとするものも少なからずある

ちょうどここ数ヶ月のうちに刊行されたばかりの

田坂広志『教養を磨く』では
宇宙論までを含む「読書と知識を通じて、
「人間としての生き方」を学び、実践する」ことが説かれ
水谷千秋『教養の人類史』では
実社会で生きていくために必要な「教養」よりも
人生をより心豊かに充実したものにするために
「知の巨人たち」から学ぼうというように
どちらも深い知恵を学び育てることを求めている

しかし「教養」のほんらいはそれとして

mediopos3285 (2023.11.15) の
丸山俊一『連載 ハザマの思考3 情報と教養のハザマで』も
少しばかりふれたように
あくまでも個人的にいえばだが
そもそも「教養」という言葉は好きになれないでいる
たとえそれが「原義」に近いものであったとしても
それらが教えられるようなものであるとすれば
そうしたあり方にはどこか違和感を覚える



- 牧野智和「「教養としての」とは何なのか」（群像 2023年12月号）
- 田坂広志『教養を磨く／宇宙論、歴史観から、話術、人間力まで』（光文社新書 2023/7）
- 水谷千秋『教養の人類史 ヒトは何を考えたか?』（文春新書 2023/10）

田坂広志の説く「教養」は
総合的なビジョンにあふれていて重要だが
たとえばジャック・アタリが
『田坂広志 人類の未来を語る』を
推薦していることからわかるように
その描く人類の未来ビジョンは
特定の未来へと人類を導こうとするある種の意図に満ちている

ちなみにジャック・アタリは
人類の人口削減を提唱しさえしている論客でもある
それは人類の未来を開こうとするものであるとともに
人類を統一政府のもと
一元的管理のもとに置こうとすることが
その思想的背景としてあるようだ

また水谷千秋の描く「教養」は
「知の巨人」から学ぼうとするものであるように
その「知の巨人」という表現そのものに
ある種の「権威」への依存があるのではないかと
いうまでもなくさまざまな知恵から学ぶことは必要だが
「権威」への依存は学校的知性と通じている

人類が生み出してきた「知の全体像」を
俯瞰しようとはしているのだが
重要なのはその知恵そのものであり
「知の巨人」がどうかという発想では逆行してしまう

昨今「人類学」が静かなブームともなっているように
学ぶことは「知の巨人」からだけではない
「権威」という発想から自由になり
何からでもどこからでも学ぶことが必要なのではないかと

そうした意味において「教養」という言葉は
一方では「役に立つ」「ためになる」ものへと堕ち
一方では権威的な「知」への盲信へとつながってしまう

その意味でいえば
いまもっとも重要なのは
あえて意図的に「愚者」ともなり
「役に立つ」「ためになる」ものからも
権威的な「知」からものはなれることではないだろうか

両者を否定するのではなく
それらにとらわれずにいること
たとえそれが多く一般の「承認」とは反対に
「愚か」なことだと見なされたとしても

■牧野智和「『教養としての』とは何なのか」
(群像 2023年12月号)

■田坂広志『教養を磨く／宇宙論、歴史観から、話術、人間力まで』
(光文社新書 2023/7)

■水谷千秋『教養の人類史 ヒトは何を考えてきたか?』
(文春新書 2023/10)

(牧野智和「教養としての』とは何なのか」より)

「最近書店に行くと『教養としての○○』というようなタイトルの本をしばしば見かける。調べてみると実際はかなりあるようで、二〇〇〇年以降のものだけをみても二五〇点近く（それ以前のは七〇点ほどしかない）、そういうタイトルの本が出ている。もう少し詳しく見ると、二〇二〇年代に入ってからが最も盛んで毎年三〇点以上刊行されており、刊行点数が最も多かったのは去年（調べた限りでは三九点）であるようだ。今年も、九月末の時点で三〇点を超している。

この「○○」には一体何が入るのだろう。「教養としての」というくらいだから、と身構えると肩透かしをくらうことになる。歴史、文学、クラシックといった堅いものももちろんあるが、ワイン、ウイスキー、コーヒー、ラーメン、アニメ・マンガ、お笑い、ロック、ラップ、占い、デニム、スーツ、腕時計などなど、実に多種多様なものが「○○」のなかに入れて、さまざまな本が刊行されている。およそ学べることはすべて「教養」になっているかのようだ。

このような「教養」の節操のない広がりは何のようにして起こったのだろうか。「教養としての○○」本の年間刊行点数がはじめて一〇点を超えたのは二〇一四年だが、このあたりに特段話題を呼んだベストセラーがあるようにはみえなかった。一見「教養」と無関係なことから「教養として」仕立て上げた本の画期は、二〇〇〇年の石原千秋『教養としての大学受験国語』（ちくま新書）、翌二〇〇一年の大塚英志とササキバラ・ゴウによる『教養としての〈まんが・アニメ〉』（講談社現代新書）あたりになるのではないかと思われる。

ところで、今日の「なんでもあり」のような広がりの中で、一体「教養」とは何を意味しているのだろうか。そこで東京都立図書館に出かけて、二〇二〇年以降に刊行された本に絞り、見られる限りのものに目を通してみた。すると、驚くべきことにほとんどの本、目を通した本のうち四分の三くらいは本文中に「教養」という言葉がまったく登場しない。入門書や解説書、教科書や論文集のタイトルとしてただ「教養としての」という言葉が掲げられているだけ、というケースが圧倒的に多いのだ。海外の書籍で、もとはまったく違うタイトルなのに「教養としての」という邦題が与えられるケースもいくつかあった。つまりは、二匹目（三匹目、四匹目かもしれないが）のドジョウを狙おうとする出版業界のトレンドの帰結として「教養」は際限なく拡大している、というのが大きな傾向としてはまずあるようだ。

ただ、近年の「教養」本のなかで、「教養」とは何かということに触れるものもいくつかあった。まとまった傾向が指摘できそうなのは「お酒」である（…）これからの時代、グローバルに活躍しようとするとき、会食などの場面で自国のそうした酒文化について説明することができれば、自らの「教養」を示すことができ、会話もふくらみ、ひいてはビジネスチャンスにつながっていく、だからお酒についてよく学ぼう、というような「教養」の説明である。「ビジネス」に紐づけて「教養」を語ろうとするものは他にもいくつかみられた。（…）「教養」は無際限に角田市してはいるものの、今日において「教養」の中身を説明しているのはほぼこのあたりに集中しているので（限られた資料からの話だが）今日における「教養」イメージはこうしたビジネスに関連するところに一つの力点があるのかもしれない。

色々な人が散々論じてきたことだが、「教養（cultivation）」という言葉には人格を耕し、養っていくという原義があり、竹内洋が『教養主義の没落』（二〇〇三、中公新書）で描いたとおり、人文科学的な素養を通した人格形成が学生にとっての規範文化となったときもあった。だがその「没落」から時が経って、今や「教養」はビジネス上の話題づくりや、「本質」をつかみだすために役立つフレームワークの一種として専ら語られるようになっている。先に触れた石原や大塚らの本では、「教養」に含まれるものとは一見考えられていないことから「教養としての」という表現を与えることについて、自らが立っている社会的文脈を踏まえたくうえで「あえて」押し出すという手つきがはっきりとみられた。しかし今日の「教養」本ではこうしたこうした手つきがすっぱりと抜け落ち、即物的な有用性に「教養」が直結されているように見える。自分自身を思い返しても、たとえばドストエフスキーやら島崎藤村やらを読んでいるときに、それが「役に立つ」「ためになる」かどうかなんてことはおよそ考えもしなかった。だが時代は巻き戻りようもなく、今や「教養」というのはそのようなものののだ。だが、これは「教養」という言葉のみに留まることだろうか。とにかくコミュニケーションをつなげよう、目に見えて役に立つスキルを身につけようといった欲望は、「教養」という言葉だけでなく、もっと別の言葉の意味も塗り替えているように思えてならない。」

(田坂広志『教養を磨く／宇宙論、歴史観から、話術、人間力まで』より)

「現代の「教養」の「三つの変化」「三つの深化」とは何か。

これまでの「教養論」は、しばしば、「歴史学を学べ」「宗教学を学べ」「政治学を学べ」「経済学を学べ」「心理学を学べ」「人間学を学べ」といった形で、幅広いジャンルでの読書を勧め、様々な専門知識を学ぶことを勧めてきた。しかし、真の「教養」とは、本来、多くの本を読み、様々な知識を学ぶことではなく、そうした読書と知識を通じて、「人間としての生き方」を学び、実践することである。だが、残念ながら、現代の「教養論」においては、しばしば、そうした「生き方」という大切な視点が、見失われてしまっている。」

「群像」2023年7月号に掲載されていた中村文則の小説『列』が単行本化されその刊行を記念して11月号でインタビュー・書評等が掲載されている

ある動物の研究者である「私」はいつのまにか「列」に並んでいる

なぜ並んでいるのかわからない
いつから並んでいるのかもわからない
何のために並んでいるのかもわからない
列の先も最後尾も見えない真っ直ぐな列・・・
列に並んでいる人たちは
互いを疑いときに軽蔑したり羨んだりしている

「あらゆるところに、ただ列が溢れているだけだ。
何かの競争や比較から離れば、
今度はゆとりや心の平安の、
競争や比較が始まることになる。
私達はそうやって、互いを常に苦しめ続ける」という

あるとき列に並んでいる人たち全員が
ひとりひとり違う「整理券」を持っているとされ
「私」の整理券には「列に並ぶこと」と書いてあり
その意味がわからず混乱したりもする

カフカやベケットを想像させる不条理の物語である
中村文則がこれまで描いていたような
ドストエフスキー的な善と悪・罪と罰といった
対立概念がダイナミックにせめぎ合う
「弁証法的なドラマの展開」があるわけではない

印象に残るのは
地面に書かれた「楽しくあれ」という文字
誰が書いたのかわからず
踏まれて消えてしまっても
思い出され永遠に繰り返される文字



- 【『列』刊行記念】
 - ・インタビュー「不寛容な時代の欲望」中村文則、聞き手＝中条省平
 - ・書評「その列はいつのまにか何の列なのか」蜂飼耳
(群像 2023年11月号)
- 中村文則『列』（講談社 2023/10）

『列』の刊行を記念して行われた
中条省平とのインタビュー記事のなかで
その「楽しくあれ」は
大江健三郎がイエーツの詩を引用した
「Rejoice! (喜びを抱け!)」や
原始仏教の原典に出て来る言葉
ニーチェの『喜ばしき知識』につながることも示唆されている

わからないまま「列」に
ただならび続けるというのは
まさに「不条理」そのものでもある

「そのしがらみから、人間は逃れられない。
そして個人は、日常や人生において直面する
列から逃れられない。」(蜂飼耳)

しかしこの物語は
「楽しくあれ」という文字が現れることによって
「列というある種の閉塞状況を書きながら、
最終的に何か肯定的なものが響く結末へと向かってい」る
(中条省平)

「列」は
どこから生まれて来たのかどこへと向かっているのか
何のために生きているのかわからないでいるように
私たちのだれもが置かれている状況にほかならない

しかしそのなかで
「楽しくあれ」ということは
そして「楽しくあれ」と求められているということは
どうしたことなのかを問うことで
不条理と思われていたことは
いつのまにか別の様相を
垣間見せてくれるようになるのではないだろうか

■【『列』刊行記念】

・インタビュー「不寛容な時代の欲望」中村文則、聞き手=中条省平

・書評「その列はいったい何の列なのか」蜂飼耳（群像 2023年11月号）

■中村文則『列』（講談社 2023/10）

（中村文則『列』～「第一部」～「灰色の鳥」より）

「その列は長く、いつまでも動かなかった。

先が見えず、最後尾も見えなかった。何かに対し律儀さでも見せるように、奇妙なほど真っ直ぐだった。」

「近くの地面には、誰の仕業かわからないが、「楽しくあれ」と書かれていた。」

（中村文則『列』～「第三部」～「整理券」より）

「「後方からの噂ですが、どうやら私達は全員、整理券を持っているらしい」

「は？」

「私達のポケットに、入っているらしいですよ。後方の誰かが見つけて、他の人間も持ってたって。券はそれぞれ違うらしいです。つまり」

手相の男の視線が、言いながら揺れた。

「私達が、何のために並んでるかわかる。それは書かれてる」

「知りたくない」

私は反射的にそう言っていた。鼓動が微かに速くなっていく。

「ええ、私もです」

「嫌だ。自分を知ることになる」

後方から、様々な声が聞こえる。」

「チャック付きの右ポケットに、それはあった。他にはない。私には一枚しかない。見るまでもなかった。私の願いは論文だ。それだけの人生だった。

視界が狭くなる中、整理券を見る。「列に並ぶこと」とあった。

「ということは」

手相の男が、私の整理券を覗いて言う。私は困惑する。意味がわからない。

「あなたの目的は、並ぶことなんだ」

「は？」

「何かの願いより、もう並ぶことが目的になっているんですよ。……最悪だ。もう中毒に等しい」

「違う」

「でもそう書いてある。つまりあなたは、本当は」

手相の男の声に同情が滲む。私の望んでいない同情が。

「他人と自分を比べてずっと文句を言い、ずっと苦しんでいたんだ」

（中村文則『列』～「第三部」～「修理屋」より）

「眩暈が酷くなる。これまで、経験したことがないほどに。視界が揺れる。意識が途切れたような感覚があった。私は目を開く。

その列は長く、いつまでも動かなかった。

先が見えず、最後尾も見えなかった。何かに対し律儀さでも見せるように、奇妙なほど真っ直ぐだった。

近くの地面には、「楽しくあれ」と書かれている。」

（インタビュー「不寛容な時代の欲望」中村文則、聞き手=中条省平」より）

「中条／今までの中村さんの小説には比較されるプロトタイプとしてドストエフスキーがありました。ドストエフスキーの小説は善と悪、罪と罰といった対立概念がダイナミックにせめぎ合うことを特質としています。それに対して『列』は、対立概念があって弁証法的なドラマの発展があるのではなく、むしろ何も起こらない迷宮というか閉塞した状況の中で、人間はどう行動するのが書かれている。作中にも出てくる言葉で言うと、この作品は「列」ではなく「円」ではないか。そうすると、どこまでも終わらない工程ということになり、やはり『城』を思い出すのです・

これまでの作品で書かれてきたドストエフスキーと直結するドラマトゥルギーを離れて、カフカの迷宮的な閉塞感を描くという中村文学の大きな転換が、今回はあったように僕は思います。」

「中村／後で気づいたことですが、作中に出てくる「楽しくあれ」という言葉は、僕の中での大江さんの「Rejoice!（喜びを抱け!）」だったのかもしれないです。大江さんがイギーツの詩を引用した「Rejoice!」には僕も大きな影響を受けましたし「楽しくあれ」というのは普通の言葉ですが、原始仏教の原典に出て来る言葉でもある。結局、人生はどこで行き着くというか。だから、大江さんには『列』を読んでいたできたかったんですね。書いている間にお亡くなりになったので、かないませんでした。

中条／「「楽しくあれ!」についてのお考えはすばらしいですね。ニーチェの『喜ばしき知識』と訳されている文集は簡単な言葉で言うと「楽しい各問」になる。フランス語だとgai（陽気な、楽しい）と訳していますが、なぜニーチェが楽しい、陽気な学問を提唱したかというと、西欧的な学問の伝統はつまらない冷たい楽しくない学問だったからです。「楽しくあれ」は大江さんの「Rejoice!」にもつながるし原始仏教にもつながるし、ニーチェ的な反キリスト教的な伝統にもつながると思います。」

「中条／『列』は列というある種の閉塞状況を書きながら、最終的に何か肯定的なものが響く結末へと向かっています。列という個人の意思ではどうにもならない状況を書きつつ、ある種の肯定性がいくつかの場面に埋め込まれているところは、この小説の感動的なところ です。

その一つは先ほども話題に出た「楽しくあれ」という地面に書かれた文字。列に並ぶ人たちが踏んで消えてしまっても、思い出したりすることで、永遠に繰り返される形になっています。」

（群像 2023年11月号）

（中村文則『列』～「第一部」～「灰色の鳥」より）

「中村／『王国』のラストではユリカさんが木崎を経て価値観が逆転して、同じ行為が逆の意味を持ち始めます。捨てられることは自由になることであり、「毒じゃないから」の言葉も反転してプラスの意味に変わる。

『列』でいえば、「楽しくあれ」は最初は皮肉として出てきます。みんなが列の中で争っているとき、足元に「楽しくあれ」と。でも印象が変わっていく。ここには『王国』のラストとの響き合いが絶対にあったと思います。列に並ぶというきついシチュエーションでも、しかし希望はあるという風に。」

（蜂飼耳「その列はいったい何の列なのか」より）

「不条理、といった単語はあまりにも完結に見えて、使うことにかえってためらいも生じる。しかし、魅力があるという意味で、『列』にはカフカ的でベケット的な不条理の企てがあると書こう。作品の世界において、確かに時間は進み、展開がもたらされ、人物も動いているが、人物を取り巻く状況についての肝心の目的が空洞化されていたり、中心軸への言及が敢えて外されつづけたりする、あの感覚がある。何なのか、明かすことなく引き延ばしつづけること事態に、作品の重要な要素が仕組まれているのだ。とはいえ、『列』は、不条理を底に据える方法に安住した上で抽象的なレベルでまもとめられた作品ではない。」

「『でも、と私は思っていた。楽しく、あれと。そのような中でも、楽しくあれと。なぜそう言いたかったのだろう』。この「私」の自問は、そのまま読者へと向けられる問いだ。

生物がこれまで辿ってきた歴史という列。そのしがらみから、人間は逃れられない。そして個人は、日常や人生において直面する列から逃れられない。この小説には、前提としてそうした観点が存在する。だからこそ「楽しくあれ」なのだ。なぜなら、楽しくあることは、列の虚しさや厳しさに対する、ささやかな抵抗となるからだ。二〇世紀に注目され、人間を強く捉えた不条理の観点をめぐって、作者が示した県警の一つは、現時点ではこの「楽しくあれ」だろう。不条理の底なし沼を、単に覗き込みつづける態度に終始するのではなく、そこに脱出の可能性や救いに類する通路を用意しようとするこの結末には、いま、小説の在り方をどう探求するかという視点がある。この小説が見出した列のイメージは、文字を超えて、容赦なく人間を炙り出す。」

四方田犬彦は子供のころから
台所にいるのが好きだったそうだ

そして教職を退いている現在

「一日のなかでもっとも長く身を置いているのは、
執筆のための書斎を別にすればおそらく台所である。
台所こそがわが領土、わが王国なのだ」という

本書は十年ほど前の

『ひと皿の記憶』に続く料理論集であり

タイトルは料理において重要な

「塩と胡椒」を意味する『サレ・エ・ペペ』

序文では著者の「塩」への依存と

そこからの自由について両義的に語られている

「塩分をまったく使用しない料理を作っていたときに
つくづく感じたのは、自分のそれまでの食生活が
いかに塩に依存していたかという事実だった」

「塩も胡椒も用いない料理を作る。それはわれわれの食を
無意識的に統括してきたイデオロギーから、
自分を解き放つ契機となるのではないだろうか」

というのだが本書では

人はなぜ「本物の料理」を求めるのか

なぜ知らない料理を食べたいと思うのか

といったことが問われ

「食べる」ということは

生理的な意味での食物摂取であるというだけではなく
歴史的に形成されてきたものあり

「日本料理」と称されるものなどをはじめ

それらのさまざまな料理という現象なかにおいて

「見えない政治」が働いていることが示唆されている

塩と胡椒への依存とそこからの解放のように

「料理」への依存とそこからの解放ということ

解放といってもその否定ではなく

それへの依存のなかでそれそのものを問うということである

ここで重要なのは

「本物の料理」といった「料理の真正性」について
「気が付かないうちにその観念の虜となっている」
といった「食」を特権化してしまうようなことへの
批判的な論点であり

それと同時に四方田氏自身が

「食において著しく「本物」志向の人間」であり

「食」に深いこだわりをもっているがゆえに

その場所から「食」を問おうとしているという点だろう

「食」にこだわるがゆえに

そのこだわりそのものを問う意味があるともいえる

ある意味でそうしたスタンスは

「生」に深くこだわっているがゆえに

その煩惱となりかねない有り様を

自問自答していくようでもある

「煩惱即菩提」をめざしてはいないようだが（笑）

それだからこそ四方田氏らしい

多方面への飽くなきアプローチも可能となっている

安易に「菩提」になろうとするよりは

「煩惱」そのもののなかにもありながら

その「煩惱」を問い続けることのほうが

ずっと面白い生き方ともなり得るということだ



■四方田犬彦『サレ・エ・ペペ 塩と胡椒』（工作舎 2023/10）

■四方田犬彦『サレ・エ・ペペ　塩と胡椒』（工作舎 2023/10）

（「サレ・エ・ペペ」より）

「「サレ・エ・ペペ」とはイタリア語で塩と胡椒。英語でいうならば、ソルト&ペッパーである。」

「「I」～「日本料理」の虚偽と神話」より）

「日本料理の根底にあるのは視覚的美しさであり、細々とした調理の気遣いである。昆布と鰹節のダシを中心にして、全体的に脂肪を排除した味覚の大系である。食器と料理の組み合わせの妙であり、調理者の演劇的な身振りである。日本料理こそは料理文化の粋の極地であり、世界三大料理のひとつと呼ばれるのにふさわしいものである。

私は以上のようなことは一行も書こうとは思わない。ただこうしたステレオタイプの言説については、それが日本国内のみならず、国際的にも神話として蔓延していることの虚偽と愚かしさを指摘するに留めておきたいと思う。日本料理というものは、外国人のために考案された抽象的な料理であり、観光主義と外食ブームがお囃子方になっているにすぎない。現実に日本人が食べてきたのは地方の料理、あえて歴史的な表現をするならば、藩の料理である。もし日本の料理に緊急に解決すべき危機があるとすれば、それはグローバリズムと観光主義の名のもとに、泡粒のようにはかない地方料理が次々と消滅し、あるいは統合的な味覚のなかに呑みこまれてしまう現状である。「日本の食の国際化」という標語は、「美しい日本」という標語以上に空疎であり、虚偽であり、日本文化が本来的に携えてきた豊かな多元性を毀損し、貧しい孤立化へと導いてゆくものである。」

「歴史的にも、また地理的にも、日本料理とは外国の料理体系と食材の影響のもとに変容を続けている文化にほかならない。この事実を無視してWashokuなるものを国際的観光ブームの供物に仕立て上げることは、日本の食文化のもつ多様性の抑圧である。農林水産省の説く日本料理の四つの特徴とは、実のところ、虚偽に満ちた日本料理の観念的抽象化であり、現実の日本人の食生活と齟齬をきたすばかりか、そもそも音楽や数学と異なり、純粋さ、唯一さといった観念とは無塩である人間の食体験に背馳するものである。それが現代社会における日本食の、もっともグロテスクな神話化であることは言を俟たない。」

「「I」～「料理の真正性とは何か」より）

「料理における「本物」を論じるさいにまず念頭に置くべきなのは、地上でさまざまな人間の手で現実に調理されている料理には、それ自体として「本物」も「偽物」もないという事実である。」

「「本物」の食べ物とは実在するものではない。どこまでも社会的に構築され、言説の内部にあってのみ成立する現象である。一方に「本物」を生産している農家や漁師、食肉処理者がいて、もう一方に「本物」を賞味する（と思い込んでいる）人たちがいる。彼らは自分たちが「本物」と関わっていることで、それがかなわずにいる他の者たちに対する卓越性を自己確認している。「本物」を生産し「本物」を消費している自分たちこそ、「本物」だという世界観を所持している。とはいうものの、なぜ「本物」だけが他の物との差異化によって、かくも高く価値づけられているのか。この差異化のシステムが、単に食物をめぐる言説の次元を超え、現代社会の構造そのものに深く横たわっているという事実を、われわれは改めて考えてみなければならない。」

「わたしは食において著しく「本物」志向の人間なのだ。過去に知っていた正統的な味覚が蔑るにされてしまい、正しく再現されていない、継承されていないと知ると、深く落胆してしまう不幸な人間なのだ。わたしが十年ほど前に世に問うた『ひと皿の記憶』（ちくま文庫）は、まさにこの喪失された食べ物の記憶をめぐる執筆された書物である。」

「誰もが料理の真正さなる観念が虚構のものとは知りながらも、気が付かないうちにその観念の虜となっている。だが個人的な出自や幼少時の食体験を無視するかのように、事態は残酷にも進行していく。大衆消費社会は真正さを口実に食産業を大きく方向づけていく。ある食べ物を偽物として排除し、別の食べ物を本物として喧伝して、それを大々的に神話化していくのだ。このような表現が許されるかどうかはわからないが、メディアの言語のなかで、食物はその本質において搾取されてゆく。わたしは料理雑誌やレストランガイドがそうした言説を過剰に蔓延させ、料理の真正さがつとに神話化されていく現状に、人知れず禍々しいものを感じている。

とはいうものの、こうした真正なる食べ物を探し求めんとする情熱に囚われる一方で、わたしがまた現実に調理されている料理の多様性、というより非規範性、地域的複数性に圧倒され、単一の正統的な食べ物が地理的に拡散し、時間的に変化していくことを通して、けっしてひとつに統合されない豊かさを体現していることに歓びを感じているのも事実なのである。」

「食材と料理の真正性をめぐる議論のなかで、わたしはつねに両義的な場所に立たされている。この観念が虚構のもの、操作され演出された神話であると認識しながらも、それに魅惑され、失望と諦念を繰り返している自分に気付いているからである。あらゆる観念の所持がそうであるように、幸福感に包まれることは稀有なことである。おそらくわたしの立つ場所の曖昧さは。わたしの人生の立つ場所の曖昧さに、それなりに見合っているのだる。わたしは、そしてわれわれは、真正さと正当さに憧れながらも、それ自体は本質的に真正でも正当でもない生のさなかにいるのであるから。」

「「I」～「知らないものを食べる」より）

「人はどうして未知の食べ物を食べてみたいと思うのだろうか。

二通りの人々がいる。知らない国の知らない料理に積極的に関心を示す人と、たとえ異国に行こうともその国の料理に手を付けようとなしない人々である。」

「世界に住む実に多くの人々は、自分には見慣れない食物に警戒を示し、それを口にすることに躊躇の姿勢を見せる。自分を育み育ててきた食物に拘り、それが口にできないとすると強いノスタルジアに陥る。」

「だがこうした多くの人々の対極に、見知らぬ食物を試みることに取り憑かれている人々がいることも事実である。」

「日本において「エスニック料理」なるものが話題となり、メディアがそれをファッションとして取り上げるようになったのは一九八〇年代である。（…）

もっともわたしはこの表現に当初から疑問を抱いていた。エスニックethnicとは英語で「人種的な」「種族的な」「民俗的な」という形容詞である。その当時、アメリカのグルメガイドブックでは、それは「非白人」を意味していた。白人が世界の文化の中心であり、徴なしの存在（ノン・マルケ）であるのに対し、それ以外の人間は「エスニック」という徴を刻印された（マルケ）存在であると見なされていた。「エスニック料理」と同じように、「エスニック・ミュージック」という表現もあった。

いったい自分が何様のつもりなのかというのが、その当時、この表現を聞いてわたしが抱いた印象であった。フランス料理があり、中国料理があるように「エスニック料理」なるものがあるとでもいうのだろうか。日本人は自分だけは「エスニック」ではないと信じているものだろうか。もしそうだとすれば、それはアメリカの白人の目線を借り受けたというだけのことではないか。（…）フランス人が「和食」を典型的なアジアの「エスニック料理」だと見なしていることを、日本人は忘れてはならない。」

「日本において「エスニック料理」を論じる者の多くは、それを調理する者、それを消費する者の存在について語るとうしない。ただ調理された料理だけを切り離して語ろうとする。彼らは一般に知られていない「本物」の食べ物を知っているという素振りを見せ、自分たちが文化消費の前衛に位置していると信じている。とはいうものの、食の流行というものがどこまでも社会の階層秩序のもとに形成されたものであり、歴史的なものであるという認識に到達することができない。あるいはそれを理解しながらも回避している。その姿は、かつて高級フランス料理のレストラン評を執筆していた美食ライターたちの、世代交代後の零落した姿を連想させる。」

「「I」～「国民料理とは何か」より）

「料理と国家との関係は、これからどのように変化していくことになるだろうか・

ただちに日本料理や韓国料理、フランス料理といった一国の料理体系の未来像を思い描くことはできない。ただ明かなのは、一般時がさしたる自覚もないままに日常的に享受している国民食なるものが、この一世紀を見ただけでも、急速に、しかも実に簡単に変化してきたという事実である。これは歴史的に見て、誰にも否定できない事実だろう。」

「国民食において注目すべきなのは、それがいとも軽々と国境を越え、近隣諸国に対抗文化として紹介されるや、ただちに彼の地の食景のなかに地位を占めてしまうことである。」

「国民食に細々とした規範はない。それは場所に応じて自在に単純化されたり、現地の伝統的な味覚体系に重なり合いながら発展してゆく。それは国民料理が強いられている真正さという観念から自由であり、身ひとつで平然と海を渡って行くのだ。ともすれば日本料理のアイデンティティを国民料理という枠組みのなかで思考しがちなわれわれは、日本の食景にあって現実的に中心にあり、いまや世界において遍在へと向かおうとしている国民食を新たなる判断の基軸にすることを求められている。」

「「II」～「台所にいることの悦び」より）

「教職を退いてから短くない歳月が経過した。七十歳の現在、わたしが一日のなかでもっとも長く身を置いているのは、執筆のための書斎を別にすればおそらく台所である。台所こそがわが領土、わが王国なのだ。

朝食を完結にすますと後片付けを兼ねて、その日一日の調理のための準備に入る。冷蔵庫を点検し、賞味期限切れの食材や解凍途上の食材の状況調べる。何日もかけて仕込んである食物の進行状況を確認する。昼食と夕食のため、時間のかかりそうなものの下拵えに入る。（…）」

「こんな風を一日を記述してみると、それでは一体いつ仕事をしているのかと尋ねる人が出てくるだろう。ご心配なく。ちゃんと昼食と夕食の間には執筆をしている。」

【目次】

I 「日本料理」の虚偽と神話

料理の真正性とは何か

料理の復元

知らないものを食べる

ツバメの巣と盆菜料理

国民料理とは何か

肉食について

野草を食べる

四方田犬彦が執筆で忙しいときに作る、ものすごく簡単な料理一覧

II

偶景

ぶっかけ飯

缶詰の思い出

韓国の食べ物への信頼

三人の女性

台所にいることの悦び

だれも頭をかたくしたいとは思っていないし
じぶんの頭がかたいとは思っていないだろうが

じぶんの頭がかたいかもしれないと
気づくことからしかなにもはじまらない

細谷功の『やわらかい頭の作り方』は副題に
「身の回りの見えない構造を解明する」とあるように
気づいていないことに気づき
なぜ気づいていないのかを明らかにするための
さまざまなテーマがわかりやすく論じられている

しかしなんにつけ
いちばん問題となるのは
「気づく」ということである

ここで引用紹介しているのは
「第1章「心の癖」を自覚する」から
「(4) 気づいた時点で解決している」からだが

「問題だということにすら気づいていない」人が
どうやったらそれに気づけるかということほど
むずかしいことはない

アリストテレスは哲学の始まりは「驚き」であるといい
西田幾多郎は「哲学の動機」は
「深い人生の悲哀でなければならない」といったが
「驚き」や「悲哀」といった契機がなければ
「気づき」は生まれ難いということだろう
釈迦が「苦」からの「解脱」を説いたのも
「苦」がその「気づき」となるとしたのだと思われる

なにを気づきとするかは人それぞれだろうが
なににせよ「気づき」が起こるためには
それを可能にするだけの契機が必要となる

その契機となり得るだろう
重要なもののひとつに
『老子道德経』に書かれてあるような世界観がある
個人的にも中学生の頃それをはじめて読んだとき
世界が一気に広がりはじめたことを今でもよく覚えている

そのはじめにはこうある

「道の道とすべきは、常の道に非ず。
名の名とすべきは、常の名に非ず。」

それは一見矛盾のようだが
そうした表現でしか可能でないもののなかにこそ
真実があると切実なまでに感じられた

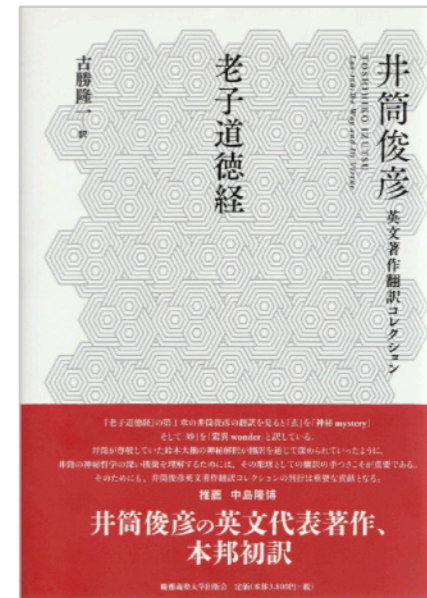
数年前「井筒俊彦英文著作翻訳コレクション」に
井筒俊彦による『老子道德経』の英訳からの翻訳がでて
あらためてそれがじぶんの世界観の
原点となっているだろうことを再確認したりもした

「気づき」を得るための重要な視点となるだろう
第十二章と第十四章から少し

「五つの色は、人の目を見えなくさせる。
五つの音は、人の耳を聞こえなくさせる。
五つの味は、人の味覚を鈍くさせる。」

「それを見ようとしても、見えない。」
「それは、「かたちなきもの」と呼ばれる。
「それを聞こうとしても、聞こえない。」
「それは、「かすかなもの」と呼ばれる。」
「それをつかまえようとしても、触れられない。」
「それは、「微妙なもの」と呼ばれる。」

問題だということにすら気づけないのは
見たものを見ていると思っているから
聞いたものを聞いていると思っているから
味わったものを味わっていると思っているから
ふれたものをふれたと思っているから
さらにいえば
考えたことを考えたと思っているからである



- 文 細谷功・絵 ヨシタケシンスケ
『やわらかい頭の作り方ー身の回りの見えない構造を解明する』
(ちくま文庫 2023/11)
- 井筒俊彦 (古勝隆一訳) 『老子道德経』
(井筒俊彦英文著作翻訳コレクション 慶應義塾大学出版会 2017/4)

「気づき」のためには
見ていないかもしれない
聞いていないかもしれない
味わえていないかもしれない
ふれていないかもしれない
考えていないかもしれない
そのように「身の回りの見えない構造」へと
じぶんをひらいていく必要がある

そのときいちばんの障壁となるのは
強固なプライドだろう
じぶんがわかっていないはずはないという壁である

そのプライドを守ろうとして
権威や「ご専門」「象牙の塔」の内に閉じて
疑わことさえしない人もあるだろうが
それはまさに積極的な自己正当化の手段を使ってまで
「問題だということにすら気づ」きたくない人の
象徴だともいえるかもしれない

■文 細谷功・絵 ヨシタケシンスケ

『やわらかい頭の作り方―身の回りの見えない構造を解明する』
(ちくま文庫 2023/11)

■井筒俊彦 (古勝隆一訳) 『老子道徳経』

(井筒俊彦英文著作翻訳コレクション 慶應義塾大学出版会 2017/4)

(『やわらかい頭の作り方』～「第1章「心の癖」を自覚する／(4) 気づいた時点で解決している」より)

「先日イギリスで、自転車ナビを使って目的地まで最短距離を行こうとした人が、「ナビの指示通り」高速道路に混雑時に「進入」してしまい、問題になりました。この件に関する報道では最後に、「ナビを使う際には「常識」を働かせましょう」という働きかけがされていますが、恐らくこと言葉の効果はほとんどないでしょう。

なぜなら、「非常識」な行動をする人のほとんどは、それが「非常識」であることに気づいていないからです。だから普段から「常識」を持って行動している人は、この言葉を聞かなくても常に常識を働かせているし、普段から「常識」を働かせていない人は、この言葉を聞いてもそれが自分のことだとゆめゆめ思っていないのです。したがって、「常識を働かせましょう」と言われて、「しまった、明日から常識を働かせて行動しよう」と思う人はほとんどいないことになります。

同様に職場でよく聞く言葉に、「頭を使って仕事をしろ」とか「少しは自分で考えろ」といったものがありますが、「頭を使え」と言われただけで「頭を使う」ようになる人もほとんどいないでしょう。そう言われている人は、自分が「頭を使っていない」とは思っていないからです。」

「私たちの身の回りの問題や課題に対して、以下の三通りの人が存在するということです。

- ①本当にできている人
- ②できていないと気づいている人
- ③できていないことにすら気づいていない人

これは、全ての領域で①の人がいるとか、全ての領域で③の人がいるという意味ではなくて、私たち個人個人でも各々個別の問題によって、自分が①に入る場合もあれば、③に入ってしまった場合もあるということです。

これを別の切り口から見て、身の回りの事象を問題になっているかどうかで分類すると大きく三つに分けられることになります。

- ①「本当に問題がない」解決済の問題
- ②「問題だと気づいているが解決していない」未解決の問題
- ③「問題だということにすら気づいていない」未発見の問題

「圧倒的に根が深く難易度が高いのは問題の発見の方です。「問題は見つかってしまえば解決したようなものだ」という言葉がありますが、そこにも表れています。」

「私たちは知らず知らずのうちに、一番外側の③の領域が存在し、しかもそれがとんでもなく大きいということを忘れてしまっているのです。

自分のいままでの考え方では理解できないものを見た時や、失敗した時などには、必ず自らが気づいてすらいらない未発見の問題が隠されている可能性があります。そんな場合に③の領域を意識しておくことで、そこに何らかの気づきのきっかけが得られるでしょう。」

(『やわらかい頭の作り方』～「おわりに」より)

「「頭をやわらかくする」のに最も重要かつ難しいことはなんですか？」

それは「まる頭の柔軟性がない(失われつつある)自分を認識することだと思います。何事もそうですが、問題というのは認識した時点でほとんど解決したも同然なのです。よく言われる話ですが、「コミュニケーション力を上げるための本」を本当にコミュニケーションが下手な人は読まないし、「ダメ上司のための本」を「本当のダメ上司」は決して読まないのです。逆に言えば何事も「気づいていない」というのが最も重大な問題ということになります。」

(井筒俊彦『老子道徳経』～「第十二章」より)

「五つの色は、人の目を見えなくさせる。
五つの音は、人の耳を聞こえなくさせる。
五つの味は、人の味覚を鈍くさせる。
速さを競う競争や狩猟は、人の心を狂わせる。
手に入れ難いような物品は、人の正しい行いを邪魔する。」

そういうわけで、聖人は自分の腹に心を集中し、目には気を配らない。
それゆえ、かの人はあちらを手放し、こちらを選ぶのだ。」



(井筒俊彦『老子道徳経』～「第十二章」より)

「五つの色は、人の目を見えなくさせる。
五つの音は、人の耳を聞こえなくさせる。
五つの味は、人の味覚を鈍くさせる。
速さを競う競争や狩猟は、人の心を狂わせる。
手に入れ難いような物品は、人の正しい行いを邪魔する。」

そういうわけで、聖人は自分の腹に心を集中し、目には気を配らない。
それゆえ、かの人はあちらを手放し、こちらを選ぶのだ。」

(井筒俊彦『老子道徳経』～「第十四章」より)

「それを見ようとしても、見えない。この点において、それは、「かたちなきもの」と呼ばれる。それを聞こうとしても、聞こえない。この点において、それは、「かすかなもの」と呼ばれる。それをつかまえようとしても、触れられない。この点において、それは、「微妙なもの」と呼ばれる。これら三つの面からいって、それはとうていはかり知れないものである。その三つの側面が混じり合って〈一〉となる。

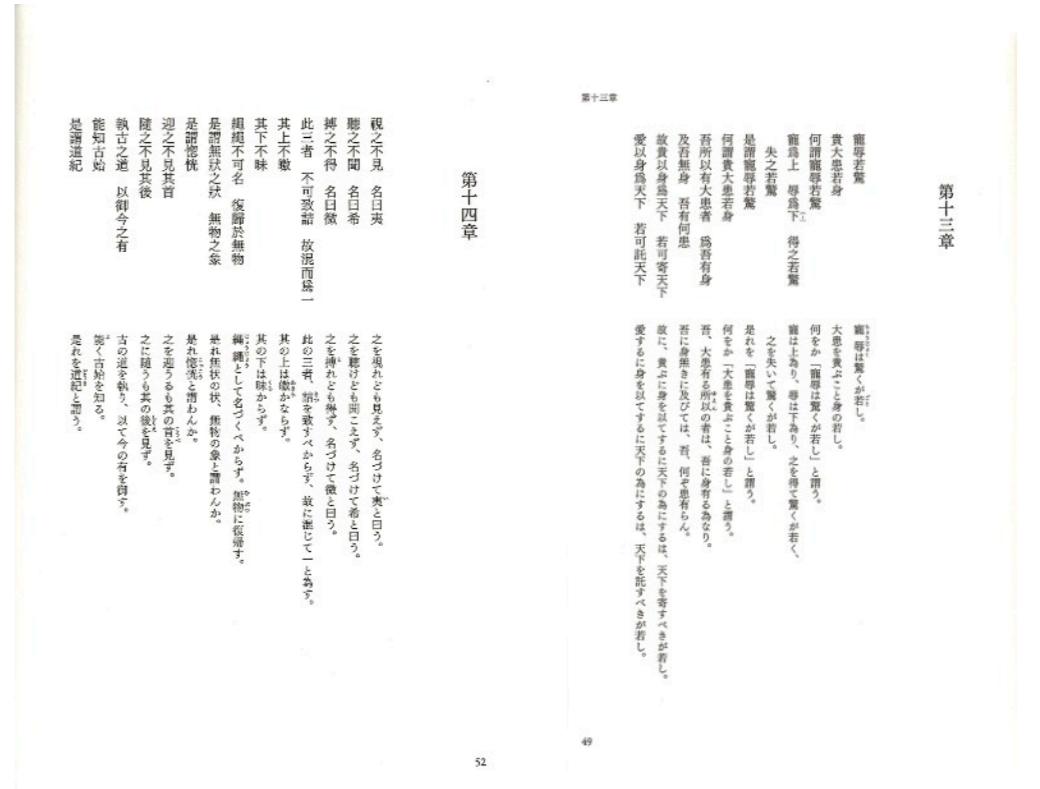
上の方では、それは明るくない。
下の方では、それは暗くない。

それは、より縄のようにいつまでも途切れなく、いかなる名前を与えられようがない。究極的に、それは〈無〉の原初の状態へもどってゆくのだ。

かたちなき〈かたち〉、像なき〈像〉、とでも言えようか。
ぼんやりとして確かめられない〈何か〉、とでも言えようか。

その前に立っても、頭は見えない。
その後に付き従っても、背面は見えない。

ものごとの永遠なる道の手綱をしっかりと握り、それは今のものごとを治めてゆくのだ。かく、それはあらゆるものの原初の始まりを知っている。これが〈道〉の大綱と呼ばれるものなのだ。」



スポーツウォッシングとは
「為政者に都合の悪い政治や社会の歪みを
スポーツを利用して覆い隠す行為」である

つまり悪事の洗濯（ウォッシング）

スポーツの政治利用は
最近になってはじまったことではない
1936年のベルリンオリンピックが先駆で
それが注目されるようになったのが
東京オリンピック2020で
オリンピックだけではなく
さまざまなスポーツ大会において
「洗濯」が行われてきていることが注視されはじめている

なぜスポーツイベントが利用されやすいのか

スポーツイベントの開催は基本的に

- ①主催者／運営関係者
 - ②競技者／参加団体
 - ③メディア
 - ④消費者
- で構成されているが

それぞれとそれらの関係性において
「典型的で窮屈で旧態依然としたスポーツの捉え方」が
「洗濯行為」を可能にしている

まず問われなければならないのは
「スポーツとは何か」ということだが
個々人がスポーツを楽しむときには
「洗濯行為」は働く余地はない

スポーツの好き嫌いやそれへの関心は別として
スポーツとされる競技を通じて
競い合いながら自他を高めていくことには
それなりの意味・意義はあるだろうが

それが「社会にとって」となると
しかもそれが公共的な組織運営のかたちをとるとき
上記のような4つの構成要素が必要となり
それぞれの立場での利害がそこに関わってくる

■西村章『スポーツウォッシング／なぜ〈勇気と感動〉は利用されるのか』
(集英社新書 2023/11)

学校単位でのスポーツは
競技者個人を超えた学校同士の競い合いとなり
地域単位でのスポーツは
地域同士の競い合いともなり
国単位でのスポーツは
国同士の競い合いともなり
それらはともすれば
「よく落ちる〈洗剤〉として〈政治〉」的に
利用される価値が高まる
特にオリンピックはその「温床」である

本書のなかでもっとも興味深いのは
柔道家でもある山口香の
「スポーツをとりまく古い考えを変えるべきときがきてい
る」
という話である

表向きはスポーツには政治を持ち込まないのが原則だろう
が
スポーツイベントにおける現実とはまったく逆で
政治的な課題につながる人権問題なども
アスリートの姿勢として問われたりもすることも多い

たとえば差別の問題にしても
「差別は政治じゃなくて人権の問題」だが
「差別を人権問題なんだとスポーツ選手が訴えて、
その差別をなくすために何か法律や制度を変えようとなっ
たら、
そこはもう政治」になってしまうことになる

おそらくさまざまな問題において
スポーツ＝政治となると
そこでスポーツが「よく落ちる〈洗剤〉」として
利用されやすくなるのである

国威発揚のために国がお金をだして
金メダルをたくさん獲得させようともするのが実際だが
そうすると「国のために戦う」というように
国家とスポーツが切り離せなくなってしまう



「スポーツウォッシング」から自由になるためには
スポーツほんらいの目的（があるとなれば）に立ち返り
「国家同士の争い」のようなものから離れ
選手たちも観戦するひとたちも成熟することが求められる

「選手の側も国威発揚の戦略に乗らないように、
勝ったら素直に喜ぶ、負けても潔く相手を称える。
ウォッシングの道具に利用されないように、
スポーツの世界をつくっていくしかない」

「スポーツウォッシングを仕掛けようとしたんだけど、
アスリートや観戦している人たちのほうが
ずっと成熟しているから、全然乗ってこないじゃないか」
という状態になっていくのが理想」だという

現状はその理想とはほど遠く
メディアは「勇気と感動」といった常套句を垂れ流し
観客もその「物語」をこそ享受しようとするがゆえに
それを根拠としてスポンサーも行われ
それを都合よく使った「ウォッシング」が行われる

とくに東京オリンピック2020以降
スポーツに限らずさまざまな事件なども含め
あまりにも露骨なまでの「ウォッシング」が起こっているが
そのことへの気づきを契機として
「成熟」へと向かえばいいのだが・・・

■西村章『スポーツウォッシング／なぜ<勇氣と感動>は利用されるのか』（集英社新書 2023/11）

（「はじめに」より）

「スポーツウォッシングという行為は一般に、「為政者などに都合の悪い社会の歪みや矛盾を、スポーツを使うことで人々の気をそらせて覆い隠す行為」と理解されています。これは稚拙な陰謀論や為にする批判のための批判などではなく、自分自身がスポーツの現場で長年取材してきた経験と照らし合わせてみても、実際に世界のあちこちで発生していることです。

では、スポーツウォッシングというものはどういうメカニズムで作用し、誰が誰に対してどのように働きかけ、これによっていったい誰にどんな弊害が生じるのか。また、スポーツの世界に関わる当事者たちは、この問題をどう捉え、どうすればどの程度どんなふうには正していくことができると考えているのか。考え始めれば次々と湧いてくるさまざまな疑問を、スポーツ界に関わりが深く、スポーツと社会に関する深い知見を持つ人々に訊ね、また、自らの取材経験などをもとにして考察を進めてゆきました。

取材を進めてゆくに当たがい、現代社会とスポーツが接するところに生じるさまざまな問題点が、少しずつはつきりよした像を結んできました。

スポーツに政治を持ち込んだてはならない、と人々が言うときの〈政治〉とは、何を指しているのか。国家的プロパガンダや偏狭なナショナリズムの圧力から距離をおき、自由と可能性の象徴であるはずのスポーツが、平等な人権を求める声を政治的発言と見なして抑圧するようになっていったのはなぜなのか。行動するアスリートたちは、どうして何も発言しようとしないのか。彼女彼女らをそうさせている、すなわち「ひたすらスポーツに集中する」ことを求めているのはいったい誰なのか。

そこには、誰の目にもわかりやすい絶対的な巨悪が隠れているわけではありません。大きな問題から人々の気をそらし洗い流そうとする〈社会的洗濯行為（ウォッシング）〉のツールとして、爽快で愉快で痛快なスポーツが利用されるのは、スポーツに対する我々の理解が、洗濯行為をしようとする人々にとって都合のよいものになっているからです。つまり、スポーツイベントを開催する運営組織やそこで競技をするアスリートたち、それを報道するメディア、そして競技会場や家庭でスポーツを観戦する我々の、典型的で窮屈で旧態依然としたスポーツの捉え方こそがこのような洗濯行為を可能にしている、というわけです。

なぜ、そんなことになってしまうのか。では、どうすればいいのか。」

（「第一部 スポーツウォッシングとは何か／第一章 身近に潜むスポーツウォッシング」より）

「人々の興奮と共感と感動を集める大規模スポーツ大会がソフトパワーをテコにして、開催地に都合の環売り事実をヴェールの下へ覆い隠してしまおうとする行為には、おしなべてスポーツウォッシングという指摘があてはまるだろう。これに利用されるスポーツ大会は、ゴルフや競馬からモータースポーツ、サッカー、そしてオリンピックまでじつに多岐にわたる。また、スポーツウォッシングを使って自らに都合の悪い事実を洗い流そうとする国家や政権は、独裁国家や権威主義的体制に限ったことではない。」

「批判の対象とされるスポーツウォッシング行為は、近年になっていきなり発生したわけではない。当然ながら、行為そのものは用語がこの世に登場するはるか以前から存在していた。」

（「第一部 スポーツウォッシングとは何か／第二章 スポーツウォッシングの歴史」より）

「スポーツの政治利用は、なにも近年になって始まったことではない。ことスポーツウォッシングに関する限り、その先駆とされるのが1936年のベルリンオリンピックであることは、広く指摘されている。」

「一般的には、日本のアスリートたちがスポーツ以外の「世界の様相」に対して発言し、コミットしていくことを歓迎しない風潮は今も根強い。新聞のスポーツ面やスポーツコーナーは、試合やレースの「感動」と「興奮」にのみ特化して。世の中で起きている出来事をそこから遮断し、まるで無菌室か密閉空間のようにスポーツを扱う姿勢は昨日も今日も変わらない。そしてそれは、たぶん明日も続いている。

しかし、健全な批判精神や嫉骨心をないがしろにして、あまりにも無垢でナイーブなスポーツの偶像化にのみ集中する態度は、スポーツを使って人々の心や気持ちを〈洗濯〉しようとする行為に対して、あまりに無力だ。それどころか、むしろそのウォッシング行為を利することすらなくなってしま場合もあるだろう。

では、このスポーツウォッシングという行為は、いったいどのような機序で人々に作用をこたらしてゆくのか。」

（「第一部 スポーツウォッシングとは何か／第三章 主催者・競技者・メディア・ファン 四者の作用によるスポーツウォッシングのメカニズム」より）

「スポーツイベントを構成する要素は、以下のように大きく区分できるだろう。

- 主催者／運営関係者（…）
- 競技者／参加団体（…）
- メディア（…）
- 消費者（…）」

「このウォッシング行為の主体をとりまく各構成要素の①～④も、それぞれに影響を与え合う利害関係がある。「①主催者／運営関係者」と「②競技者／参加団体」は、参加登録と出場権の付与という関係。「②競技者／参加団体」と「③メディア」は、取材行為と、それによって発生する物語の提供。「③メディア」と「④消費者」は、情報の提供と購読・視聴による経済活動の支持。「④消費者」と「①主催者／運営関係者」は、競技大会（娯楽）の提供とその認知による競技人気の下支えと正当性承認、等々。」

「スポーツが持つ筋書きのないドラマ性や、人々の心を震わせる感動的場面の下に潜む作為が露骨に見えるのなら、ファンであることをやるのは簡単だ。しかし、それらの〈洗濯行為〉を見抜くのが難しいからこそ、あるいは、洗濯行為であることをなんとなく感じながらもスポーツの魅力にどうしても引き寄せられてしまうからこそ、現代のスポーツウォッシングは厄介なのだ。しかも、そんな厄介さを感じさせない顔をして、スポーツウォッシングは我々の近くにさりげなく存在している。

だからこそスポーツイベントと社会、競技者、スポーツファンの〈健康的〉な関係はどうあるべきか、ということが問われている。」

（「第二部 スポーツウォッシングについて考える／第四章 「社会にとってスポーツとは何か?」を問い直す必要がある——平尾剛氏に訊く」より）

「「アスリートは、自分が社会に対して影響力を持っていることを自覚しているはずではない。だって、子供たちに夢を与えると人々に感動を与えとか言っているわけですから。自分の存在や発言は社会に対して何かしらの影響力がある、yとわかっているにもかかわらず、その社会に向けた発言だけが、なぜかいつも空洞のようにポンと抜けている。それにずっと違和感があります。

いちよんに言葉が軽く、『感動を与える』『勇気をもらう』という常套句や定型表現に乗っかってしまうことがすごく多くて、取材するメディアの側もその定型句でくっってしまう。スポーツって本当はもっと豊かなものなのに、そこが切り捨てられてしまって、うまく伝わっていかない。

だから、スポーツに対する薄っぺらなイメージが作られて、誰も踏み込んだことを言わないし批判もしないし、『なんだかんだいっても皆が感動するしね』と政治利用されるんです。

要するに『汚れがよく落ちる洗剤だな』っていうことですよ（笑）」

「「スポーツとは何だろう、社会にとってスポーツとはどういう存在なんだろう、ということを我々は問い直さなければなりません。そうしなければ、スポーツはいつまでも、よく落ちる〈洗剤〉として〈政治〉に利用されっぱなしです。

でも、そこにスポーツウォッシングという補助線を引くことができれば、アスリートや競技関係者たちが都合よく利用されていると気づけるだろうし、その認識ができれば防衛策を練ることもできる。『社会の中でスポーツの役割って何だろう。スポーツの価値を高めていくために、自分たちは何をしていけばいいのだろう』という議論にも進んでいくことができるという気がします」

（「第二部 スポーツウォッシングについて考える／第五章 「国家によるスポーツの目的外使用」その最たるオリンピックのあり方を考える時期——二宮清純氏に訊く」より）

「「現在、私は中国5県の広島、山口、島根、鳥取で活動するさまざまな競技のクラブを支えるプラットフォーム〈スポーツ・コラボレーション5〉のプロジェクトマネージャーをしているのですが、企業に支援をお願いすると、『広告費に見合う費用対効果はありますか』と必ず聞かれます。

それぞれのクラブは、老若男女が〈する〉（見る）〈支える〉（支える）という役割を分担し、入れ替わりながら、地域のコミュニティの核になることを目指している。この活動を通じて皆が健康になって親子の会話が弾むかもしれないし、地域の活性化を通じて観光資源になるかもしれない。だから、『費用対効果はやってみなければわからないけれども、一緒に子供を育てるような考え方で、そのために皆が少しずつマンパワーやお金などを出し合うパートナーになっていただけるのであれば非常にありがたい』という説明をするようにしています。スポーツは元々、公共財という側面が大きいので、そこに出資する企業にとっても元が取れるか取れないかという費用対効果以上に、これからはその公共財をとともに育てるという発想や役割が重要になってくるのではないかと思います。」

（「第二部 スポーツウォッシングについて考える／第六章 サッカーワールドカップ・カタル大会とスポーツウォッシング」より）

「活字メディアの動向を見渡してみると、「政治的」な問題に注目が集まったサッカーワールドカップ・カタル大会は、日本でもスポーツウォッシングについて多少なりとも議論を広げる効果があったようだ。

しかし、放送メディア、特に地上波テレビ放送は総じてこの問題を取り扱わない。腫れ物に触るどころか、むしろ「君子危うきに近寄らず」とでもいうような沈黙が続いている。

なぜテレビはスポーツウォッシングの問題から目をそらし、距離をおき続けるのか。」

（「第二部 スポーツウォッシングについて考える／第五章 「国家によるスポーツの目的外使用」その最たるオリンピックのあり方を考える時期——二宮清純氏に訊く」より）

「「現在、私は中国5県の広島、山口、島根、鳥取で活動するさまざまな競技のクラブを支えるプラットフォーム〈スポーツ・コラボレーション5〉のプロジェクトマネージャーをしているのですが、企業に支援をお願いすると、『広告費に見合う費用対効果はありますか』と必ず聞かれます。

それぞれのクラブは、老若男女が〈する〉（見る）〈支える〉（支える）という役割を分担し、入れ替わりながら、地域のコミュニティの核になることを目指している。この活動を通じて皆が健康になって親子の会話が弾むかもしれないし、地域の活性化を通じて観光資源になるかもしれない。だから、『費用対効果はやってみなければわからないけれども、一緒に子供を育てるような考え方で、そのために皆が少しずつマンパワーやお金などを出し合うパートナーになっていただけるのであれば非常にありがたい』という説明をするようにしています。スポーツは元々、公共財という側面が大きいので、そこに出資する企業にとっても元が取れるか取れないかという費用対効果以上に、これからはその公共財をとともに育てるという発想や役割が重要になってくるのではないかと思います。」

（「第二部 スポーツウォッシングについて考える／第六章 サッカーワールドカップ・カタル大会とスポーツウォッシング」より）

「活字メディアの動向を見渡してみると、「政治的」な問題に注目が集まったサッカーワールドカップ・カタル大会は、日本でもスポーツウォッシングについて多少なりとも議論を広げる効果があったようだ。

しかし、放送メディア、特に地上波テレビ放送は総じてこの問題を取り扱わない。腫れ物に触るどころか、むしろ「君子危うきに近寄らず」とでもいうような沈黙が続いている。

なぜテレビはスポーツウォッシングの問題から目をそらし、距離をおき続けるのか。」

（「第二部 スポーツウォッシングについて考える／第七章 テレビがスポーツウォッシングを絶対に報道しない理由——本間龍氏に訊く」より）

「日本のテレビ放送は徹底して無色透明なスポーツ中継に終始した。視聴者の話題が、日本代表チームの試合内容に集中するのは当然とはいえ、波風を立てず当たり障りのない中継をよしとするメディアや企業の姿勢は、スポーツを鑑賞するファン／視聴者の態度の合わせ鏡でもある。

つまり、「スポーツに政治を持ち込まない」という大義名分の傘の下で社会に無関心であり続ける姿は、日本のメディアや企業姿勢の問題であると同時に、アスリートたちや、そしてそれを支えている我々自身の問題でもある。「スポーツに政治を持ち込まない」ことはオリンピック憲章にも記されている。だが、はたしてそれは、アスリートたちが世情に背を向け黙っていることと同義なのか。」

（「第二部 スポーツウォッシングについて考える／第八章 植民地主義的オリンピックはすでに<オワコン>である——山本敦久氏に訊く」より）

「「政治」と「人権」の境界はどこにあるのだろう。そこに線を引いて区別することははたして可能なのか。そもそも、なぜ人々はスポーツの舞台に「無菌室」であることを求め、アスリートが沈黙することを容認するのか。」

「「スポーツには社会変容を促す力があると私は信じていますが、ずっと将来の目から振り返ると、1968年のメキシコオリンピックや2021年の東京オリンピックがターニングポイントとして見えてくるかもしれないですね」大学の講義で話をしていても、今の大学生や大学院生たちはオリンピックに対して冷静で醒めた受けとめ方をしているという。

「授業では、もしかしたらオリンピックのことが大好きな人たちもいるかもしれないから嫌がるかもしれないな、と思いつながら話んですが、あまり反発はないですよ。それだけ、今の若い子たちにとってはオリンピックなんてどうでもいいコンテンツなのかもしれません。むしろ、ディズニーランド批判やアイドル批判をしたほうが怒られるでしょうね。そっちのほうが、彼女彼女らにとってははるかにセンシティブな問題だから（笑）」

（「第二部 スポーツウォッシングについて考える／第九章 スポーツをとりまく古い考えを変えるべきときがきている——山口香氏との一問一答」より）

「山口／「差別は政治じゃなくて人権の問題なんだ」というのは、私も確かにそのとおりだと思います。でも、その差別を解消するために法律や制度を変え、決めていくのは、いったいどこなんですか、ということでもありますよね。

差別は人権問題なんだとスポーツ選手が訴えて、その差別をなくすために何か法律や制度を変えたら、そこはもう政治じゃないですか。「政治」という言葉を使わないところに意味があるとは思いますが、でも、結局は政治のシステムに行きつくような気がします。

（…）

山口／私は、スポーツというものは何か大きな荒波を一気に起こすようなものではなく、たぶん小さなさざ波を起こり続けていって、それが少しずつ広がっていく、そういうことだったらできるんじゃないかと思っっているんです。おそろく、スポーツ選手たち自身もそう考えていると思う。」

「山口／なぜ国がスポーツに対して強化費を使うのかといえば、お金をかけることによって競技を強くして、それを通じて国家のプレゼンスを向上させるという目的の一部にはあるからですよ。だから、東京オリンピックでも、金メダルを何個獲りました、お金をかけた意義がありました、という話になる。

でも、「もうそろそろ、そうじゃなくてもいいんじゃないか」という考え方も一方では広がりがつあります。日本人を勝たせて日本の名前を上げようとするから国もお金も投入するし、そうなれば国家とスポーツを切り離せないことになってしまう。」

「山口／私もずっと戦ってきた人間だから、金メダルだ銅メダルだと、こだわりなくなる気持ちもわかるんですが、人間同士の競い合いをもっと広い心で眺めることができるようになれば、国同士のメダル争いだって、「何か意味ありますか?」というふうにだんだんなくなっていくんじゃないか。

スポーツって、本来はそういうものなんですよ。好敵手に巡り合うと、その人と戦いことで自分自身がさらに高まる。その人がいなければ、自分はここまでくることができなかった。競技を通じてそういった謙虚さや感謝の気持ちが伝播していけば、世界の人々ともっと高め合っていける。その考えをスポーツを通じて体現していくためには、「もう国家同士の争いじゃないでしょ?」ということを、いち速く私たちは見せていかなければならない。」

「山口／オリンピックって、元々は貴族のアマチュアスポーツから始まっていますから、やっぱり貴族の遊びなんです。ノブレス・オブリージュの精神で、自分たちが得たものを分け与える、というふうには一応なっていますけれども……。

————彼らが去った後はべんべん草も生えないですよ。」

「山口／スポーツってほんとうはもっと自由で伸びやかなものなのに、先ほどのトランスジェンダーの問題もそうだけど、どんどん窮屈で小さくなってしまっているように見えます。排除するのではなく、どうすれば受け入れることができるのか、と考えるところからコミュニケーションも生まれてきます。」

「————選手たちも、より成熟することが求められる・

山口／そうです。選手の側も国威発揚の戦略に乗らないように、勝ったら素直に喜び、負けても深く相手を称える。ウォッシングの道具に利用されないように、スポーツの世界をつくっていくしかないんですよ。「スポーツウォッシングを仕掛けようとしたんだけど、アスリートや観戦している人たちのほうがずっと成熟しているから、全然乗ってこないじゃないか」という状態になっていくのが理想ですね。

————スポーツを取材する我々や日本のメディアも、「スポーツと〈政治〉を切り離す」という常套句で思考停止をするのではなく、その言葉が意味する中身についてもっと深く考察し、検証していく必要があるのではないよね。それが、山口さんの言う「世の中に対してスポーツが小さなさざ波を起こし続けていく」ことの一環にもなるのだと思います。」

○目次

はじめに

第一部 スポーツウォッシングとは何か

第一章 身近に潜むスポーツウォッシング

第二章 スポーツウォッシングの歴史

第三章 主催者・競技者・メディア・ファン 四者の作用によるスポーツウォッシングのメカニズム

第二部 スポーツウォッシングについて考える

第四章 「社会にとってスポーツとは何か?」を問い直す必要がある——平尾剛氏に訊く

第五章 「国家によるスポーツの目的外使用」その最たるオリンピックのあり方を考える時期——二宮清純氏に訊く

第六章 サッカーワールドカップ・カタル大会とスポーツウォッシング

第七章 テレビがスポーツウォッシングを絶対に報道しない理由——本間龍氏に訊く

第八章 植民地主義的オリンピックはすでに<オワコン>である——山本敦久氏に訊く

第九章 スポーツをとりまく古い考えを変えるべきときがきている——山口香氏との一問一答

おわりに

引用・主要参考文献

○西村 章(にしむら あきら)

1964年、兵庫県生まれ。

大阪大学卒業後、雑誌編集者を経て、1990年代から二輪ロードレースの取材を始め、2002年、MotoGPへ。

2010年、第17回小学館ノンフィクション大賞優秀賞受賞。

2011年、第22回ミズノスポーツライター賞優秀賞受賞。

著書に『MotoGP 最速ライダーの肖像』（集英社新書）、『再起せよ スズキMotoGPの一七五二日』『MotoGPでメシを喰う』（三栄）など。

「発酵はアナーキーだ」

酵母は「人間の常識の通用しない
小さくて強力なアナーキスト」だからだ

小倉ヒラクは「発酵デザイナー」として
知られざるローカル発酵食の現場を巡り
やがて日本の辺境でアジアのアナーキーさに再会する

そしてそこで継承されてきている発酵文化の源流は
アジアの国々にあるのではないかとルーツを確かめるべく
発酵を巡るアジア辺境への旅に出る

日本で甘酒や味噌をつくる
カビを使った「米」の発酵の素（スターター）は
「糶」という漢字で表される
それに対して漢字の本家中国では
「麦」を使った「麴」である

小倉ヒラクがルーツを求めたのは
「糶」文化の兄弟であり
当初それは雲南の地にあるのではないかと
チベットから雲南の「茶馬古道」をめぐるが
それはゴールではなく「むしろスタート」となる

「雲南から北東インド世界へと続く
知られざる民族カオス地帯」
「ヒマラヤの麓に、様々な少数民族の織りなす
アナーキー発酵文化が集積する「アジア発酵街道」」があり
内戦中のインドの東の最果てであるマニプル州へ

そこでは「雲南からインドへとやってきたメイテイ族」が
「いまだ見たことのないびっくり仰天の発酵食品や、
日本では失われてしまった古代の麴カルチャー」を
「森のなかでひっそりと継承」していた・・・

この旅を通じ小倉ヒラクは
茶と麴の発酵文化が被っていることに気づく
「茶の道はすなわち発酵の道」なのである

そのなかでも「コルカタ以東の内陸インドは、
水田を中心に米と魚を食べ、湿潤なだけに
食べ物が腐りやすい日本と近い環境」にある
そんな共通点もあり

「米でつくった麴で酒を醸し、
正月に甘酒を振る舞う共通文化が、
インドと日本で生まれることになった」

「食」の豊かさについて考えるとき
「発酵」は重要な鍵となる

それは辺境の地において
その地で得られるものを使って
生き延びていくための知恵でもあり
その知恵ゆえに育てられ継承されている文化でもある

ようやく第二の脳としてとらえられはじめて「腸」で
重要な働きをしている細菌たちと共生するためにも
「発酵」によってつくられる食物は欠かすことができない

そしてなになり小倉ヒラクが
「発酵はアナーキーだ」というように
「現代文明の価値観を覆す」ためにも重要な鍵ともなるだろう

たかが「発酵」というなかれ
古くから伝えられているものを活かす新たな知恵も
「発酵」しなければ生まれることはないのだから

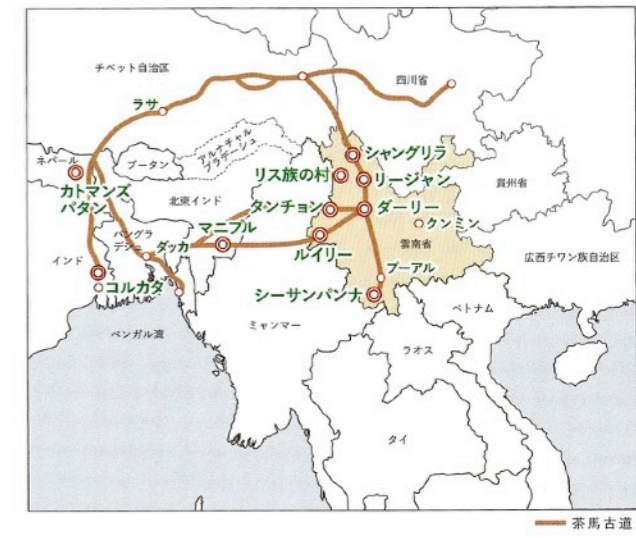
雲南省地図



北東インド～ネパール地図



〈アジア発酵街道〉地図



■小倉ヒラク『アジア発酵紀行』（文藝春秋 2023/11）

■小倉ヒラク『アジア発酵紀行』（文藝春秋 2023/11）

（「まえがき」より）

「発酵はアナーキーだ。微生物という目に見えない自然がつくり出す、人間の予想もつかない働き。酵母は光合成も酸素の呼吸も必要とせずに、人を酔わせるアルコールやかぐわしい香りを生み出す。栄養が豊富にあれば一日で数億倍以上に増殖する。人間の常識の通用しない小さくて強力なアナーキストである。

発酵はサバイバルの知恵でもある。微生物の働きを利用して、人類は長い歴史を生き延びてきた。とりわけ外界から隔絶された過酷な環境ほど、発酵のもたらず物質の保存作用や化学変化のコントロールが生存のキーポイントになってきた。

隔絶された環境で培われたサバイバル技術が、数百年の時間軸で蓄積することで、現代文明の価値観を覆すアナーキーな域に昇華する。僕はそこに人類の文化のしたたかさを見る。」

「発酵に関わる仕事をすると決めてから、東京農大の先生たちの調査を手伝って地方に行くことが多くなった。最初は醤油や味噌、日本酒などスタンダードな醸造蔵を訪れていたが、大学での勉強が終わって自分で仕事をするようになってからは、大学の研究予算がつかないような地方の知られざるローカル発酵食の現場を巡るようになった。20代前半のバックパッカー旅の要領で辺境へ辺境へと行くうち、人口数百人の離島や人里離れた山村に、奇想天外な発酵文化がひっそりと継承されていることを知った。現地で作作りしている人にその成り立ちを聞いてみたところ、海の外のアジアの国々とのつながりが出てくることに驚くことがたびたびあった。山の中の発酵茶が、東南アジアの茶の起原を。島の織物が、ミクロネシアの染色技術の起原を宿している。

現代生活から隔絶された日本の辺境で、かつて僕を魅了したアジアのアナーキーさに再び出会ったのだ。僻地で生まれたサバイバルの知恵が、その土地ならではの価値の多様性を生み出していく。そしてそれははるか生みの向こうの文化とつながっている―――。

ある日、奄美の島海を眺めている時、僕はアジアの発酵を巡る旅に出ることを決めた。日本の発酵食品のルーツと、自分の裡に流れるアナーキーさの源流をつきとめるために。」

（「第I部 茶馬古道の旅へ／第一章 発酵からアジア文化の起源をたどる」より）

「米に花が咲くと書いて、糶。甘酒や味噌をつくる、カビを使った米の発酵の素（スターター）である。この「糶」という漢字は日本でできた漢字で、漢字の本国中国では通じない。中国では米ではなく麦をあしらった「麴」の字が発酵の素を指す。この漢字の違いをもって、日本の食文化の独自性は「米の発酵」であるとされている。

しかし本当にそうなのだろうか？　日本は大陸から切り離された孤児なのではなく、海の向こうにも「糶」文化の兄弟がいるのではないだろうか？

「発酵の起原と多様性は大陸アジアにあり、そして日本は多様な発酵が落ちこちてくる文化の穴である。そしてその穴に落ちる玉のなかで着目してみたいのが「カビの発酵」なのだ。」

「今回の旅で僕が見つけたいのは「麴」ではなく「糶」の起原。かつて大陸から伝わったであろう、米からつくられたソフトな甘酒やどぶろくを醸す発酵の素。何度も中国や韓国に足を運んだが、いまだ見つけることは適わない。文献でしか見かけない幻の米の麴。文化が画一化されるなかで、もはや失われてしまったのではないかとすら思うてしまうが、乾燥した平野の漢民族文化圏「ではない」、温暖湿润で山から流れる清水に恵まれた稲作地帯。そこにまだ見ぬ日本の「糶」のルーツが残っているのではないだろうか？」

「第I部の旅の行程は、日本から雲南省の省都クンミン（昆明）へ入り、そこから雲南北西部の高知、チベット世界の入口であるシャングリラ（香格里拉）へ。さらに雲南西部を長江（揚子江）伝いに南下、発酵茶のメッカであるミャンマー国境のシーサンパンナ（西双版纳）でゴール。標高3 0 0 0m以上の寒冷なチベット高地から、海拔0mの東南アジアの熱帯へと激しいアップダウンを繰り返すダイナミックな道のりだ。（…）

僕たちが向かうのは「茶馬古道」と呼ばれる、1 0 0 0年以上の歴史を持つ古の貿易路。「茶」と名がつくように、東南アジアとヒマラヤの高山のあいだで茶の交易に使われてきた「茶のシルクロード」だ。ゴールのシーサンパンナは、世界最古の茶の一つに算えられる、プーアル（普洱）茶の原産地だ。プーアル茶は、日本人になじみ部会緑茶や紅茶とは違う原理でつくられる、沿革輸送を前提として発達した保存食の粋である。」

（「第II部 幻の糶村／幕間 ヒマラヤが運ぶ発酵文化」より）

「ヒマラヤ高地はまだゴールではなかった。茶のふるさとは訊ねることができたが、本丸である「糶」のふるさとははまだたどり着いていない。」

「第II部の旅の舞台は雲南から北東インド世界へと続く知られざる民族カオス地帯。ここにはアジア中の精神性と味覚と微生物が、ぬか床のように醸され湧き立っている。」

（「あとがき」より）

「アジアのアナーキー発酵を探しに行ったら、まさか文字どおりの無政府（アナーキー）地帯に辿り着いてしまうとは思ってもよらなかった。

政府の秩序も、カーストの秩序も届かないインド最果ての村で、僕はかつて生き別れたかもしれない「糶」の一族と出会い、糶を介して共感の縁を結んだ。そこで改めて感じたのは、共通の食文化があるところには、共通の精神性があるということだ。日本とメイテイに共通の酒や甘酒の文化は、同じく日本とメイテイに共通の先祖崇拜の信仰と結びついていた。身近な食にこそ、文化の起原が宿っているのである。」

「アジアの発酵文化は海や平野から隔てられた山間地でその多様性を花開かせる（…）。雲南省北部では、峻しい山々に阻まれて、各少数民族が隔離された状態で集落をつくっていた。焼酎づくりを訊ねたリス族の同楽村のように、山のすぐ向こう側に見える村に行くのに1 0 0 0m以上の山道を下って、また1 0 0 0、以上登って丸一日以上かかってしまう。そうなると、山の中でとれる限られた食材を徹底的に加工・保存しなければならない。ここで漬物やチーズなどの保存食の知恵が育まれる。そして、山の中の厳しい暮らしには楽しみも欠かせない。すると穀物を醸した酒の文化が発達していく。ヒンドゥーやイスラムのように戒律によって社会的ポジションを与えられるのではなく、拡大家族の民族の絆で連帯する少数民族たちにとって、酒は連帯のために欠かせないものだったのだろう。」

「ネパールのカーストには、「マトゥワリ」という階級の大カテゴリーが存在する。（…）このマトゥワリとはもとは「酒飲み」という意味である。（…）

マトゥワリが伝統的に飲んでいた酒は、本書で見えた「穀物の麴をベースに醸す酒」であるはずだ。チベットや雲南であれば白酒、ネパールであればチャーンやトゥンバ（キビのどぶろく）、マニプルでいえば米を使うワユウやチャックナム（赤米のどぶろく）だ。民族によってディテールは違えど、麴をベースにした酒という点では共通だ。この「麴の酒」は、日本、韓国、中国はじめ東アジア特有の発酵文化である。その東端が極東インドやネパールである。」

「旅に出る前は、先生たちが指し示した「糶」の起原だと思っていた雲南の地は、実はゴールではなかった。むしろスタートだと言えるだる。イスラムやインド世界とマトゥワリたちが混じり合う複雑発酵エリアが広大に拡がっている。これこそが、東アジアの蒙族たちが活躍した茶馬古道の舞台であり、山間地のなかで育まれた保存食と祭りの酒のガラバゴス発酵が集うアジアの発酵無政府地帯だ。最後に訪れたマニプルは、シーサンパンナからヒマラヤ山脈へ登り、そしてベンガル湾へと半円形を描いて下っていく発酵無政府地帯のちょうどおへそに位置している。雲南からインドへとやってきたメイテイ族が、東と西の発酵文化のミッシングリンクを埋める重要な存在だったのだ。

旅の地図を振り返ってみると、茶と麴の発酵文化が被っていることにも気づいた。中国は当然として、ネパール東部にはイラム、イラムに接するインド国境側にはダーージリン、そしてマニプルの北にはアッサムという茶の大産地がある。湿润な気候がカビを育てるのにちょうどよく、かつ茶を流通させる茶馬古道のルートに少数民族の集落が多いこともあるのだろう。茶の道はすなわち発酵の道である。

そんななかでも、コルカタ以东の内陸インドは、水田を中心に米と魚を食べ、湿润だけに食べ物が腐りやすい日本と近い環境だ。そこで米や魚や豆を発酵させ、さらにメイテイのようなマトゥワリの民の系譜は麴をつくって酒を醸す。すると米と主食として納豆になれずしにどぶろく、あるいはお茶！　という僕たちのよく知るコンビネーションに北東インドでもお目にかかれることになるのだ。温暖湿润な気候に水田、そして先祖崇拜の信仰、この条件が重なることで、米でつくった麴で酒を醸し、正月に甘酒を振る舞う共通文化が、インドと日本で生まれることになった。発酵を生業にする日本人の僕もまた、麴の民マトゥワリの末裔なのである。」

▫目次

まえがき

第I部 茶馬古道の旅へ

第一章 発酵からアジア文化の起源をたどる

第二章 リス族とフリーダムアジア麴

第三章 アジアのローカル蒙族を訪ねて

第四章 国境の発酵カルチャー

第五章 マーパンと茶の国際シンジケート

第II部 幻の糶村

幕間 ヒマラヤが運ぶ発酵文化

第六章 混沌のヒマラヤの発酵カルチャー

第七章 インドの菩提酥お粥

あとがき

参考文献一覧

小説家の真山仁は
坂東玉三郎と三十年の交友を持つ

その三十年のあいだに耳にした言葉から
坂東玉三郎の人と芸について伝えようとする
連載がはじまっている

交友のきっかけは一九九三年初夏
当時歌舞伎についての知識はまったくなく
事前の準備もできていなかったが
坂東玉三郎自身からの指名で
舞踏公演についてのインタビューを依頼される

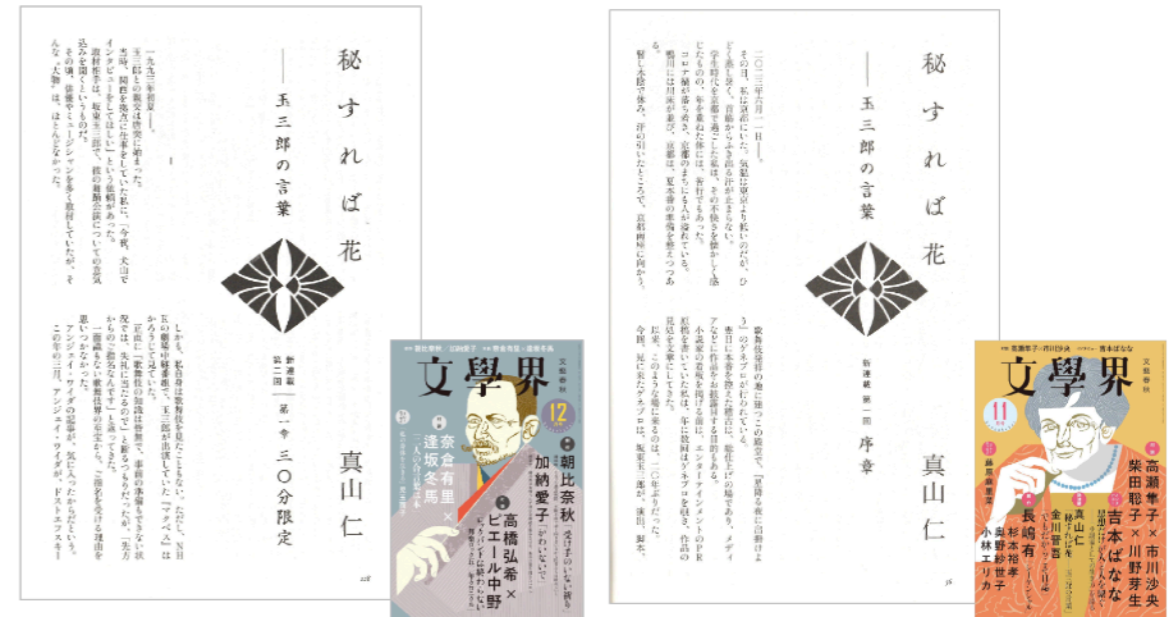
ドストエフスキーの『白痴』に材を取った
アンジェイ・ワイダの映画『ナスターシャ』の上演に際しての
インタビュー記事が気に入ったからだという

マネージャーから三〇分厳守だといわれたが
玉三郎に「歌舞伎も玉三郎の舞台も観たことがない、
と正直に伝え、自分と同様の人に、
玉三郎の魅力を伝えたいと話した」ところ
「それは、楽しそうな取材だね。
ぜひ、そういう話をしましょう」ということで話が弾み
インタビューは一時間半にわたることになる

約一年後にまたインタビュー依頼が来る
有吉佐和子『ふるあめりに袖はぬらさじ』上演のためのもの
移動の車中で関係者は運転手以外のほかにはいない
その三〇分ほどのあいだということだったが
結局その後もずっと話を続けることになる

そして帰りの車の中では今度は逆に
「フリーランスのライターは、大変でしょう。
なぜ、そんな職に？」
といった玉三郎からの「取材」が始まることになる

それから交友ははじまり
「以来、三〇年間、私は玉三郎の言葉を直に聞く幸運恵まれ」
「実に多くのことを、彼から学んだ。
そして、今も学び続けている」
この連載ではそれらについて
「様々なエピソードを交えつつ伝えたい」という



■真山仁「秘すれば花——玉三郎の言葉／新連載第一回 序章」（文藝界 2023年11月号）
■真山仁「秘すれば花——玉三郎の言葉／新連載第二回 三〇分限定」（文藝界 2023年12月号）

しかし玉三郎に
「敬愛する人物の生き様の片鱗を今の時代に刻んでおきたい」
「そろそろ玉三郎の哲学をまとめる時ではないかと尋ねると、
「自らを語るようなものを残したくない」と、言われ」
「快諾はされなかったし、
今でも「嬉しくない」と言われ続けている」なかでの連載である
そういえば玉三郎がじぶんそのものについて
語っているものはあまり目にしたことはない

ぼく自身は歌舞伎についても玉三郎についても
ほとんど無知でしかないのだが
はじまったばかりの連載記事からだけでも
玉三郎という人間の「秘」された「花」が
そこに垣間見えるような気がしている

現代はたしか己を持ちながら
己を越えた真摯な探求を怠らないような
そんな稀有な人物を失いつつあるのではないか
この連載はその貴重な「秘」された「言葉」から
得難いにかを得る機会となりそうだ

- 真山仁「秘すれば花――玉三郎の言葉／新連載第一回　序章」（文藝界 2023年11月号）
- 真山仁「秘すれば花――玉三郎の言葉／新連載第二回　三〇分限定」（文藝界 2023年12月号）

（「秘すれば花――玉三郎の言葉／新連載第一回　序章」より）

「二〇二三年六月一日―――。（…）

歌舞伎座八章の地に建つこの殿堂（京都南座）で、『星降る夜に出かけよう』のゲネプロが行われている。翌日に本番を控えた稽古は、総仕上げの場であり、メディアなどに作品をお披露目すう目的もある。小説家の看板を掲げる前は、エンターテインメントのPR原稿を書いていた私は、年に数回はゲネプロを覗き、作品の見処を文章にしていた。

以来、このような場に来るのは、二〇年ぶりだった。今回、見に来たゲネプロは、坂東玉三郎が、演出、脚本、そして一部作詞まで務めた新作だ。歌舞伎界の至宝と言われる玉三郎は、演出家や芸術監督として、これまで多くの名作を残している。玉三郎の演出作品は、彼の「美意識」への飽くなき追求が通底し、観る人の心を奪うだけでなく、人生とは何かを考えてしまう強いメッセージを感じる。

久しぶりに演出を務める本作は、オリジナルで、初めて脚本も書いた。これは、事件であり、観ないわけにはいかない。

ゲネプロの四日前も、私は京都で玉三郎と会った。互いの近況を話しながら、新作の話になった。「自分の好きな世界を一つにまとめて、お客様に観て頂ける機会を得られたので」玉三郎は特別なことではないように言った。しかし、過去に玉三郎が脚本を手がけたことはない。「脚本とクレジットには入っているけど、実際は、小説や戯曲の中から必要な台詞を抽出して、繋ぎ合わせただけだから」異なる作品を繋いだだけだというが、それをオリジナル作品にまで仕上げるのは、相当に大変な作業だと、容易に想像できる。題材となる三作品とは、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』と、ジョン・パトリック・シャンリイの『喜びの孤独な衝動』、『星降る夜に出かけよう』だ。ちなみにmシャンリイは映画『月の輝く夜に』の脚本でアカデミー脚本賞を受賞し、一躍世界に名が知られた作家だ。

（…）

三作品には、ある通底したテーマがある。尤も物語としては異なる点の方が多く、いったいこれをどうやって繋いでいくのだろうと興味が湧いた。」

「この三作品が流れるように繋がるとは、まるで予想していなかった。しかも、次々と放たれるメッセージは、これまで、玉三郎は幾度となく口にしてきた人生観や美意識、矜持と重なる。これは、紛れもなく玉三郎哲学の集大成だ―――。」

「玉三郎の芸術観に大きな影響を与えた人物の一人である世阿弥の『花伝書』に記されているように、芸の真髄である「花」は、軽はずみに公表するようなものではなく、秘してこそ「花」となる。だから、そろそろ玉三郎の哲学をまとめる時ではないかと尋ねると、「自らを語るようなものを残したくない」と、言われた。それでも三〇年にわたり、彼と語り合い、その生き様を観てきた私は、伝えずにはいられない。だから、こう請うた。「敬愛する人物の生き様の片鱗を今の時代に刻んでおきたい」と。快諾はされなかったし、今でも「嬉しくない」と言われ続けている。しかし、私の中では、今こそ語る時なのだ、強く確信している。」

（「秘すれば花――玉三郎の言葉／新連載第二回　三〇分限定」より）

「一九九三年初夏―――。玉三郎との親交は唐突に始まった。当時、関西を拠点に仕事をしていた私に、「今夜、犬山でインタビューをしてほしい」という依頼があった。取材相手は、坂東玉三郎で、彼の舞踏公演についての意気込みを聞くというものだ。その頃、俳優やミュージシャンを多く取材していたが、そんな`大物、は、ほとんどなかった。しかも、私自身は歌舞伎を見たこともない。ただし、NHKの劇場中継番組で、玉三郎が出演していた『マクベス』はかろうじて見ていた。正直に「歌舞伎の知識は皆無で、事前の準備もできない状況では、失礼に当たるので」と断るつもりだったが、「先方からのご指名なんです」と返ってきた。

一面識もない歌舞伎界の至宝から、ご指名を受ける理由を思いつかなかった。アンジェイ・ワイダの記事が、気に入ったからだという。この年の三月、アンジェイ・ワイダが、ドストエフスキーの『白痴』に材を取った『ナスターシャ』が、大坂・ギャラクシーホールで上演された。映画『地下水道』や『灰とダイヤモンド』、『鉄の男』などを代表作に持つ反体制派の巨匠、ワイダの野心作で、主人公のムイシュキン公爵たる妖艶なヒロイン、ナスターシャの二役を、玉三郎が演じた。そのプロモーションで来阪したワイダに、私はインタビューしていた。

その時の取材では、「気難しい」と評判だったワイダから、何度か「良い質問だね」と褒められた。そして、別際には「本当に楽しかった」と握手まで求められて、恐縮したのを思い出した。だとすれば、断るわけにはいかない。（…）マネージャーからは、「お疲れなので三〇分厳守でお願いします」と釘を刺されている。」

「玉三郎が現れた瞬間、部屋の中がパッと明るくなった。名刺を差し出すと、玉三郎は覗き込むように、私の目を見つめてくる―――胸の奥底まで見透かされているかと思うほどの不思議な磁力があった。ほんの二、三秒だったはずだが、あの目の強さは、今もはっきりと思い出せる。そして、歌舞伎も玉三郎の舞台も観たことがない、と正直に伝え、自分と同様の人に、玉三郎の魅力を伝えたいと話した。「失礼な！」と叱られるのも覚悟したのだが、「それは、楽しそうな取材だね。ぜひ、そういう話をしましょう」と大乗り気の反応が返ってきた。お手並み拝見ということなのだろうな、と思いつながら、インタビューを始めた。歌舞伎の舞台で江戸時代以前の世界を演じている人が、どのように現代社会と折り合っているのかに、興味があると伝えた。「歌舞伎の世界に、ずっと没入しているわけではありません。私も、現代社会に生きているわけですから、それを忘れてはならないと思っています」だから、歌舞伎座に通う日々の中で、街の様子や季節の移ろいを移動の車中から眺めたり、「新聞は、毎日時間を掛けて読みます」と。歌舞伎のような伝統芸能では、日常生活を遮断して舞台を勤めているのではと、私は勝手に思い込んでいた。どんなニュースが気になるのか、と尋ねると、「国内外の動きが分かるもの全て」と返ってきた。

（…）

「ファスト・フードをどう思う？」いきなり話題が変わった。」

「玉三郎とはかけ離れた単語だったので、聞き間違えたのかと思った。確認すると、彼は、同じ疑問を繰り返した。今やすっかり定着したお手軽料理の、いったい何が気にかかるのかと尋ねた。「文化の問題です。あれは、日本の食文化を破壊している。特に子どもたちに人気があるようだけれど、子どもには、絶対食べさせたくない」（…）

文化とは長い時間を掛けて徐々に形づくられ社会に浸透していく。したがって、社会環境が激変したとしてお、文化は簡単に変化しない、それを無理やり変えようとする、大きな歪みが生じる、「目先があたし区手、他の思想で、人気だから子どもに与える。それが文化なんだろうか」玉三郎には、その国独特の文化を理解し、守りたいという強い意志がある。その延長線上にあるのが、彼の俳優としての佇まいではないだろうか。彼はよく、「今を生きている者として舞台を勤める」と言う。逆に言えば、現代社会の中で、日本の伝統や文化をいかに守り、時に折り合いを考えるとという意味だ。話を聞いていく内に、彼の発想の源や、様々な事象についての考えを聞いてみたいと思った。だが、そこで約束の三〇分が過ぎた。時間なのでと、取材を終えようとした時、玉三郎が言った。「どうして？　あなたは時間が無いの？　もっと話しましょう」それからさらに一時間、私たちは話を続けた。もはや取材者と対象者ではない。互いが考える日本の文化論を話しつづけた。」

「その日、別れ際に玉三郎から「また、ぜひ話をしましょう」と言われたが、私を含め、取材に立ち会った関係者らも、社交辞令としか考えていなかった。ただ、あの濃密な一時間半の記憶のせいか、自分が風景や時代を見る時の目が変わった、ように思う。犬山での取材から約一年後、再び玉三郎のインタビュー依頼が来た。今度は有吉佐和子の名作『ふるあめりかに袖はぬらさじ』上演のためのものだ。取材場所は、大阪市のフェスティバルホール。映画化された『ナスターシャ』のトークショー付き上映会が行われるので、その後で「三〇分」と言われた。イベント終了後、京都に行くので、取材は移動の車中で行ってほしいという。取材には、担当者なりマネージャーなりが立ち会うのが常識だが、この時は、車中には他に同行者がいない。つまり、運転手以外は、関係者は誰もいない。親しくもない無名のライターなど、信用していいのか、と思ったのだが、玉三郎が、前の取材を覚えていて、二人でいいと決めたらしい、光栄なことだが、さすがに緊張もした。（…）

三〇分なんてあつという間で、目的地が近づいてきたので、運転手に、その旨を伝えと、玉三郎に「この後も、予定が入っているの？」と尋ねられる。何の予定も入っていない。「一人だと退屈だから、京都駅まで付き合ってくれない？」望むところだった。録音を止めて、ノートも閉じて、雑談が始まる。（…）「玉三郎さんのムイシュキンは、本当に存在感がありました。玉三郎さんの、新しい一面を垣間見た気がしますし、女形とは思えなかった」と告げると、本人は嬉しそうに、私の感想を聞いてくれた、そして現地での撮影の苦労を話してくれた。ワルシャワは、寒くて慣れない場所だった……と、また、世界的な名監督であるワイダのこだわりとの衝突もあったという。「言葉が通じないけれど、魂は通じることがある。アンジェイとは、そういう関係だった。だから、いくら作品作りで意見の衝突があっても、最後は分かり合える。それは、妥協とかではなく」言葉より、魂か……。」

「京都駅で降りるはずが、結局、玉三郎の目的地まで同乗し、帰りもそのまま車中で大阪まで戻ることんある。帰りの車の中で、今度は、玉三郎からの「取材」が始まった。「フリーランスのライターは、大変でしょう。なぜ、そんな職に？」隠すほどのことではないので、私は正直に答えた。元は全国紙の記者だったが、そもそもが小説家志望で、記者はそのひとつのステップだったことも話した。「小説家を目指す人に初めて会った」なぜ小説家になりたいのか、どんな作品を書きたいのか、そして、そのためにどんなことをしているのか―――と興味津々の質問が飛んできた。私は、その問いに、熱意を込めて答えた。（…）包み隠さず、彼の問いに答えた。それを受けながら思わず、この先もっと色んな話をうかがう機会を得たいと告げた。「色々話したいね。じゃあ、一緒に山鹿に行かない？」

以来、三〇年間、私は玉三郎の言葉を直に聞く幸運恵まれている。実に多くのことを、彼から学んだ。そして、今も学び続けている。その多くは、私だけが聞くには惜しい「至言」ばかりだ。それを、様々なエピソードを交えつつ伝えたいと思う。その前に、理解しなければならぬことがある。いったい坂東玉三郎とは、何者なのか―――」

- 真山 仁（まやま じん）
- ・1962年7月4日 -
- ・日本の小説家。経済小説『ハゲタカ』シリーズの著者として知られる。

「索引」とは
「時間節約を目的として採り入れられた、
どこを探せばよいのかを教えてくれるシステム」である

書物の巻末に付けられていることの多い「索引」だが
その歴史は八百年ほど前の一三世紀パリ
ドミニコ会修道院でのラテン語聖書の用語索引が
はじめて作成されたときに遡る

索引には
上記の「用語索引（コンコードダンス）」と
「主題索引」という二種類がある

用語索引とは
インターネット検索ビューにも通ずるもので
「本にある単語を見出し語にして、
それが出現する箇所と、場合によっては用例を列挙したも
の」

主題索引とは
書物の巻末に付されているような
「作品中の主題（人名、地名などの固有名詞や概念など）を
見出し語として抽出したもの

最古の主題索引は同じく一三世紀
イギリス人神学者グロテストが破した書物に
トピックと参照先を列挙した『目録』である

私たちはグーグルなどをつかって
「検索」を日常的に行うようになってきているが
その際にはウェブを検索しているのではなく
ウェブの索引（インデックス）を検索している
さらにいえばX（旧ツイッター）で
ハッシュタグをつけてつぶやくとき
瞬時に索引項目が創出されてもいるのだという

さて当初作られた索引は
写本が行われる際に紙の大きさが違ったりすることで
本によって記載されているページが変わり
うまくいかなかったこともあるようだが
活版印刷の技術により本の判型が揃うことで
情報へのアクセスが効率的になされるようになる

■デニス・ダンカン（小野木明恵訳）『索引 ～の歴史 書物史を変えた大発明』
（光文社 2023/8）

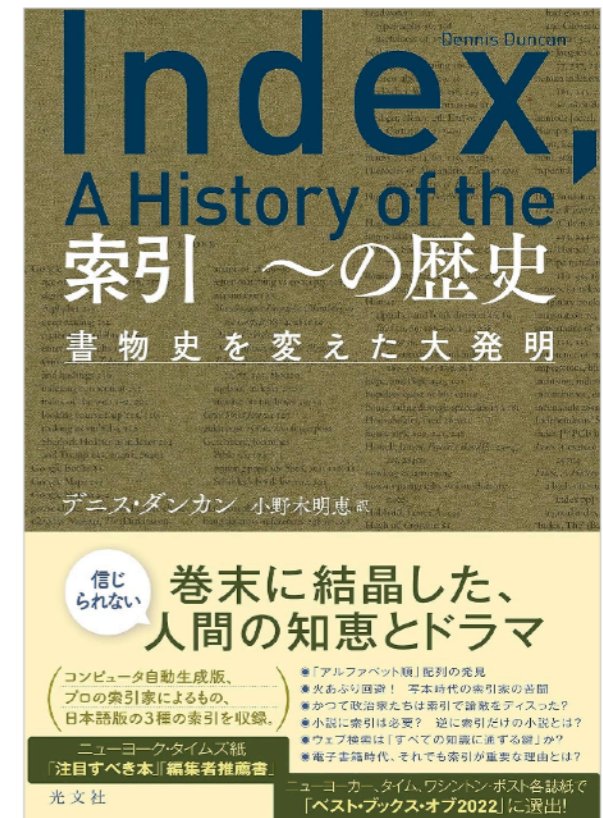
しかし現在「検索エンジン」を使った「抽出読み」により
「わたしたちの脳が変化し、集中力の持続時間が短くなり、
記憶力が減退している」と懸念されてもいるように
かつての時代もそうした懸念はつきまわっていたという
要するに「索引バカ」「検索バカ」となるということだ

読書の仕方は時代の変化ともなって
変化せざるをえないことも確かであり
さまざまな読書の仕方は
それなりの仕方に変化・共存していくのだろう

「索引」以前に本という形態も
それ以前の形態から変化して生まれ
さらにいえば文字そのものも文字のない状態から生まれ
文字によってスポイルされたものも多分にある

しかしロバート・コリソンが二〇世紀半ばに
「どこを探せば必要な物が見つかるかがわかるように
身のまわりの空間を整えるとき、じつは索引を作成してい
る」
と示唆しているように
その働きのもととなっているのは
私たちがほんらいもっている心的能力のひとつであり
重要なのはその能力をいかに活用するか
という視点でとらえていく必要があるのだと思われる

さて本書は「索引」の歴史を扱っているだけあって
巻末には
コンピュータで作成した索引（の一部）
プロの索引家による主題索引
そして日本版索引の3種の索引が収録されている
実際に見なければイメージできないが参考までに



<div><div></div>■デニス・ダンカン（小野木明恵訳）</div>
『索引　～の歴史　書物史を変えた大発明』（光文社 2023/8）
（「序文」より）

「さまざまな技術と同様に、索引にも歴史がある。その歴史は八〇〇年近くにわたり、特定な形態の本、つまりはコーデックス、すなわちページの束を折り背をつけて閉じた冊子本と密接に結びついてきた。しかし現在では、索引もデジタル時代に入出し、オンラインでの読書を支えるうえで欠かせない技術となっている。なにしろ、初めて誕生したウェブページはまさしく主題索引だったくらいだ。インターネットという大海に乗り出すにあたりたいいていの人が利用する検索エンジンについて、グーグル社のエンジニア、マット・カツツが次のように説明している。「最初に理解すべきは、グーグルで検索をするとき、実際にはウェブを検索しているのではないということです。グーグルが作成したウェブの索引（インデックス）を検索しているのです」。今日、わたしたちの生活は索引によって調えられている。本書では、一三世紀ヨーロッパの修道院や大学から、二一世紀のシリコンヴァレーにある現代的な社屋をもつ企業にいたるまで、索引がたどってきた興味をそそる行路を紹介していきたい。」

「索引の歴史は、じつは時間と知識についての物語であり、この両者の関係を語るものでもある。情報にすばやくアクセスする必要性が高まるにつれ、本の内容が分割可能で非連続、抽出可能な知識の単位で構成されることが望まれるようになってきた。これは情報科学という分野の問題であり、索引は、この分野の基礎をなす構成要素なのだ。しかし、索引の発展を追っていけば、読書という分野の歴史も見えてくる。作品の発展は、大学の誕生、印刷技術の登場、啓蒙主義的言語学、パンチカードを使った情報処理、ページ番号やハッシュタグの出現と密接に結びついている。つまり、これは単なるデータ構造にはとどまらない話なのだ。人工知能が侵入してくる今日でも、本の索引の作成はいまだに主として生身の人間である索引家（インデクサー）の手で行われている。索引家は、著者と読者を仲介する専門家なのだ。」

「索引とはどういうものなのか。ごく一般的な意味では、時間節約を目的として採り入れられた、どこを探せばよいのかを教えてくれるシステムである。索引 [index、「指し示すもの」の意] という名称からも、空間的な関係を示すもの、すなわちある種の地図図であるとわかる。こちらにある何かから、あちらにある何かへと注意を向けさせる―――すなわち指し示す [indicate、語源はindexと同じ] ものなのだ。その地図は現実の世界に存在する必要はなく、わたしたちの頭のなかにあるだけでよい。二〇世紀半ばにロバート・コリソンが次のような見解を記している。どこを探せば必要な物が見つかるかがわかるように身のまわりの空間を整えるとき、じつは索引を作成しているというのだ。」

「サミュエル・ジョンソンが著した『英語辞典』では、索引 (index) につて、「本の目次」というあまり有用ではない定義が示されている。索引と目次には一見すると共通点がたくさんある。両者ともに所在（ロケーター）、すなわちページ番号を伴う標識を列挙したものである。（…）

たとえロケーターがなくとも、目次を見れば作品構造の概要がわかる。目次は、本文の順序をたどり、その構成を明らかにしているからだ。目次をざっと見れば、全体としてどのような議論がなされているかを、かなりの程度まで推測することができる。（…）目次の歴史は、冊子本（コーデックス）登場以前の古代にまでさかのぼる。少なくとも、古代ローマの作家四人と、古代ギリシアの作家ひとりが、作品に目次を付していることが知られている。」

「目次とはちがい、ロケーターのない索引は車輪のない自転車ぐらい役に立たない。そんな索引では、だいたいどのあたりを開けばよいかの判断がつかず、おおまかな議論の内容もわからない。」

「ときおり目次が思いがけなく話に入り込んできたりもするが、本書は索引について、つまりは一冊の本を構成要素、登場人物、主題、さらには個々の単語へと細分化したものをアルファベット順に並べた一覧表についての本である。その索引とは、（…）時間がなくれ最初から順を追って読む余裕がない人たちを対象に、ある特定の読書形態―――学者からは「抽出読み」と称されるようになっている―――をスピードアップさせるために作られたテクノロジー、つまりは拡張機能なのだ。」

「デジタル化によって、特定の語句の検索能力は、もはや個人人の努力とは関係がなくなった（…）。検索機能はすでに、電子書籍リーダーに内蔵されたソフトウェアプラットフォームに組み込まれるようになっていた。（…）

それと同時に、検索エンジンがいつでもどこでも使えるために、ひとつの懸念が生まれつつある。検索することが、ひとつの心的状態となっているのではないか。以前の読書形態や学習形態に取って代わり、じつに恐ろしい数多くの害をもたらしているのではないかという懸念である。検索エンジンによって、わたしたちの脳が変化し、集中力の持続時間が短くなり、記憶力が減退していると言われている。（…）

しかし、長い目で見れば、昔からあった問題が最近になって再燃しただけにすぎない。索引の歴史には、こうした懸念がつねにつきまっっている。もはやだれもきちんと本を読まなくなるのではないか。抽出読みが、長時間をかけて本と向き合う姿勢に取って代わるのではないか。新しい問いを立て、新しい種類の学問をして、昔ながらの精読のしかたを忘れ、嘆かわしく救いがたい注意散漫な状態に陥ってしまうのではないか。これらすべての原因は、あのいまいましい道具、すなわち本の索引である。王政復古時代、不要な引用を挿入して作品を無駄に引き伸ばす作家を揶揄する索引蒐集家という蔑称が生まれた。（…）

それでいて四世紀が過ぎた今でも（…）索引は、いまだ生きながらえている。それとともに読者や学者、発明家も同じく生きながらえている。わたしたちの読みかたは、二〇年前とはちがうかもしれない。（…）だが、二〇年前の読みかたも、たとえばヴァージニア・ウルフの世代や、一八世紀の家庭や、印刷機が初めて登場した時代の読み方とはちがっていた。（…）ふつうとされてきた読書のしかたはどれも、歴史上のさまざまな状況に対応したものだっ。社会環境や技術環境に変化が生じるたびに、「読書」の意味するところも進化していく。読者のほうも進化しないのは不合理だ。」

<div><div></div>（「訳者あとがき」より）</div>

「索引とは、一冊の本を構成要素、登場人物、主題、さらには個々の単語へと細分化したものをアルファベット順に並べた一覧表であると序文にある（日本語の本なら五十音順となる）。」

「第1章では、そもそもアルファベットの配列がどのように考案され、定着していったのかを振り返る。ウガリト文字がアルファベット順に記された粘土板（紀元前二〇〇〇年紀中葉）が発見されているが、この配列が、ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語のアルファベットに継承されていったという。また、古代ギリシアの詩人カリマコスがアレクサンドリア図書館で作成した長大な図書目録では、著者名がアルファベット順に並んでいる。」

「第2章では、いよいよ作品が誕生する。索引には、用語索引（コンコーダンスとも呼ばれる）と主題索引という二種類があり、この二つが中世の同時期に生まれた。一三世紀、パリのドミニコ会修道院で、ラテン語聖書の用語索引が史上初めて作成された、用語索引とは、本にある単語を見出し語にして、それが出現する箇所と、場合によっては用例を列挙したものである。こちらの索引は、現代のインターネットの検索ビューにも通ずるものだ。たいして主題索引とは、作品中の主題（人名、地名などの固有名詞や概念など）を見出し語として抽出する。こちらは今もなお、一般的な図書の巻末に付されている。最古の主題索引は、同じく一三世紀、イギリス人神学者グロテストが、みずからが読破した書物を対象として、四四〇個のトピックと、その参照先を列挙した『目録』である。」

「第3章では、本の索引が機能するために欠かせないページ番号について語られる。印刷されたページ番号は、一五世紀に出版された説教集の余白に初めて登場した。」

「第4章では、一五世紀ゲーテンベルクの印刷術発明以降、印刷本が普及して、人々が索引に頼るようになっていったことへの懸念にふれられている。こうした索引への過度な依存は後年、「索引学」と揶揄されるようになる。」

「第8章では紙の本を離れて、コンピュータを使った読書と索引作成に話が転じる。イタリアの小説『冬の夜ひとりの旅人が』（カルヴィーノ著）では、「コンピュータ読書」なるものを研究する女性ロターリアが登場する。小説を装置に読み込ませると、テキストに出現する単語を頻度の高い順に記録した表が出力され、それを見れば、どういった小説であるかが一目瞭然となるというのだ。カルヴィーノのこの作品が発表されたのは一九七九年だが、その二〇年ほど前から文学の領域にコンピュータのテクノロジーが進出していていた。初めてコンピュータを使用して用語索引（ドライデン詩集のコンコーダンス）が作成されたり、家庭用コンピュータで操作できる索引作成アプリが登場したりした。さらに本章では、電子書籍の索引機能や、ハッシュタグの起原についても説明している。それでいて主題索引は今もなお本の巻末に鎮座している。コンピュータの助けを借りて単純作業がスピードアップされることはあっても、優れた索引は、優れた生身の人間にしか作り出せない。」

「結びの章（…）。

終盤までたどりついた読者は、索引に歴史が今日の歴史がインターネットの時代に直結していることにも気づかされる。検索の時代、頭にかんだ疑問を手早くググる時代では、わたしたちはそうとは意識せずに、グーグルの作成したウェブのインデックスを検索しているのだ。ツイッターでハッシュタグをつけてつぶやくとき、わたしたちは瞬時に索引項目を創出しているのだ。」

<div><div></div>◎目次</div>
序文
第1章　順序について／アルファベット順の配列 v
第2章　索引の誕生／説教と教育
第3章　もしそれがなければどうなるのだろうか？／ページ番号の奇跡
第4章　地図もしくは領土／試される索引
第5章　いまいましいトリー党員にわたしの『歴史』の索引を作らせるな！／巻末での小競り合い
第6章　フィクションに索引をつじえる／ネーミングはいつだって難しかった
第7章　「すべての知識に通ずる鍵」／普遍的な索引
第8章　ルドミツラとロターリア／検索時代における本の索引
結び　読書のアーカイヴ
原注
謝辞
訳者あとがき

<div><div></div>巻末より</div>
図版一覧
索引家による索引
コンピュータによる自動聖性索引
日本語版索引

▫デニス・ダンカン（Dennis Duncan）
マンチェスター大学で英文学を学ぶ。ロンドン大学バーベック校で博士号を取得。2019年より同校の講師。専門は書物史、翻訳、とくにフランス系のアヴァンギャルド作家の研究。著書に、本文ページとは異なる索引やタイトルページなどのパラテキストを論じたBook Parts (2019, Adam Smythとの共著)、フランスのウリポを扱ったThe Oulipo and Modern Thought (2019) があるほか、フーコー、ポリス・ヴィアン、アルフレッド・ジャリの翻訳もある。『ガーディアン』『タイムズ文芸付録』『ロンドン・レビュー・オブ・ブックス』にもたびたび寄稿している。

▫訳者略歴
小野木明恵（おのき　あきえ）
大阪外国語大学英語学科卒業。訳書に、ライザ・マンディ『コード・ガールズ』、モフェット『人はなぜ憎しみあうのか』、ギロピッチほか『その部屋のなかで最も賢い人』ほかがある。

岩波書店の雑誌『図書』連載「言葉のほとり」
(二〇二二年三月号～二〇二三年八月号)に
奥村門土(モンドくん)による描きおろしの挿画が
加えられ書籍化されている

「この世」の「向こう」に目を凝らす詩人と
「この世」の「現場」から世界を見つめるライターとが
一年半にわたり詩と手紙を交わしあう…

本書のタイトルは『その世とこの世』

「その世」という表現は
本書の谷川俊太郎の詩ではじめて目にしたが
たしかに「その世」は
「この世」と「あの世」のあわいにあるのだろう

この世と違って静かだが
あの世のように沈黙のなかにあるのでもない
そしてそこでは「音楽」が「統べている」…

ブレイディみかこによれば
英語には「あの」と「その」に区別はないが
あえて表せばsomewhere in betweenであり
「中動態」のようだという

音楽をはじめとしたあるきっかけで
そんな「その世」に
導かれることはたしかにある

ブレイディみかこは少し前に
少女小説の中で
中学生の主人公とその友人が話し合う場面で
そんな感覚について書いたという

「それはここではない世界で、
自分が本来いるべき場所っていうか、
行ったこともないのになぜか知っている場所……」

ブレイディみかこが「その世」の詩を読み
「もう一つ強烈に想起させられたのは、
谷川さんの絵本『ぼく』」だったという

その絵本は
「なぜか ここに いたくなくなって」
「ぼくはしんだ じぶんでしんだ」
という少年が描かれている

それは自殺という逃避ではあるとしても
ふつつ表しているであろうような暗さではなく
「ぼくは じぶんをいきる」という
不思議な明るさを感じさせられさえる

少年は「この世」から「あの世」へではなく
「その世」へと行こうとしたのかもしれない

少年が「その世」という場所を得ることが
できていたとしたら
実際に死を選ばずに済んだのかもれない…

ぼく自身をふりかえっても
かつて死は選びはしなかつただろうけれど
ある種の閉塞状態から
「その世」へと導いてくれたのは
バッハの音楽だったりもしたことがあり
いまでも「その世」を求めて
耳をすましているともいえる

本書での対話が興味深いのは
視点あるいは立ち位置の異なっている
ふたりの「あわい」で成立しているところだろう

「この世」の「向こう」でも「現場」でもない
「言葉のほとり」あるいは「あわい」でのポエジー



■山極壽一『共感革命／社交する人類の進化と未来』
(河出新書 067 河出書房新社 2023/10)



- 谷川俊太郎・ブレイディみかこ・奥村門土（絵）『その世とこの世』（岩波書店 2023/11）
- 文 谷川俊太郎・絵 合田 里美 『ぼく(闇は光の母 3)』（岩崎書店 2022/1）

（『その世とこの世』～「その世………谷川俊太郎」より）

「好きな音楽の数小節は好きな女性と並んで、私にとっては人間社会を超えたコスモスと直に触れ合うことのできるほとんど唯一のmediumなんです。〈詩は音楽に恋をする〉というのが私が折に触れて口にする決まり文句の一つです。

その世
<div><p>この世よあの世のあわいに その世はある 騒々しいこの世と違って その世は静かだが</p> <p>あの世の沈黙に 与していない 風音や波音 雨音や密かな睦言</p> <p>そして音楽が この星の大気に恵まれて 耳を受胎し その世を統べている</p> <p>とどまることができない その世のつかの間に 人はこの世を忘れ 知らないあの世を懐かしむ</p> <p>この世の記憶が 木霊のようにかすかに残るそこで ヒトは見ない触らない　ただ 聴くだけ</p></div>

（『その世とこの世』～「青空………ブレイディみかこ」より）

「「その世」という谷川さんの詩のタイトルを拝見したとき、これ英語でどう言うんだ？ とまず思いました。「あの」は「that」、「この」は「this」。では、「その」は？

英語では「その」も「that」なんですよ。つまり、二つしかないのです。

この世（this world）とあの世（that world）のあわいにあるところも、英語ではthat worldになる。あえて英語にすればsomewhere in betweenとなるでしょうか。あいだにあるものを表すのに、「この（this）」「あの（that）」と対等な、まったく独立した三番目の言葉が日本語には存在する。これは哲学者の國分功一郎さんの「中動態」みたいで面白いと思いました。

好きな音楽の数小節で、この世ともあの世とも知れない空間に連れて行かれる感じはわたしにもわかります。少し前に書いた少女小説の中に、中学生の主人公とその友人がそんな感覚について話し合う場面を書きました。彼女たちは、ダンスを踊ったり、音楽を聴いたりしていると、唐突に「ああ、これだ」と感じる瞬間が訪れることを不思議に思います。そしてこんなお喋りをするのです。

「『これ』って何だろう」
「……それはたぶん、こことは違う世界を指しているんじゃないかな」
「え？」
「たぶん、『これだ』って感じる瞬間だけ、私たちは、その違う世界に行ってるんじゃないかな」
「……違う世界って、それ、どこのこと？」
「わからない。わからないけど、それはここではない世界で、自分が本来いるべき場所っていうか、行ったこともないのになぜか知っている場所……」
（『両手にトカレフ　』ポプラ社）」

「「その世」を拝読し、もう一つ強烈に想起させられたのは、谷川さんの絵本『ぼく』でした。（…）

実はこの絵本を最初に読んだとき、わたしはさまざまなキーワードでネット検索を行い、英語でもこのような絵本があるのか探してみました。が、見つけることはできませんでした。やはり死を扱っていても、途中で救いが訪れて、最後には明るくハッピーエンドという絵本が主流のようです。

とは言え、わたしは『ぼく』にそこまでの暗さは感じませんでした。むしろ、「その世」感に見ている気がしてなりません。

谷川さんが書かれた言葉もそうですが、登下校する子どもたちや交差点を行き交う人々をじっと見ている半ズボン姿の少年は、まさに「この世とあの世のあわい（somewhere in between）」にいるようで、「この世の記憶が木霊のようにかすかに残る」音を聴いているようです。絵を描かれた合田里美さんの、なんとも言えないブルーのタッチ（ランドセルを背負っているから日本の子どもなのでしょうけど、目が青いんですよ）との相乗効果もあるでしょう。この絵本を危険だと思う人がいるとすれば、それは少年が自死することより、この「その世」感にわけもなく惹かれてしまうからだと思います。

個人的にハッとしたのは、少年が手に持っていたスノードームの中の宇宙でした。その宇宙の中を少年が漂っている絵があり、次のページでは「なぜか　ここに　いたくなくなって」という言葉と共に、宇宙を走って逃げている少年が描かれています。」

「それから、驚いたのはこの絵本がさりげなくメタ構造になっているところでした。少年が学校で使っている教科書の中に谷川さんの詩が出てくるからです。谷川さんの詩のタイトルは「いきでいて」。絵本全体が「ぼくはしんだ　じぶんでしんだ」で終わるのと対照的に、作中詩は「ぼくは　じぶんをいきる」で終わります。

「わたしはわたし自身を生きる」というのは（わたしのヒーローである）大正時代のアナキスト、金子文子の有名な言葉ですが、彼女は十三歳のときに朝鮮で川に飛び込んで自死しようとしています。でも、飛び込もうとした瞬間に蟬が力強く鳴きはじめたのを聞いて自然の美しさに気づき、死を思いとどまります。『ぼく』の作中詩に出てくる少年も、足元から虫の音のような「いのちのおと」を聞いて、「ぼくはじぶんをいきる」と思いますよね。

死んでしまった『ぼく』の最後のページに拡がっている青空と、死ななかった文子が錦江のほとりで見上げていた青空は繋がっている気がしました。空は、「この」「あの」「その」の三つを繋いでいる珍しいものだと思います。」

▫目次

邪気の「あるとない」 ……ブレイディみかこ
萎れた花束 ……谷川俊太郎
Flowers in the Dustbin ……ブレイディみかこ
その世 ……谷川俊太郎
青空 ……ブレイディみかこ
座標 ……谷川俊太郎
詩とビスケット ……ブレイディみかこ
現場 ……谷川俊太郎
淫らな未来 ……ブレイディみかこ
気楽な現場 ……谷川俊太郎
秋には幽霊がよく似合う ……ブレイディみかこ
幽霊とお化け ……谷川俊太郎
ダンスも孤独もない世界 ……ブレイディみかこ
父母の書棚から ……谷川俊太郎
謎の散りばめ方 ……ブレイディみかこ
笑い と 臍の緒 ……谷川俊太郎
ウィーンと奈良 ……ブレイディみかこ
Brief Encounter ……谷川俊太郎

松本大洋が初めて描いた漫画創作の物語
『東京ヒゴロ』が全三巻で完結

物語としては比較的単純だが
松本大洋以外には表現できないであろう
独特のテイストをもった作品となっている

大手出版社で三十年間
漫画編集者として生きてきた塩澤和夫は
念願が叶って創刊した漫画雑誌『夜』が休刊となり
その「贖罪」のために長年勤め続けた会社の辞職を決意

さらには漫画からも決別しようし
人生を支えてくれていた宝物である漫画を
全て処分しようとするが思いとどまる
漫画と離れることはできなかったのである

しばらくして塩澤は駆け出しの編集者だった頃
初めて担当を任された作家・立花礼子の葬儀に出席し
そこで亡くなったはずの立花と会話を交わす…

そしてもう一度理想の漫画雑誌を作りたいと思い立ち
かつて関係した自分が信じる漫画家たちを訪ね歩く

自信を失い描けなくなった漫画家
進むべき道に迷った若者…
塩澤は懸命にそんな漫画家たちに執筆を依頼し続け
それぞれの人生が交錯する東京の空の下で
漫画が生みだされてゆく

物語はおおよそ上記の通り

漫画からの引用は難しいけれど
雑誌を作ることを決意したきっかけとなった
亡くなった漫画家・立花礼子と交わされた会話
そして雑誌が完成したあとで
交わされた会話を
以下に引用しておくことにした



■松本大洋『東京ヒゴロ (1)(2)(3)』（ビッグコミックス 小学館 2021/8・2022/9・2023/10）

おそらくその会話のなかにある
塩澤の

「創造をする苦難の中に…
その道程にこそ、喜びがあった」
というところに

『東京ヒゴロ』が描かれなければならなかった
とても大切なことが描かれていると思われる

A I に代わりをしてもらおうというような
人間のあるいはかけがえのない人の生が
いらなくなってしまいかねない
そんな時代だからこそ

こうした一見古めかしくも感じられる漫画が
泥臭く描かれなければならなかったのだろう

<div>■松本大洋『東京ヒゴロ (1)(2)(3)』（ビッグコミックス 小学館 2021/8・2022/9・2023/10）</div> <p>（「東京ヒゴロ (1)」～「第1話 本日、一身上の都合により退職いたします。」より）</p>	
「白い文鳥／きょうがさいご…さびしいですね…すこし。	ねえ、知ってる？塩澤君。
そうでしょ？	人は誰でもいつか死んでしまうみたいよ。」
塩澤／感慨はありますが、仕方のないことです。	
（…）	
私はあそこで働くに値しない、人間なのですから。」	
（「東京ヒゴロ (1)」～「第5話 大船、11時、立花礼子先生葬儀。」より）	
「立花／来てくれて嬉しいわ。塩澤君。	
塩澤／…私がまだ駆け出しの編集者だった頃…初めて担当を任されたのが、立花先生でした。	
立花／そうね。当時は若い人がつくことが多かった…	
あの頃の私は人気も安定してあったし、わがままも言わなかったから…	
聞きわけのいい優等生だったもの…	
でも…本当は、もう描くことが苦しくてね…いっそ大病でも患わないかと…そんな不埒な期待までしていたのよ。	
気付いていたわけよね？塩澤君は…	
塩澤／はい。存じておりました。	
立花／覚えてるかな。塩澤君…	
今日のように雨が降った深夜の喫茶店。既に私は印刷所を待たせる常連になっていて…	
その夜の受け渡しも終電ギリギリで…慌てて帰るあなたを正直私は冷ややかに見送ったわ…	
篠突く雨が降る軒先でしばらく立ち尽くしたあなたは…	
突然背広を脱いでグルグルと原稿に巻き付けてね…その上に傘をさいて…自分の体は放っばり出して…	
あの時、私決めたのよ。	
これからは自分が好きなものだけ描くって…	
塩澤／はい。	
立花／どんどん売れなくなっちゃった。	
塩澤／はい…	
そんな先生の作品をとても好きでした。	
立花／知ってる。	
あなた担当を離れてからも、私の漫画が出るたびに感想の手紙をくれたわね。いつもその手紙を楽しみにしていたわ…	
もう一度塩澤君と組んで何か作れたかったな…それだけが少し心残りかしら…	
それでも総じて幸せな人生だったわ。たくさんの漫画を描いていくつもの世界を生きることができた…	

^[1] 松本大洋（まつもと・たいよう）1967年、東京都生まれ。'87年、講談社「月刊アフタヌーン四季賞」で準入選を果たし、デビュー。『週刊モーニング』にて『STRAIGHT』、『点&面』を連載した後、『ビッグコミックスピリッツ』にて『ZERO』、『花男』、『鉄コン筋クリート』、『ピンポン』、『竹光侍』（原作：永福一成）などの作品を発表。『竹光侍』は2007年に第11回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞、'11年に第15回手塚治虫文化賞マンガ大賞を受賞。'16年『Sunny』で第61回小学館漫画賞受賞。'20年『ルーヴルの猫』で米国アイズナー賞を受賞。現在『東京ヒゴロ』をビッグコミックオリジナル増刊号（小学館）にて連載。

☆mediopos-3300 2023.11.30

スーザン・ソングは『スーザン・ソング 「脆さ」 にあらがう思想』の著者である波戸岡景太の表現しているように「カッコいい」のだろうか

「カッコいい」のだとすればそれはあらゆる脆さ（ヴァルネラビリティ）にあらがうというそれだからだといえる

ソングの思想は反解釈・反写真・反隠喩によって戦争やジェンダーといった事象におけるあらゆる「ヴァルネラビリティ」に「あらがう」ものだったが

ソングはその「ヴァルネラビリティ」に対しその本質を追究したり克服しようとしたのではなく「すべての存在が抱える脆さというものへのアプローチの方法を考えてみること」であらがおうとしたおそらくそこに「カッコよさ」はある

わたしたちは誰もが「ヴァルネラブル」な存在でありソングはそれに対して「批評的言語」で応えようとした

たとえば「写真を撮ることは、他の誰かが抱える」「死すべき運命、ヴァルネラビリティ、移ろいやすさといったものに関与することである」と言う

「誰かの苦痛は、たとえ間接的にであれ「私」によってもたらされたものであり、同時に、「私」もまた、そうした苦痛をもたらす誰かの意志や行為から無縁ではられない」

私たちの「関与」は「（たとえその瞬間には見えなくとも）力が加わればたちまちにあらわになる傷をうちに抱えたもの」という意味で「ヴァルネラブル」なのである

その意味において「私は強い（だからあなたは私を攻撃できない）とすごんでみせたり、私は弱い（だからやっぱり、あなたは私を攻撃できない）と被害者になってみせたりする前に」

わたしたちのだれもが置かれているだろう「この汚染された世界のヴァルネラビリティそのもの」に参加することが示唆されている

わたしたちがなにかに「関与」するということはそれぞれがヴァルネラブルな行為であって単に片方が加害者でもう片方が被害者だという単純な図式が成立しているわけではない

ソングが亡くなったのは二〇〇四年その名はとくに日本では忘れられかけているようだ

ソングはメディアや医療の現場に特別な興味をもっていたそうだがソングがまだ生きていて意図的に起こされている現在のワクチン被害の現状に直面したとしたらどんな批評言語で応えようとしたらだろうか

またソングは「物書きたるもの、意見製造機（オピニオン・マシーン）になってはならない」と言っているがChatGPTという意見製造機に対してどう応えただろうか

本書を読みながらそんな想像を試してみたりもした

個人的にいえば若いとき出会ったソングはどこか近づきがたくある一定の距離をとってきてもいてそれについて語ることもないままきいていたのだがようやくその存在の「ふるまい」といったものに興味をもつ余裕がでてきているところがある



■波戸岡景太『スーザン・ソング 「脆さ」 にあらがう思想』（集英社新書 2023/10）

必ずしも共感するというのではないのだけれどソングだったらあるいはソング的な視点からするとどんなふうに「書いた」だろうか

著者の波戸岡景太は「自己矛盾を前提としたアフォーリズムを書き連ねることで他者を救おうとするソングのあらがいが。そんな、ドン・キホーテ的ともいえるふるまいは、けれども、自己肯定を前提としたシンプルなスローガンをふりかざして他者を排除することをよしとするような、今どきの風潮にはそぐわないのかもしれない」というが

「今どきの風潮にはそぐわない」からこそソングのような「ふるまい」が切に求められているともいえるのではないか

●波戸岡景太『スーザン・ソントグ 「脆さ」にあらがう思想』（集英社新書　2023/10）

（「はじめに」より）

「実のところ、ソントグのような偉人は、（いそいでいて）そうはいない。もちろん、ソントグと同じくらい優秀な学歴をもち、ソントグと同じくらい刺戟的な文章を書き、そして、ソントグと同じくたいメディアに注目された知識人は、今も昔も存在する。けれど、ソントグのように自身の輝かしい学歴に背を向け、刺戟的な内容を絶妙な文章に磨き上げ、そして、メディアを利用して決してメディアに踊らされることのなかった人というのはとても珍しいのだ。

そんなソントグが亡くなったのが二〇〇四年。当時は、日本でもかなるの人たちが、ソントグの名前を口にしていたはずだが、あれから二〇年近くが過ぎようとしている今、世界的な再評価の高まりとは裏腹に、日本ではその名を耳にすることが減ってきたように思われるのはなぜか。

思うに、ソントグが背負ってきた一九六〇年代的なアメリカの「カッコよさ」（それはたとえば、大人たちが主導する文化をひっくり返すために、若者たちのバカ騒ぎの中に新しい価値観を見出すといったぐいの「カッコよさ」だ）が、今の日本ではあまり魅力的ではなくなってしまったということも理由の一つかもしれない、

あるいはまた、かつての若者文化がすでに賞味期限を迎えていることを宣言したり、がんやエイズのような難病治療にとって文学的表現は邪魔以外の何ものでもないことを告発したり、さらには、善悪の決めつけができないような紛争や戦争やテロに対してあえて一般的な感情を逆撫するような政治的立場を表明してみせたりといった、一九七〇年代以降のソントグが体現してきたもう一つの「カッコよさ」も、今の日本では流行らないからかもしれない。

とはいうものの、そうした傾向はあくまでも、「今の日本では」ということに過ぎない。類い稀なる知性と文才をもって生まれたソントグ自身の、若者から成熟した大人へと変わる精神的成長の記録とでもいうべき著作群は、その読み方さえ理解することができれば、混迷を深めていくばかりの世界と対峙しなければならぬ私たちにとって、明日を生き抜くための最高のツールとなるはずなのだ。」

（「第2章 「キャンプ」と利己的な批評家」より）

「物書きたるもの、意見製造機（オピニオン・マシーン）になってはならない————。先の章で引用したこの言葉は、「詩人はジュークボックスではない」というダドリー・ランドールの有名な詩句を意識してのものであった。ここに見られる機械と人間といった二項対立は、ソントグの批評活動においても重要な意味を持っている。というのも、ソントグが特別な興味を持ってきたメディアや医療の現場は、人間の文化的生活におけるテクノロジーの侵犯が顕著な領域であり、そこに表出する人間の意志や感情や苦痛や快楽といったものを論じることこそが、ソントグの仕事の大半を占めていたからだ。

たとえば、私たちは銃の引き金を引くようにしてカメラのシャッターを押すこともあれば、苦痛にゆがんだ他人の身体のイメージに自分の快楽を投影してしまうこともある。あるいはまた、日進月歩の医療テクノロジーを信頼すべき深刻な状況にあっても、ときに病名から連想される負のイメージの方を優先し、罹患したことを隠そうとしたりもする。

そうした矛盾を目にしたとき、「物書き」たちはいったい何を、どのように語ればいいのか。ソントグがその生涯をかけて探求してきたテーマは、端的に言って、人間存在が抱える「脆さ」（ヴァルネラビリティ）と、それが表出する際に身体と精神を襲う「苦痛」（ペイン、サファリング）であった。そしてそれは、機械と人間という二項対立が揺らぎを見せる場所————たとえば写真や映画————においてははっきりと観察されるものであり、だからこそソントグは、時代を何歩も先取りするかたちで、メディア空間を生きる私たちの「生」を論じてきたのである。」

（「第5章 『写真論』とヴァルネラビリティ」より）

「カメラというものは、それ自体が暴力と密接なつながりを持つものとされる。（…）以下に引用するソントグの『写真論』からのアフォリズムは、それをあまりに見事に表現している。

カメラは銃を理想化したものであるから、誰かを撮影することは理想化された殺人————悲しく、怯えた時代にぴっかりの、ソフトな殺人を犯すことなのである。

いやいやそれも詭弁だろ…………と、多くの（素朴な）写真愛好家たちは顔をしかめるかもしれない。だが、ソントグにしてみれば、他者のヴァルネラビリティへの関与をやめない暴力的なツールという意味において、カメラは銃と等価であった。そしてまた、こうしたカメラの暴力性は、惨劇もなく、観光地化もされていない、手つかずの自然の風景を撮影する場合においても例外とはされない。というのも、失われていく自然や、滅びゆく動物たちに向けられたカメラというものもまた、それらの美しさが傷つけられ、踏みじられ、そして失われていくことを知覚したいがために必要とされる道具であったからだ。

（…）

たとえ環境保護の名のもとに撮られた写真であっても、それを批評的に考察する際には、対象のヴァルター・ベンヤミンに対する撮影者の側の「関与」の姿勢————それは怯えなのかノスタルジーなのか————もまた徹底的に問わなければならないとソントグは主張するのである。」

（「第7章 反隠喩は言葉狩りだったのか」より）

「ソントグの言動は、生前よりさまざま論争を巻き起こし、その都度、彼女に対する不当とも言える解釈が生み出されてきた。だが、ソントグ自身、すでに第一批評集『反解釈』の段階から、こうした悪意ある「解釈」の垂れ流しが私たちの感受性を汚染するのであるとの警鐘を、あらかじめ読者に向かって鳴らし続けていたことは、ここで一度思い出しておくべきだろう。

解釈は、世界を貧しくし、消耗させる————そして「意味」に満ちた影の世界が立ち上がる、ただの世界だったものが、誰かに解釈されることで

（「第11章 ソントグの誕生」より）

「未来の苦痛にさいなまれないで————。ソントグの生涯とその仕事について語ろうとするとき、この言葉ほど示唆的なものは、あるいは他にないのかもしれない。ソントグの最後の批評集が『他者の苦痛へのまなざし』であったように、苦痛とは、ソントグの言論活動の重要なテーマだった。しかも、それは生きとし生けるものがそれぞれに抱える、あのヴァルネラビリティなるものを想起させつつも、それとは異なる、きわめて個人的な体験である。」

（「終章 脆さへの思想」より）

「ソントグの「あらがい」というのは、結局のところ、本質を見抜くふりをしながら相手を煙に巻く「解釈」や、ファインダー越しの今を愛でるふりをしながらも、シャッターを切ることでそれを過去のものとしてしまう「写真」や、はたまた、難病の原因を探るふりをしながら患者みずからの精神的墮落を責めてしまう「隠喩」といったものへの抵抗であった。

反解釈、反写真、反隠喩。これらの「反」が対峙するものを、ソントグ自身は「汚染」と呼んだ。ただし、私たちもよく知っているように、現実の環境汚染であっても、単純にテクノロジーを拒否して、そして自然回帰をすればよい、といったものではない。同じように、解釈や写真や隠喩といったものに抵抗しようとする際にも、解釈することそのものを放棄してしまったり、写真というテクノロジーを頭から否定してしまったり、さらには、隠喩といったものをある種のウソとして拒絶してしまったりすれば、それは単なる「思考停止」であって、知的生活はいよいよ「汚染」されてしまうことになるだろう。

そう、ソントグの「あらがい」を考える上で問題となるのは、いわゆる「知性」そのものへの抵抗が、そこに含まれるのか否かということだ。」

「一九六〇年代から二一世紀の初頭まで、ソントグの知性は、反知性主義との高度な緊張関係のなかで育まれ、そして成熟していった。ただし、生身の人間としてのソントグは、きっと、この世の清濁をあわせ呑むといった境地には、あえて辿り着こうとはしなかったのだろう。そうではなく生きとし生けるものが抱える内面の脆さと、肉体的な痛み、その両方に共感をし続けようとしたソントグにとって、この世の「濁」なるものを呑み下さんとする折の嘔吐（えず）きこそが、「物書き」としての最大のモチベーションとなっていたのである。自己矛盾を前提としたアフォリズムを書き連ねることで他者を救おうとするソントグのあらがい。そんな、ドン・キホーテ的ともいえるふるまいは、けれども、自己肯定を前提としたシンプルなスローガンをふりかざして他者を排除することをよしとするような、今どきの風潮にはそぐわないのかもしれない。」

「ソントグにとっては、文学も映画も演劇も写真も、およそあらゆる表現行為は、その対象行為は、その対象物が隠し持つヴァルネラビリティを顕在化させてしまうものとして説明される。もちろん、その顕在化のプロセスには技巧的なものもあれば、ハブニングのように無自覚なものもあり、同時にまた、その顕在化を隠蔽するプロバパングのような表現形態もある。

だが、いずれにせよ、誰かのヴァルネラビリティが人目にさらされようとしている現場には、文字どおりの「暴力」が介在しているとソントグは考える。そしてその暴力は、たとえば衰弱したソントグを写真に収めようとするパートナーの、悪意なき意志によっても発揮されてしまうものであった。だからこそ、いくら「あらがい」を実践しようとも、ソントグは、表現行為に伴う暴力を、その根本から否定したり、検閲したりということとはしなかった。

「人間の脆さとは何か」であるとか、「それを暴きたてる暴力の本質とは何か」といった問題設定も、ソントグにとっては魅力的なものではあったかもしれない。だが、そうした真理の探究めいた議論よりも、ソントグはむしろ、「死すべき運慶にあるもの同士は、芸術のような表現活動を通じて、いかにした互いの存在にアプローチしているのか」といった、不可逆な時の流れ身をさらしている者たちの関係性を明らかにする議論を好んだ。

つまり、たとえば写真を撮る者と撮られる者がいたとして、そこには確かに非対称な関係があるのだろう。しかし、その関係性をただ問題視すればよいかといえば、そうではないはずだ、というのがソントグの立場なのである。もちろん、一度ならず、二度三度とその関係性を転倒させてみることは大事だろう。だが、そうやって「関係性」というものそれ自体をためつすがめつ眺めてみたならば、私たちはきっと、そのどちらが本当に強いのか、わからなくなるはずなのだ。

本文中で何度となく引用した、「写真を撮ることは、他の誰かが抱える（あるいは他の事物が抱える）死すべき運命、ヴァルネラビリティ、移ろいやすさといったものに関与することである」というソントグの言葉は、まさしくこのことを語っている。結局のところ、苦痛にも代える他者にレンズを向け、シャッターを切る私たちは、そのファインダー越しに、みずからの死すべき運命を目撃している。誰かの苦痛は、たとえ間接的にであれ「私」によってもたらされたものであり、同時に、「私」もまた、そうした苦痛をもたらす誰かの意志や行為から無縁ではいられない。そうした現実を、ソントグは、（たとえその瞬間には見えなくとも）力が加わればたちまちにあらわになる傷をうちに抱えたものといった意味で、「ヴァルネラブル」であると表現したのである。

スーザン・ソントグの「脆さ」にあらがう思想。間違ってもそれは、脆さの本質を追究し、あわよくばそれを克服しようとする思想ではない。そうではなく、すべての存在が抱える脆さというものへのアプローチの方法を考えてみることを、ソントグは言葉を尽くした実践してきたのである。」

「かくして、ついにソントグを「発見」したあなたは知るだろう。私は強い（だからあなたは私を攻撃できない）とすごんでみせたり、私は弱い（だからやっぱり、あなたは私を攻撃できない）と被害者になってみせたりする前に、まずはこの汚染された世界のヴァルネラビリティそのものに、批評的言語という盾を携えて参加していただくことから、新世代のあらがいは始められるべきなのだということを。」